

# スパイウィッチと ウォーロックの遺児

haguruma03

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

1944年

第501統合戦闘航空によってガリアが解放され、第502統合戦闘航空団によって超大型ネウロイ「グレゴリー」が撃破された。

ガリアも解放と共に復興が進み、人々に希望が湧き始めた1945年の始め。

ガリアとロマーニャに挟まる世界で二番目に小さい国で、新型ストライカー達のデモンストレーションが開かれることになった。

その国はネウロイとの戦争によって寂れてしまった高級リゾート地、モナコ。

式典に伴いモナコに再び活気が戻って来るが、それは混乱をも呼び寄せる羽目となっ

た。

そんなモナコに呼び出されたブリタニア所属の一人のスパイウィッチが結局、欧州中を走り回ることになる話

\*二週間に1回更新

\*感想や評価をいただけると励みになります

\*追記

●2021年1月3日

第1章 完結

●新生活が始まり一時休止中です

# 目次

## 『起』 モナコ騒乱

1話	思い出と呼び出し	1
2話	伯爵と先生	19
3話	浮遊脚と睡眠薬	41
4話	502と騒乱の始まり	64
5話	ジェイミーとボンド	83
6話	拳打と銃撃	101
7話	顔なしとアシダカ蜘蛛	116
8話	自己紹介とフットボール	133
9話	ウォーロック計画とヤヌス	163

10話	JICとMI6	180
-----	---------	-----

『承』 ガリア策謀  
第1章までのあらすじとキャラクター

紹介		216
----	--	-----

1話	徒歩と昼寝	225
2話	パンとスープ	242
3話	賞金首と夜の訪問者	263
4話	王党派と魔導針	283
5話	鼠と偽造	305
6話	パリと契約	329

# 『起』 モナコ騒乱

## 1話 思い出と呼び出し

1.

雪が見える。

分厚い雲に覆われた暗いオラーシヤの空。

オラーシヤ帝国には珍しくもない曇り凍えるように寒い、そんなある日。

日光が防がれ日の暖かさは消え去り、残るのは寒さ。ハラハラと雪が大空を舞う。

本来ならば燻んだ空の黒と、寒さを象徴する雪の白が舞うだけのはずのそんな空には、その2色以外の光が瞬いていた。

青白い閃光と火薬が破裂するオレンジ色の閃光。

その二つの色が何十何百と光を放ち瞬いていく、

火薬の光を、マズルフラツシユを振りまく二人のウイツチ。

それに対抗するのは不気味な排気音を立てながら飛行する巨大な怪異。

その怪異は二人のウイツチによる苛烈な銃撃を受けながらも、一向に怪我を負った様子を見せず、逆に身体中についた機銃で反撃を行なっていく。

身体中についた大型機銃から放たれる閃光は青白く途切れることなく繋がる。

その攻撃は苛烈であり、たとえシールドを持つているウィッチでもその攻撃を長く受け止めることはできないと容易に想像ができる死の光。

通称『ディオミディア』と呼ばれる怪異からの青白く光る機銃の攻撃を、たった二人のウィッチはそんな死の光の中に身を投じながらも、なんとかかわし続け反撃を続けていた。

金髪をオールバックに固め、猫耳を生やした幼顔のウィッチが持つトレンチガンが火を噴き散弾がばらまかれる。

するとディオミディアの体表に着弾すると同時に大量の小規模の爆発がおこる。

散弾が榴弾のように爆発するというありえない現象。だがその現象を起こしたウィッチは当たり前のようにそれを見つめ、再び手に持った愛銃で攻撃する。

爆発に疑問を抱くわけがない、なぜならばこれが彼女の固有魔法なのだから。

もう一人のウィッチである黒髪長髪で頭にカラスの羽を生やしたウィッチが持つ重機関銃が火を噴く。

毎分700発の12・7×81弾が怪異の体に突き刺さっていく。

重さ63ポンドであり、人が手に持つて打つべきではない重機関銃を手に持ちブレもせず正確に打つ姿は空に浮かぶ対空砲を思わせた。

爆発する散弾。空を飛び回り正確に射撃される重機関銃の攻撃

そんな摩訶不思議を引き起こすことができるウィッチたちによる決死の攻撃。

だがそんな攻撃もディオミディアの防弾装甲により致命傷になりえず、逆に相手による倍返しのような攻撃が帰ってくる。

二人のウィッチは分かっていた。この巨大な空の怪物を二人だけで落すことは不可能であると。

だが二人は無駄と分かっているにもかかわらずできなかった。

それはこの怪異の進路上には、オラーシャ帝国が誇る大型ダムと街が存在しているからだ。

この怪異の一番の凶悪な点は身体中につけられた大型機銃でもその防弾装甲でもない。

この怪異は超大型爆撃機なのだ。

そんな爆撃機を通してしまうと、そのあとに残るのは爆撃によって廃墟となった街と崩壊したダム。

最悪の場合、爆撃だけではなくダムの崩壊によって起こる水害によって多くの人命が

失われてしまふだろう。

そんな人命の危機なのだが、それを防ごうとしているのはたつた二人のウィッチ。しかも、彼女たちはオラーシャ軍所属ですらなく、オラーシャ人ですらなかつた。

彼女たちはブリタニアの秘密情報部に席を置くウィッチたち。

スパイと呼ぶべき彼女たちは、本来ならばこういつた表立つた戦闘などしないはずであつたが、こんな寒地でまさかのデイオミディアを一番に発見してしまい、その際に辺りにデイオミディアを止める存在がいなかつたため、こうして2人で戦っている。

潜入した敵地での戦闘行為。

これは正体が露見しかねない危険な行為であり、秘密情報部の身を置く存在としては失格な行為であつた。

だが、彼女たちはまだ幼いと同時に人類を守るための存在であるウィッチである。

たとえ表立つて戦えぬ薄暗い組織に身を委ねているといえど、迫る脅威を無視し人々が殺されるのを放つて仕事に専念できるほど人ができているわけでもなかつた。

それに、別に完全に正体が露見するわけでもない。

オラーシャ軍が来るまでこの怪異の足止めをすればいいのだ。オラーシャ軍が来れば、あとを任せて離脱すればいい。



そう秘密情報部に席を置くウィッチは考え、今こうして戦っていた。

トレンチガンを打ち続けていた幼顔のウィッチが、自身を狙う機銃の数が集中したのを確認するとすぐさま距離を離し離脱を開始する。

当たれば死ぬ機銃の攻撃が次々に放たれる。そんな光にライトアップされ、おびただしい死の光に狙われながらも、回避機動を取りながら狙われたウィッチは急速にディオミディアから全力で離脱する。

その表情にはすぐそばに迫る死に対する恐怖と、殺意を向けられたことによる怒りが映されていた。

その怒りによるものなのか、彼女は離脱のさいに最後っ屁のように怪異に対して攻撃した。

しかし全力で離脱を行ったせいで、すでにトレンチガンの有効射程距離を離れてしまっており、怪異の巨大な体にすら発射された散弾がわずかにしか当たらない。

散弾が着弾した瞬間再び起こる小規模の爆発。

しかし、その爆発による煙が晴れた後に見えるディオミディアの肌は無傷であった。

そんな現状に幼顔のウィッチは舌打ちして猫耳を苛立っているようにピクピクト動  
かす

「あー！もう！もつと射程の長いトレンチガンはないの！？有効射程600ヤードぐらいのやつ!!」

そんな無理難題の呟き

そんな独り言に対しての返信が彼女の耳につけたインカムから聞こえてきた

「だから、あれほどまともな武器を使えっつていつただろうジエイミー？」

心底呆れている声。

ジエイミーと呼ばれた幼顔のウィッチは、自身の相棒に向けてインカム越しに反論した

「うるさいわよアレン！潜入作戦なのにわざわざそんな重機関銃を持つてくるバカには言われたくないわよ！」

真つ当な反論。そう彼女たちは一応スパイなのだ。

それに今回の任務も大規模破壊行為を行うのが目的ではないし、こんな大型銃器が必要な作戦でもない。

そんな真つ当な反論に対してアレンと呼ばれた重機関銃を派手に打ち続けるウィッチは少し思考してから言い訳を言う。

「……これは拾い物だ」

「どこに重機関銃が落ちている国があるのよスカポンタン！」

大空に銃撃に紛れて罵倒が響く。

当たり前の反論を言われてもアレンはまだ言い訳を諦めなかった

「持ち込む武器と酒ぐらい好きに選ばせてくれてもいいだろう相棒?」

「持つてくるもの選べって言うてるでしょ!!しかもその銃ブリタニア製でしょ!?ここはオラーシャよ!身元がわかるもの持つてくんない!」

阿吽の呼吸のような言葉の応酬。コメディアンのような言い合い。

「ここが舞台ならば、評価されていたかもしれないが、ここは死神が這い寄ってくるような死の空。」

今もなお、そんな会話をする二人のウィッチに対して死の光が瞬いている。

こんな会話をする彼女たちも余裕があつてこんな会話をしているのではない、こんな空気の読めない会話をして心を平穩に保たなければ、デイオミディアの真横といういつ死んでもおかしくない場所に留まり続ける事ができないからだ。

「それにしてもオラーシャ軍はまだなの!?!ボランティア活動もいい加減限界よ!色々と可笑しいわよ!」

ジェイミーの苛立ちが募る。

ジェイミーはデイオミディアから離れてから、自らの持つトレンチガンのリロードを終えると再度突入するために空中で姿勢を整えた。

未だディオミディアは健在。やはり二人ではこの存在を倒しきることはできない。

それに今二人が履いているユニットは潜入と移動距離に機能を重視したユニットのため戦闘向きではないのだ。

そのため、攻撃に魔力を重視しても火力は伸びず、攻撃に集中しようにも戦闘用ユニットのような機動力がないためいつも以上に回避機動に意識を割くことになりなかなか攻撃ができない、しかも相手がディオミディアという機銃の塊のような存在が相手となってしまうっては回避が主体となってしまう。

そのためこうやって二人でディオミディアの前を飛び回り、隙があれば攻撃をしようとうちよっかいをかけて移動を妨害しようとしているが、かの怪異は目の穴飛び回るウィッチ達を無視して航路も変える様子はない。

そしてすでに戦い始めて10分は経ってしまっている。

これほど長く戦っているのだ。近くに基地はないとはいえ、この戦闘による光や音は近くの町に聞こえているはずだ。

そこから情報は軍に伝わっているだろうに、一向に軍からの通信や動きが見えない。

可笑しい。異常である。ジェイミーの胸中に疑念が湧く。

「まあ、こんな低温の地域にディオミディアが湧いて出てくるなんて、オラーシャも思わなかったのだろう。だから動きが遅れているのかもしれないな」

そんなアレンの返答がインカム越しにジェイミーの耳に聞こえた

ネウロイは水と低温を嫌う。そんなは当たり前のことであり、だからこそ人類はネウロイとまだ戦えているのだ。

だからこそ、こんな寒いオラーシヤの土地にデオミディアが突然湧いて出てきたことが驚天動地の事態なのだ。

だからオラーシヤ軍も先手を取られ混乱し、動きが置かれている

確かにその通りだろう。

だとしてもだ。

「そうだとしても、おかしいわよ……ここはネウロイの占領地の目の前じゃなくてオラーシヤのど真ん中、ネウロイとの前線のはるか後方なのよ！」

そうここは、オラーシヤのとある土地。前線のはるか後方。

こんな土地にデオミディアが現れたのだ。怪異が来るとするならば前線を突破した場合であり、それならば前線を守るオラーシヤ軍が確認して、追って来るに違いない。

だが、その存在は見えず、見えるのは湧いて出てきた目の前の怪異のみ。

前線から来たのでは無いならばこの怪異は一体どこから湧いて出てきたのか？

ジェイミーの疑念は尽きない。

この状況には何かある。ジェイミーの胸中にはその確信があった。だがしかし

「確かあやしいな。だがそれは今は後回しだろう相棒？」

アレンの冷静な声がジェイミーの耳に響く。

その声を聞きジェイミーは現状に対して混乱し、死に対して怒っていた思考を正した。

確かにアレンの言う通りである。

この疑念の答えを導く前にやらなければならないことがある。

オラーシャ軍は未だ来ず。このディオミディアがどこから湧いたのかはわからない。

これは確かに事実であり、疑問点だ。

だがそれは、この目の前の怪異を止めてから考えるべき事だ。

この存在を通してしまえば地獄が広がってしまう。

それは絶対に止めなければならないことであつた。

そしてこの存在を止めるためには全力で集中して戦わなければならない。

余計なことを考えている暇はない。

ジェイミーはそう答えを出し、深呼吸をして落ち着いて、ディオミディアを睨みつけ

る。

未だ敵は健在。コアの場所はわからず悠々と飛行しておりその攻撃は衰えない。状況はかなり悪い。だがやらねばならないのだ。

ウィツチだからやらなければならないのだ。

「アレン。今からまた突貫するわ。奴の外皮を私のトレンチガンでボロボロにするから援護して」

手当たり次第外皮を破壊してコアを探す。

その行動を行うことがジェイミーの意を決した声で紡がれた。

「コアの炙り出してわけか。了解したが……この弾幕だ。かなりきついぞ？」

アレンがジェイミーを心配する。

今までは回避だけに集中していたからどうにかなったのだ、それを變えて突貫しディオミディアの機銃の針山に突撃するという無茶。

確かに外皮をボロボロにすればコアも見つかるとも思えないがリスクであった。

そんな心配を聞超えてもジェイミーは考えを變えず答える。

「大丈夫よ。それにこのままじゃ埒があかない。仕様がないでしょ。このまま回避重視で戦っても足止めは無理、なら攻撃重視でいくしかないでしょ」

その答えを聞いてアレンは苦笑した。

意を決した勇敢なジエイミーの声。だがその声がかすかに震えていることをアレンは長年の付き合いから認識することができたのだ。

この震え声をアレンは指摘しなかった。

自分よりまだまだ年の若い彼女がここまで勇氣を出してやろうとしているのだ。これを指摘して彼女の勇氣ある行動を止めると言うのは野暮というもの。

それに彼女の固有魔法とトレンチガンの組み合わせによる殲滅力ならば外皮を瞬く間に削り、うまくいけばそのままコアを見つけ破壊することも可能かもしれない。

ならば、相棒である自分がやるべきことは、今震える彼女の後押しして、震えを和らげるのみ。

「そういえばお前が前の作戦の時に食ったフォーチュンクッキーの内容覚えてるか？」

アレンはディオミディアから一度離脱しながら、ジエイミーに質問した。

突然の話の切り替え。それにジエイミーは混乱する

「はあ？いきなり何をいって……」

「いいからさ、どんな内容だったか覚えてるか？」

ジエイミーの困惑を端に起き、アレンは話を続ける

それを聞き答えなければ話が進まないと認識したジエイミーは答えた。



「確か、あなたは良き運命に恵まれているとか書かれていた覚えが……」

その答えを聞きアレンは笑った

「なら、今から突貫しても大丈夫だな」

「はあ？」

ジェイミーから呆れた声が聞こえる。それでもアレンは言葉を紡いだ

「私の信じている理論を教えておこう」

「何？」

ぶっきらぼうなジェイミーの声のアレンの耳に聞こえる

それが震えを隠すためのものと分かっているアレンは、その仕草に愛らしさを感じる  
と共に自らの無茶苦茶な理論を教えた。

「物事の半分は幸運によって決まる」

「なら残りの半分は？」

「運命さ」

「なによそれ」

ジェイミーから再び聞こえる呆れた声。

だがまだ話は終わらずアレンは言葉を続ける。

「つまりは、この世の全てはコントロールできない幸運と運命でできている。だから、私

と組む幸運を得ているお前が、占いでいい運命に恵まれていると言われたお前が今日ここで死ぬことはないさ」

アレンが無茶苦茶な理論が語られると、先ほどまで言葉の応酬が続いていたインカムごしの会話に一拍の空白が訪れた。

その空白が終わるとともに、小さな笑い声が聞こえる。

ジェイミーの笑い声だ。

「なによそれ。無茶苦茶じゃない」

「そうだ。無茶苦茶な理論さ」

二人のクスクスとした笑いがインカムにこだまする。

そして二人は笑い終わると、一体の怪異を睨め付ける。

「じゃあ、アレン行くわよ」

「ああ、行こう相棒」

アレンの無茶苦茶な励ましで意を決したジェイミーはアレンの援護と共にディオミディアに突貫する。

吹雪のように吹き荒れる、ディオミディアの大型機銃。

それを針の穴を通り抜けるが如く飛び回り、トレンチガンの射的距離まで近づく。

近くのも難しい機銃による防衛網。

だがアレンが的確に機銃に攻撃し、その防衛網に綻びを作り出す。そしてついにジェイミーは防衛網を抜け、トレンチガンを構えた

ジェイミーの表情は口角を上げ、ニヒルに笑っていた。

そして彼女は口を開く。

「BANG！」

2.

ガタンゴトンと列車が揺れている。

そんな列車の車内では客たちが思い思いに移動時間の暇を潰していた。

そんな乗客の一人、10代後半の少女が座席に座り眠っている

だがガタンと列車が大きく揺れ頭を座席に強くぶつけた。

すると彼女は頭を押さえ呻きながら目を覚ます。

手痛い起床。だが、昔の辛い過去を夢で追体験していた彼女にとってはある意味不幸

中の幸いであった。

彼女は、ハアとため息をつき、ふと気がついた。

いつのまにか自分の膝の上に新聞紙が乗っつけられている。

彼女はそれが偶然ではないと確信し、新聞紙を広げる。内容はいたって普通のブリタニアの新聞。

だが見るものが見れば、いくつかの英単語に小さなマークが付けられているのがわかる。

見覚えしかない暗号。自らの仕事場で常日頃から使われている暗号であった。

それが、膝下に置かれた新聞に付けられている。

つまりは、仕事の指令である。

彼女はそう認識し内容を確認していく。

マークがつけられた単語を頭のなかで並べ、その暗号を解いていき、一つの文章と  
なった。

『モナコにて怪しい動きあり、至急合流されたし』

その文章を見て彼女は思考した。

『モナコ』

ガリアの地中海沿岸地方コート・ダジュールのロマーニヤとの国境近くに位置する都市国家であり、世界で2番目に小さいミニニ国家

その歴史はガリアやロマーニヤ、ヴェネティアと深く結びついている。

昨今、501の活躍によってガリアが解放された後、ガリアやロマーニヤ、カールス

ラント、果てはリベリオンによる政治的いざこざがモナコで起こっているとは同僚から聞いてはいた。

それだけではなく、欧州の技術が集められて作られた新たなユニットのデモンストレーションが近頃行われると聞いている。

まさかというか、やはりというか、三枚舌と揶揄される我が国は、このいざこざに首を突っ込むらしい。

下手をしたら、いや下手をしなくても、政治的いざこざが行われている都市国家では各国の同職が集まる地獄のパーティーが開かれることになるだろう。

しかも最新のユニットのデモンストレーションときた。

厄ネタが満載だ。

その事実には再び彼女はため息をつく。

だが、いくらため息をつこうが、仕事が逃げていくわけでもない。

そう彼女は考え、落ち込む自信の心をなだめながら新聞を折りたたもうとした。

だがその手が止まった。

よく見ると暗号の続きが書かれていたのだ。

彼女はそちらに視線を戻し、暗号を読み解き、そして驚いた。

その暗号は今回の自らのコードネームについてであった。

作戦ごとに変わる自らのコードネーム。それにはもう慣れているし別にどんな名前でも彼女には構わなく、驚きもしない。

だが、今回のコードネームには見覚えがあった。

このコードネームを使ったのは六年ほど前の1939年のオラーシャでの作戦。

自らの相棒であり、先輩であるウィッチを亡くしてしまったあの作戦でのコードネームであった。

彼女は先ほど見た夢を思い出しながらも思う。

『ああ、だからあんな昔の夢を見たのか』

懐かしく苦く辛い思い出に、列車の窓から見える景色、そのはるか先のオラーシャに向けて思いを馳せながらタバコを取り出した。

五年ぶりのコードネームを得た少女

『ジェイミー・ボンド』の名を得た彼女は、カスタムメイドのタバコをふかしながらその行き先をモナコに向けるのであった。

## 2話 伯爵と先生

1.

モナコ、それはヴァチカンに次ぐ世界で二番目に小さな国

第10代モナコ大公シャルル3世によつて1861年に領土の95%をガリアに売却することによつてモナコ公国の主導権を回復し完全独立した国である。

元々は漁業以外にこれという産業のない小さな港町であつたが、大公が「わがモナコにはこの美しい景色がある。これこそ神がわれらに与えたもうた何にも代えがたい恵みだ。これを売り物にして、モナコをどこにも負けぬ一大リゾートに作り変えよう。」と考へモナコを大規模なリゾート地へと変化させていった経歴を持つ。

その変化は凄まじく、富裕層向けの高級ホテルや宮殿のような建物の国营カジノ『グラン・カジノ』を作り出し、多くの富裕層を虜にしていった。

これらのホテルやカジノを作り出すことができた資金は借金ではなく全て領土売却時の資金で賄われており、借金をせずにモナコは小さな港町から高級リゾート地へと変化を遂げたのだ。

多くの数えきれない人々たちがモナコのカジノに集つて大金を賭け、大儲けした者、

逆に財産をすべて失って破産した愚かな者が現れては消えてった

だが、それもネウロイの出現によって話が変わる。

第二次ネウロイ戦争により、欧州の様々な国がネウロイによって占領され、リゾート地で遊ぶような余裕は人類には無くなっていった。

それだけではなく、モナコに湯水のように金を落としていた富裕層たちもモナコを訪れる事は無くなっていき、高級リゾート地であるモナコは直接ではなく間接的にネウロイによって滅びを迎えようとしていた。

もはやこれまでかと、モナコの人々が嘆いた時、一つの英雄がモナコを救った。

それは501統合戦闘航空団。通称ストライクウィッチーズ

彼女らの活躍によりガリアは解放され、多くの人々がガリアに帰ってきたのだ。

ガリアの奪還と復興。これは隣国であるモナコにとっても救いであった

だが幸運はそれだけではなかった。

502統合戦闘航空団。通称ブレイブウィッチーズが超大型ネウロイ「グレゴリー」撃破に成功

相次ぐ戦争の好転。人類による反抗、これらの希望に浮かれた人々を、そんな好機をモナコが逃すわけがなかった。

モナコは各国に手を回し、モナコ復興のために動きに動いた。



その結果、モナコにて各国の最新鋭の航空機がデモンストレーションされる式典が開かれることになったのだ。

それはただの式典ではない。ガリア解放という長く苦しい戦いを戦ってきた人々への、これから行われる人類のネウロイへの反抗のため英気を養うための慰安も含まれていた。

数年ぶりに人々が賑わうことになるモナコ。その事実によくの人間が喜び街に活気が戻ってきている。

活気が戻ってきたのは良いことだろう、だがその活気とともにモナコは人間の澱んだ欲望も引き寄せることになる。

## 2.

時刻は夜。本来ならば静けさを伴う時刻であるはずなのに、そこは様々な音や明かりに満ちていた。

多くの人々が集まった宮殿のような建物

その中は天井が高くシャンデリアで照らされた巨大で広い空間があった。

不夜城のように煌々と照らされるライト、回るスロット、溢れるコイン。

配られるカード、大勝に喜ぶ声と、大敗に膝を屈して嘆く声。

人々の欲望渦巻くカジノがそこにはあった。

人々が喜び嘆き熱狂して、湯水のように金が動いていく。

賭け事に一喜一憂する彼らの服装は皆変わらずドレスコードを守っており、この場にいる人間たちが富豪であり上流階級の人間であることが容易に想像することができた。

そんな中一人の給仕がワイングラスを乗せたトレイを持ち歩き回っていた。

まだ年若い10代前半の少女の給仕。本来ならばこんな大人の欲望渦巻くカジノなどには似合わない子供。だが今の世界は戦時中であり、子供ですら働くことに違和感を抱く事はない時代。誰もその様子に違和感を抱かず給仕からワインを貰っていく。

そんな少女に対してワイングラスではなく、少女の臀部に伸ばす手が現れる。

熱心に仕事をする少女に気がつかれないようにソツと動く卑猥な腕。

だがその手が臀部を触れようとした時その腕は別の腕によって掴まれた。

捕まえた腕の持ち主は、今臀部を触られそうになった少女本人。彼女はトレイを片手に持ち、残された片手で後ろから伸ばされた腕を見ずに掴んだのだ。

少女は振り返り、ウインクしながら下手人に告げる

「お客様〜？おさわりはダメですよ〜？」

こういったことに慣れきっているような少女の反応。そんな反応を向けられた下手

人はニヤリと笑う。

その下手人は革靴を履きスーツをぴっしりときた女性であった。

175cmはあるような長身と短めに切りられた金髪の女性。

はたから見れば、ボーイッシュな雰囲気と優雅な振る舞いで若い男の伯爵を連想させる立ち振る舞いだが、先ほどの行動とニヤリと笑う表情から軟派ものであることが一目でわかる。

軟派ものは咎められてもなお、軽口を給仕に向けた

「それは申し訳ない。あまりに可愛らしいおしりがあつたから、ついボクの腕が動いてしまつてね」

反省一つないセリフ。

咎められているのにもかかわらず、開き直るかのような言い分

口説き文句にはあまりにひどい言い分ではあるが、彼女の優雅な立ち振る舞いと端正な顔のせいでその言い分にユーモアを感じさせる。

そんな口説き文句を吐かれた給仕はクスクスと笑う。

「どんなに可愛くても、私はお仕事ですから」

「じゃあ仕事が終わればいいのかい？」

軟派ものが給仕に詰め寄る。

先ほど尻を触ろうとした腕は今度は給仕の方に乗せられていた。

軟派ものの端整な顔が給仕に近づけられる。端整な顔が近づけられ情熱的に自らを求めてくる。そんな軟派ものの行動に、先ほどまで余裕の表情を見せていた給仕も少し頬を赤らめ目を見開く。

そんな可愛らしい反応を見た軟派ものは、内心舌なめずりをする

「答えを聞かせてくれるかい？子猫ちゃん」

軟派ものの腕が給仕の顎に触る。

ロマーニヤじみた情熱的な光景。

ラブロマンスの始まりを彩るような場面。

可愛らしい給仕と優雅な伯爵のラブロマンス。

だがラブロマンスはすぐにコメディへと変貌した。

バシンという音とともに軟派ものの背中に扇子が叩きつけられる。

軟派ものは突然の衝撃に少し飛び上がりイタタと呻きながら背筋をさする。

給仕は突然の事に、驚き目を瞬かせる。

すっかり情熱的な雰囲気は消え去っていた。

「なにやっているのよ。ニセ伯爵」

軟派ものが振り返ったそこには身長が150cmほどの小さな銀髪の少女がいた。

肩までの銀髪に小さな体。そんな子供のよな体だが、ドレスと手に持った扇子、そして立ち振る舞いから子供ではないことが容易にわかる。

その彼女が、絶対零度のよな視線を軟派ものに対して降り注いでいた。

絶対零度の視線を向けられた二セ伯爵と呼ばれた軟派ものは誤魔化すよなに笑みを浮かべ口を開く。

「あ、あれ？先生、さつき移動で疲れたからからホテルで休むって言ってたじゃないか？なんでここに先生が？」

まるで浮気の場合を見つかってしまった亭主のよな言動。

その言動に対して、これもまた浮気現場を見つけた妻のよな表情をした先生と呼ばれた少女、エディータ・ロスマンは答える

「あなたが散歩に行つて来るって言つて、何故か正装しながら出て行つたのを疑問に思つたから尾行してきたのよ！」

目尻を釣り上げて放たれる一言。

怒気が混じつた叱りつける声。

だがそんなコメディのよな一幕を見ていたあたりの人々たちは思う。

『いや、尾行しにきたにしては随分と気合の入つたドレスだな？！』

ロスマンの衣装は銀髪が映える白のドレス。そのドレスは肩が完全に見える肩だし

ドレスであり、彼女の雪のように白く丸い肩が外気に晒されている。

幼く見えるような小さな体。だがその立ち振る舞いとそのドレスにより大人の色気を醸し出している。

まさに彼女のために用意されたような似合ったドレス。似合ったコーディネート。

彼女のことを知っているウィッチなら「ロスマン先生どうしたんですか!? 風邪ですか!?」と驚くような大人の色気を醸し出す服装。

突発的な尾行で用意できる服装ではなく、明らかに前々から準備されていた服装。

雪のように白いドレスを着た銀髪の彼女の横に立つならば、白を包むような黒のスーツを着た容姿端麗な金髪の人物にちがいない

そして、それが誰だか、周囲にいる人々にとっては、今の状況を見る限り一目瞭然であつた。

そんな生暖かい目で見られている事に気がつかないのか、彼女は目の前の軟派ものに説教を続けていた

その状況の中、あまりに唐突な空気の変化、状況の変異、先ほど情熱的に自分を口説いていた軟派ものが肅々とドレスを着た女性に説教をされているという状況についていけない給仕はポカんと口を開け、呆然とその様子を眺めている。

そんな彼女にロスマンは気がつき、慌ててコホンと一息つき給仕に向かって頭をさげ

た

「ごめんなさい。同僚がお仕事の邪魔をしまして」

角度90度まできつちりと振り下ろされた頭。軍人じみた正確な礼。

いきなりしつかりとした礼を向けられた給仕は、先生の謝罪の言葉に対して慌てて給仕は答えた

「い、いえ。構いませんよ」

軟派ものを怒っている姿とは全く違う礼儀正しい姿。

おそらくこれが本来の彼女なのだろうと給仕はわかり、それと同時に同僚のやらかしに頭をさげる彼女はいい人なのだ、その同僚に苦勞しているのだとわかった。

そしてそんな苦勞させている人が何をしているかという

ロスマン先生の説教にひと段落ついた途端に、給仕に向けて流し目を向けウインクを送っていた。

喉元過ぎればなんとやら、反省のはの字すら見受けられないその行動。

給仕は「アハ、ハハハ」と苦笑いを浮かべ、ロスマンのこめかみには青筋が立つ

ロスマンはすぐさま軟派ものの襟首をつかむと、ズンズンとカジノの出口に向けて歩き始めた。

「帰るわよクルピンスキー」

唐突な帰還命令。軟派もの、ヴァルトルート・クルピンスキーは引きずられながらも、その言葉に文句を垂れる。

「そりやあ酷いよ先生。今回は慰安旅行だったはずだよ。」

「あなたねえ……。それは、式典が終わってからのでしょう。来るなら仕事が終わってからここに来なさいっ！」

「そうだけど式典は明日。つまり仕事は明日だよ？」

「それなら明日のために体を休めなさいっ！到着してすぐにカジノに来る人がいますかっ！」

ロスマン先生の一喝。その答えにクルピンスキーはやれやれと首を横に振り、改めて先生の姿を足の先から頭の先までをまじまじと見る。

その舐め回すような視線にされされたロスマンはジロリとクルピンスキーを睨んだ

「何……？」

「綺麗だよ。パウラ」

突然の愛称呼び。その声色は情熱的なロマーニヤ人顔負けの甘い声色であり、そしてそんな甘い声と共にクルピンスキーは情熱的な視線をロスマンに向けた。

突然の事に、ロスマンは一瞬ポカンとした後、顔を真っ赤に染め口をパクパクと動かす。



真つ赤に頬を染めた白いドレスの少女の様子にあたりの見物人から黄色い声が上が  
る。

そんな声に正気を取り戻したのか、ロスマンはキリリと目尻を再び上げてクルピンス  
キーを睨みつけた

だがクルピンスキーはロスマンの睨みに対してにこやかに笑う

「どうやら見せつけてしまったようだね」

「つもうー」

ロスマンはそんな一言を吐く共に耳まで真つ赤にして再びクルピンスキーを引きず  
り始める。

そうして最後の一幕を引き起こした張本人のクルピンスキーは、ロスマンの照れ隠し  
に満足しながらも先ほどまでちよっかいをかけていた給仕に向けて投げキユスをしな  
がら引きずられ人混みの中に消えて行った。

コメデイのような痴話喧嘩。コメデイのような去り方。

離れて行つても、カジノの騒音に紛れてまだ微かに聞こえる二人の言い合い。

その様子を呆然と見つめていた給仕の肩に背中から手が置かれた

給仕が驚き後ろを振り向くと、そこには上司であるチーフマネージャーがいた。

彼はどこか哀れみを給仕に向けながら口を開く。

「痴話喧嘩に巻き込まれて疲れたろう……。今日はもう上がっていいぞ」  
給仕はその言葉に甘える事にした。

## 3.

今日の仕事が終わった給仕はカジノの中にある従業員室で一息ついていた。

「は〜つかれました〜」

そんな呑気なつぶやきが従業員のロッカールームに響く。

このロッカールームは女性用のロッカールーム。主にバイトで働いている子たちの着替え部屋でもある。

まだ仕事中的この時間、そんな時間にこの部屋にいるのは彼女しかいなかった。

そうそのはずであった。

「おつかれさまです」

「随分と楽しそうでしたね」

給仕のつぶやきに対して二つの返答が聞こえる。

給仕はその返答に驚いた様子を見せ、その声が聞こえた方向を見た。

すると二つのロツカーがギイという音を立て開く。

ロツカーの中から出て来たのは二人の少女。

彼女たちは瓜二つの顔をしており、髪型も両者共に同じ綺麗に短く切りそろえられたおかつぱ、そして服装も全く同じのありきたりな少女服であった。

彼女たちはピクリとも表情を動かささない無表情で給仕の少女を見つめている。

ロツカーが立ち並ぶ部屋に突然現れた二人の少女

そんな突然の双子の来訪者に給仕は口を開く。

「あれ〜。ここは従業員室ですよ〜どうやって入って来たんですか〜？」

間延びした声が部屋に響いた。

能天気な給仕のその返答を聞き双子同士は目を見合わせる。

慌てていない給仕に驚いているのか？

それは否である。

双子はしばしの思考の後、給仕に対して答えた

「安心してください。この部屋に盗聴器はありません」

「安心してください。すでに確認済みです」

給仕の質問の答えになつていない答え。

会話のキャッチボールが暴投している答え。

だがそんな答えが紡がれると変化がおこった。

給仕がはあと息を吐くと、足を組みながら従業員室の椅子にドカツと音を立てて座つたのだ。

それは先ほどの給仕とは思えないような仕草

その仕草と共に先ほどまでの給仕の呑気な雰囲気は消え、どこか大人びた雰囲気が漂う。

だがそんな変化があつたのにもかかわらず双子はそんな様子の給仕を何事もなく受け入れる。

なぜならば、彼女たちにとってはこれが普通だったからだ。

「随分、役にはまっていますね『ジェイミー』」

「伯爵』に口説かれて嬉しそうですね『ボンド』」

双子は先ほどまでの無表情を少し崩し、微かに笑いながら給仕、いや給仕に扮していた『ジェイミー・ボンド』に告げた。

その言葉に対してジェイミーもまた微かに笑いながら双子に答える。

「こっちは、真剣に役にはまり込んでいたの。からかうのはやめてよね」

その口調と表情は先ほどの給仕とは全くの別人であつた。

なぜブリタニアの秘密諜報部に所属している彼女がカジノの給仕をやっているのか？

それには理由がある。

それはとある人物への監視指令が下されたからだ。

その人物はブリタニアの富豪『アーカーディ・ジョン』

巨額の富を有している富豪の一人であり、今回モナコで行われる『最新鋭航空機のデモンストレーション』でお披露目されるうちの一つである新型ストライカーユニット『タイガー』の研究において多額の出資金を寄付している人物であり、『タイガー』のデモンストレーションにも出席するという。

そんな人物がなぜ監視されるのか。それは彼が数ヶ月前に拘束されたトレヴァー・マロニー大將が行なっていた研究の出資者の一人でも会ったからだ。

トレヴァー・マロニー大將が行なっていた研究。それはウィッチに頼らない新しい新戦力『ウォーロック』。それはマロニー大將がウィッチ達の存在意義を失墜させ、代わりに自らが世界の軍事バランスの中心に立つという野心が生み出した兵器であった。だがその結果はウィッチに代わる人類の新たな守りの翼として開発した兵器が、皮肉にも人類の敵に転じてしまうという最悪の結果に終わり、『ウォーロック』の存在は闇に葬られた。

そして、今のブリタニアでは、マロニー大将の派閥、『ウォーロック』に関わった人物の『お掃除』が始まっている。

おそらく今回の監視は、『アーカーディ・ジョン』はその『お掃除』の対象になるかならないかの判別するための行為なのだろう。

そんな彼、『アーカーディ・ジョン』の経歴は、年齢は53歳。家族はおらず未だに独り身。

戦争が始まる前はよくモナコに遊びに来てカジノで豪遊していた経歴がある。

この経歴から、彼はモナコに訪れたのならカジノに向かうと推測がなされ、そのためジェイミーは彼がカジノに来た時の監視役に抜擢され、彼が訪れるであろうカジノに潜入したわけなのだが、その推測は外れることとなった。

「それにしても彼、一向にカジノに来ないわね……」

ジェイミーがはあとため息をつく。

そう、『アーカーディ・ジョン』はこのモナコに数日前に着いてから一向にカジノに顔を出さないのだ。

それどころか他の監視員の話を聞く所によると、彼は宿泊中のホテルから一向に出て

こない。

怪しい、怪しすぎる。

だが下手に動きすぎると彼に存在がバレてしまう可能性がある。

ただでさえ、今のモナコは各国の諜報員が入り乱れている魔境なのだ。不意の一步が致命傷になり得る。

「我慢してくださいジエイミー」

「耐えどころですよボンド」

そんなジエイミーを双子が慰める

その気遣いを彼女はありがたく思いながら、一息つくくと、真剣な表情をして双子に目を合わせた。

この双子は同じ諜報機関に所属するウィッチ。仲は良いが仕事にこうやって話しかけて来るほど彼女たち双子は不真面目な人間ではない。

「で、わざわざあなたたちが話しかけて来たってことは、なにか進展でもあったの?」

ジエイミーが双子に問うと、双子はコクンと頷いた

「新たに得た情報は二つ」

「どちらとも、ボスから送られて来た情報」

双子はそう言い、懐から数枚の紙が折りたたまれた二つの資料を取り出す。

「一つは『タイガー』の性能についての資料」

「もう一つは今日の深夜、『アーカーデイ・ジョン』が外出するという情報」

その言葉にジェイミーはピクリと眉を動かし、双子から受け取る。

片方は『タイガー』について。もう片方はモールス信号の記録

ジェイミーは『タイガー』についての資料を脇に置き、モールス信号の記録を読み解きながら双子に聞いた

「この情報の出所は？」

双子は答える

「ボスから直接の情報。盗聴の結果らしい」

「ボスに聞いても答えてくれない。たぶん私たちに言えないスジから」

その答えに、『ああ、いつものことですか』とジェイミーは諦め半分に納得するも脳裏に、部下によくお節介を焼いて来る諜報部の上司らしくないボスの顔を頭に浮び、すぐに消した。

今はあんなボスよりも、このモールス信号の内容だ。

内容は至極簡単。今から3時間後にとあるホテルでの待ち合わせ。そのホテルは『アーカーデイ・ジョン』の泊まっているホテルとは違うが歩いてすぐの場所にある。

この待ち合わせの情報が本当ならば、ここで何らかの動きがあるはずだ。



だが一つ引つかかることがジエイミーにはあつた。

「で、この情報を渡したつてことは、私に行けつてこと？ 私よりもあなたたちの方が適任でしょ？」

ジエイミーはモールス信号の記録資料を双子に返しながら聞く。

ジエイミーは思う。

私はカジノでの監視役に抜擢されている。

私が行かなくても他の監視員がいたはずである。それなのになぜわざわざカジノでの監視役をやっている私なのだろうか？

そもそもそういう事はこの双子の方が適任のはずだ

だが、その疑問は双子によつてすぐに答えをもたらされた

「理由はわかりません、ただボスからの命令です」

「私たちは同時刻に別の任務を言い渡されています。他の諜報員については知りません」

ああ、そうですか

ジエイミーは『なぜ私が行うことになったのか』の答えになつていない答えを聞き、理由を知るのを諦めた。

やれと言われた仕事は必ずやる。それがM I 6の諜報員になるために必要な第一条

件だ。

ジェイミーはすぐに思考を切り替え今から3時間後の待ち合わせについて深く考える。

待ち合わせで指名されているホテルはジェイミーの脳内に入っている情報を確認する限り、かなり格式の高い豪華なホテルだったはずだ。それも一見さんお断りのホテル。

こんなご時世によくそんな商売をやれているものだと思っただが、こうなつて来るとかなりまずい。

客に扮して侵入しようにもそもそも一見さんお断りのため入ることができない、従業員に扮して潜入しようにも、そういったホテルではバイトなどを雇わずに正式に決められ訓練された従業員が働いており、見覚えのない従業員がいた場合すぐに見つかってしまうだろう。

ならやれる事は、客にも従業員にも誰からも見つかからない潜入。

無茶振りもいい所である。

「できるだけバックアップしますので」

「なにか手伝えることがあるなら」

双子の声がジェイミーの耳に入る。

おそらく深く考え悩むジェイミーのことを氣遣つてのことだろう。

ありがたい、ありがたいが、今考え付く限り彼女たちに手伝つてもらえる事は思いつかない。

うーんとジェイミーが悩んでいる時

コンコンというドアをノックする音が聞こえた。

ジェイミーはノックされたドア、従業員室のドアを見つめたあと、双子に目を向ける。するとそこにいたはずの双子の姿は消え去つていた

それをジェイミーは確認して声をあげた

「は〜い。どうしました〜?」

一瞬でジェイミーは給仕の役を演じ始める。

その声を受けてすぐに扉の向こうから返答があった。

「ああ、すまないちよつといいか?」

その声はチーフマネージャーの声であった。

何か、あつたのだらうかとジェイミーは疑問に思いドアを開ける。

するとそこにはチーフマネージャーが一枚の小さな紙を持って立っていた。

チーフマネージャーは苦笑いをしながらその紙をジェイミーに手渡して来る。

「さっきの痴話喧嘩をしていたお客さんがね、これを君に渡してくれて行って来てね」  
ジェイミーはその紙を受け取り見る。

それは名刺であり、ヴァルトルート・クルピンスキーの名が記されており、その名刺には一つのホテルの名前と一筆の文章が書かれてあった。

文章の内容は『今日の夜、君のことをホテルのロビーで待っているよ』

書かれているホテルの名は、今まさに悩みのタネであったホテルの名前であった。

まさかの幸運。まるで導かれたと思うような運命。

そんな事態を実感しているジェイミーの脳裏に一つの言葉が思い出されていた

『物事の半分は幸運によって決まる。残りの半分は運命だ。』

ジェイミーは名刺を届けてくれたチーフマネージャーに礼を言いつつ過去に思いを馳せた。

どうも今回は任務はあなたのことをよく思い出しますよ。アレン。

### 3話 浮遊脚と睡眠薬

1.

新型ストライカーユニット『タイガー』

それはカールスラントやオラーシャ、リベリオンで開発を進めている『オートジャイロ』という名の空中停止が可能な新たな航空機を参考に作られた、歩行脚や飛行脚に変わる新たなストライカーユニット『浮遊脚』の別名であった。

『浮遊脚』の形状は歩行脚と飛行脚を合わせたかのような特殊な形状のストライカーユニットである。

『浮遊脚』は前述した『オートジャイロ』を参考に作られたとは言っても『オートジャイロ』とは全く用途が違う。

何故ならば、従来の航空機は空中停止ができなくても飛行脚はできる。つまり『オートジャイロ』の優位な点である空中静止という利点がストライカーユニットでは意味をなさない。

ならば浮遊脚の利点は何か。

それは『飛行脚に適性がないものでも空に浮かぶことができる』のだ

それだけではない、歩行脚には劣るものの、飛行脚よりも多くの魔力をシールドや身体強化に使うことができるため飛行脚で持つこともできない大型の火器も持つことができる。

また、飛行脚ほどの飛行距離も飛行速度も得ることはできないが、その代わり小さな空域の警護や式典で使用するのにその性能は適しており、しかも飛行脚よりも燃費がいい。

まさに歩行脚と飛行脚のいいところ取り、飛行脚と歩行脚の中間的存在。

空を浮遊するその姿から、つけられた名前が『浮遊脚』である。

……だが、双子からジエイミーに渡された資料に書かれているのはそんなうまい話だけではなかった。

この『浮遊脚』には様々な問題点を含んでいる

- ① ・まだ試作段階であり、故障や異常が多発している。
- ② ・飛行脚に適性があるウィッチが履くとユニットがショートしてしまう
- ③ ・その名の通り空の飛び方が『浮遊』であるため対地攻撃はできるが空戦には向かない

④ ・まだかなり扱いが難しく不安定なユニットであり空中を浮かぶのにも一苦勞。

⑤ ・歩行脚と飛行脚の利点をとっているように見えるが、それ以上の欠点を受け継い

でいる。

⑥・そもそもユニット自体の耐久性にかなりの問題がある。

その他不安要素の盛りたくさん。

しかもそれらに加えて政治的問題もてんこ盛りであった。

この浮遊脚の開発は、表向きには各国の優秀な開発者達が集まり行われたとされているがそれは違う。

この浮遊脚の開発が行うため各国から集められた開発者は皆、逸れ者や学会の異端者ばかり。各国の優秀と評価されていた技術者は誰一人この開発に関わらなかつたのである。

それは何故か、そもそもこの開発計画自体が各国の主導のもと、国民に欧州とリベリオンが協力しているところを見せるための見世物、つまりは広告だったのだ。

そうこの開発計画は、ごく一部で研究されながらも不要とされていた浮遊脚の理論を旗印にした、国民のネウロイ戦争への熱意を上げるためのプロパガンダ。

そのプロパガンダが本来の目的であるため別に本当に浮遊脚を開発する必要性はなく、それに加えて参加していた各国は自国にいた爪弾き者の開発者たちをついでとばかりに開発計画の研究者として、ゴミ箱に放り込むかのようにこの開発計画に送り込んだのだ。

たとえ本来の目的がプロパガンダとはいえ何故こうまで新技術である浮遊脚をないがしろにしたのか。

それは新技術を実用化するには金がかかるのである。

そして各国の上層部は金のかかる新しい技術というものに懐疑的だ。カールスラントなどその最たるものだろう。ジェットストライカーの研究と配備を推し進めるアドルフイーネ・ガランド少将が頭の固いジジイ達に足を引っ張られ配備を推し進めることができずに苦悩しているという話は一部で有名な話である。唯一の救いは現皇帝フリードリヒ四世が新しい物好きのおかげで計画が止められることはないという点だろうか

そんな各国の思想が重なって生まれたのが浮遊脚の開発計画。

爪弾き者達の流刑地でありハリボテの計画。

ならば何故そんなハリボテの開発計画であった浮遊脚が明日、このモナコでデモンストラレーションが行われることになったのか。

それは技術者達の意地と陸戦ウィッチの夢があつたからだ。

各国から集められた逸れ者や異端児と呼ばれた技術者達、そう言われるだけあつて最初はソリが全く合わなかつたが、彼らを陸戦ウィッチ達が説得して一つにまとめ上げた



のだ。

なぜ彼女らがそこまで注力したかという点、その陸戦ウィッチ達には夢があつただ、空を飛びたいという夢が。

空戦ウィッチ達は数が少ない、多くのウィッチ達は陸戦ウィッチとなる。空にいくら憧れようが空を飛ぶ素質をもつウィッチは少ないのだ。

そんな状況の中、突然現れた飛行脚に素質がないウィッチでも空を飛べはせずとも浮かぶことができる浮遊脚の存在はまさに御伽噺という魔法の杖であつたのだ。

そんな魔法の杖に夢見て協力する陸戦ウィッチ達に感化された技術者達は、協力し究し、己の全力を出して、ついには浮遊脚を実用段階まで作り上げたのであつた。

彼らにどんな苦難と困難があつたかは、彼らにしかわからない。それはここで語られることではない。

だが重要なのは彼らが作り上げてしまったことにある。

今回の計画を作り上げた各国の上層部は浮遊脚が実用段階まで開発できるなど、考慮していなかつたのだ。

彼らがつつた浮遊脚は7機ある。

そしてそのどれもが各国の異端者と呼ばれた研究者達が全力で作つた合作。

そんな何が出るかわからないおもちゃ箱を各国の上層部は表沙汰にしたくはなかつ

た。

だが、浮遊脚の開発計画自体、大々的に国民に発表していた手前、開発できた事は公表しなくてはならない、しかも多くの飛ぶことを夢に見ても飛行脚に適性がなかった陸戦ウィッチ達が生遊脚の存在に夢を抱いてしまっている。

異端児達の合作を闇に葬るにはもう遅く、仮に闇に葬ったとしてもそれがバレた時の反動が大きすぎる。それに加えてモナコが生遊脚のデモンストレーションをわが国で行いたいと要請してきたのだ。そしてその要請には過去にモナコを利用していた各国にいる富豪達の後ろ盾もあった。

彼ら富豪の存在は、この戦争を続けるための資金源の一つ。無視をしても致命的にはなりはしないが、手痛い事態になりうる可能性はある。

もはや腹をくくるしかない。そう観念した各国が開いたのがこのモナコでの生遊脚のデモンストレーションだ。

こんな式典を行う以上、各国は念入りに動いた。

その主な行動は三つ

一つはお披露目される生遊脚の厳重保管。

お披露目当日までは生遊脚は厳重な警備のもと保管され、その姿を表すのはデモンストレーションの時のみ。

また、浮遊脚には当日までスロットに脚をはめられないようにロックがかけられる。もう一つはお披露目される浮遊脚の性能の調査。

開発された各種の浮遊脚の性能は報告に上がっているが、それが真であるかハリボテの開発計画だと思っていた上層部達は信用できていなかった。

最後の一つにしてモナコに政治的問題を呼び寄せることになったもの。それが浮遊脚のデモンストレーションを行うための乗り手の選別。

予想してはいなかったとはいえ浮遊脚は最新鋭機、このデモンストレーションを行うウィッチとその国は歴史に名を記す名誉を受けることになる。

浮遊脚は実用段階だが、乗るのが難しい機体。各国の前でデモンストレーションを行うならば万全の体調でなければならぬ。

そして浮遊脚のデモンストレーションを行うには陸戦ウィッチでなければならぬ。陸戦ウィッチは空戦ウィッチよりもはるかに数が多い。

結果、生み出されたのは各国による根回しと暗躍。

すでに一部のデモンストレーションを行う予定だったウィッチが不慮の事故や不慮の病気でモナコに来れなくなっていた。

それが不運によるものなのかは語るまでもない。次々に代役が変わりその代役も変わっていく。

まだネウロイとの戦争は佳境である。そんな中、少しでも戦争が好転するとすぐに始まる人類の脚の引つ張り合い。

それを呑気と評価するか愚かと評価するかは人次第。だが、古来より悪意は悪意を呼び寄せるものである。

## 2.

モナコの夜は長い。すでに太陽はとつくの昔に落ち、月が登りきっているのにもかかわらずモナコの町並みは光であふれていた。

そんなモナコの高級ホテルの一つ。そのホテルの入り口には客達や従業員たちが多く出入りしていた。

客は皆裕福な服装をしており、その姿がこのホテルの格式の高さを匂わせる。

だがそんな彼らに紛れて独りの少女が玄関で独りの女性を待っていた。服装はスーツ風ドレス。スカートは細目であり髪の毛には青いリボンが結ばれていた。可愛らしくも働く女性を思わせるキツチリとした衣装であるが少女の表情はどこか惚けたようにノホホンとしており呑気な雰囲気を漂わせている。

そんな彼女の様子を警備員や従業員が訝しむが、その毒気のない姿から待ち合わせなのだろうと思いいつも声をかけていなかった。

だがそんな毒気のない振る舞いは彼女にとつての仮面のうちのひとつ。

そんな呑気な仮面を被った少女、『ジェイミー・ボンド』は先ほど記憶した『タイガー』もとい浮遊脚の資料と写真を思い出しながら待ち人を探していた

待ち人の名は、ヴァルトルト・クルピンスキー

第502統合戦闘航空団「ブレイブウィッチーズ」所属のカールスラント軍人。階級は中佐でありカールスラント軍が誇るトップエースの一人である。

多くのエースを生み出した第52戦闘航空団に所属していたことがあり、他のカールスラントのエース達と旧知の仲である。その際に知り合ったグンドユラ・ラル少佐の誘いによって502JFWに招聘され、つい数ヶ月前に502JFWの勇士と共にネウロイの巢の撃破の立役者となった時の人である。

その空戦能力は苛烈の一言であり、勇猛果敢に必要な以上にネウロイに接近し熾烈な攻撃を受けようとも次々に敵を撃墜していくという攻撃に主力を置いたスタイル。

そのため、数多くのユニットを壊しており、502JFWに所属する二人の『ユニット壊し』とまとめられて『ブレイク・ウィッチーズ』と揶揄されていると聞く。

そんな戦闘では苛烈な彼女の性格は無類の女好きと酒好きの真面目なカールスラント軍人とは思えない享楽主義者の楽観家。

情報で知っていたとはいえ、まさか初対面で女の尻を触ってこようとしてくるとは思わなかったと、ジェイミーは改めて1時間前のことを思い出す。

そんなセクハラをしながらも、容姿端麗な姿と熱い口説き文句で迫って来たクルピンスキー。その姿が脳裏に浮かんでジェイミーは頬を赤くするが、すぐにそのあとに起こった痴話喧嘩を思い出してクスリと笑った。

カジノに現れたヴァルトルート・クルピンスキー。そんな彼女に「先生」と呼ばれていたのは同じ502 JFW所属のエディー・タロスマンだろう。

なぜ彼女達が、ペテルブルグから離れたこのモナコにいるのか。

その答えは彼女達が言っていた。

「式典に出席するため」。

空戦ウィッチである彼女達は浮遊脚を装着することができないためデモンストレーションの要因にはなり得ない。

なら考えられる彼女達の式典での仕事は、この式典に出席すること自体が仕事なのだろう。おそらくは502 JFWの活躍を会場で褒め称えられるのだ。

人類の反抗の旗印の一つである彼女達が式典に現れるだけで会場は大きく盛り上が

る事だろう。

ということとは必然的に同じように戦果を挙げた501JFWのウィッチも出席することが考えられ、現状こんな政治的悪意が渦巻く会場に来るような501のウィッチは……

そこまで考えたジェイミーの胃が痛くなる。

思い出すは一人のウィッチ。

ウオーロックに関する諜報活動と後始末をしていた際に体良く利用され、散々な目を合わせられることとなった原因。

そんな彼女の持つ固有能力は隠密行動を行なっているときは天敵となり、変装すらも無意味にする感知系の固有魔法。

あの赤髪の灰色狼と再び会うのは死んでもごめんですよ。

そう内心毒づき、苦い思い出を思い出していたジェイミーは思い出に蓋をする。

そんなジェイミーに甘い声がかけられた

「やあ子猫ちゃん。来てくれて嬉しいよ」

その声の方をジェイミーが向くとホテルの玄関から一人の人物が出て来た

その姿はカジノの時とは変わらず、ぴつしりとしたスーツを着こなし、和かに笑いなからジェイミーに熱い視線を送りながら右手を伸ばして来る。

まるでダンスを貴婦人に誘う伯爵のようなその姿。

ジェイミーは笑いながらその腕をとった。

「こちらこそ、お誘いいただきありがとうございます。でもよかったですか？  
私のような給仕で？」

ジェイミーは微笑みながらも疑問をクルピンスキーに問う。

あのカジノには多くの綺麗に着飾った女性達がいた。そんな中でクルピンスキーはあろうことか給仕のジェイミーを誘ったのだ。

なぜ、あれほど美しい彼女達がいたのにもかかわらず、ただの給仕に声をかけたのか？

ジェイミーの脳裏にはクルピンスキーは私の正体を知っているからこうして声をかけたのではないかと、という疑問を抱いていた。

だがそれは、彼女がクルピンスキーという女たらしを知らないからこそ思いつくことであつた。

クルピンスキーが突然、たった今繋がれた腕を引き寄せる。

長身のクルピンスキーに手を引かれたジェイミーは足を絡れさせながら彼女の胸元に飛び込むことになった。



「そんなこといわないでよ……ボクはあの時君に一目惚れしたのさ」

クルピンスキーは紡がれた手を引きジエイミーを抱き寄せ、そう彼女の耳元で甘く囁いた。

クルピンスキーの柔らかな胸に体を委ねながらジエイミーは顔を上げる。

そこには彼女を微笑みながら見下ろす一人の『伯爵』の姿があった。

「そして今、ボクはもう一度君に一目惚れをした。仕事に熱心な君にぴったりの美しいドレスだ。そのワンポイントとしてつけられたリボンが君の可愛らしさを沢立たせていて、まるで美しく静寂に広がる夜空を彩る一番星の様だ」

歯の浮くような口説き文句。

その口ぶりと共にそれに伴う仕草は完成されすぎていた。

こうやって多くの少女達を口説き落として来たのだろう。

クルピンスキー中佐は空だけではなく陸でもトップエースのようだ。

ジエイミーはそう思いながらも、悪い気は一切しなかった。

いやそれよりもまるで物語のお姫様になったような感覚に陥っていた。

恐らくは今まで『伯爵』に口説かれて来た少女達も同じ気持ちだったのだろうとジエイミーは確信する。

クルピンスキーは口説いた少女をまるでお姫様のように真摯に扱うのだ。お姫様の

喜ぶ言葉を与え、その容姿を褒め、その心を甘く解きほぐす。

戦時中の辛いことや悲しいことがあふれているこのご時世に、自分だけに向けてそんな情熱的で紳士的な感情を向けられたら皆 कोरोリと口説かれてしまうのもしょうがない。

言い方が悪くなるが、このクルピンスキーという女性はお金を一切とらないホストのような女性なのだ。

だがその行為が、タチの悪いことにお金ではなく口説かれた少女の心を盗んでいくのだ。

そしてそんなホストは今、ジェイミーの心を盗もうと隣に寄り添って来る。

ジェイミー自身、このまま身を彼女に委ねたくなるが、残念なことには仕事中心なのである。

「そう褒めてくれて嬉しいのですが。一緒にいた方はよろしいのでして？」

ジェイミーは顔を赤らめながらも、抱きしめて来たクルピンスキーからゆつくりと優しく両手で体を突き離して聞いた。

クルピンスキーはそんなつれない態度にまんざらでもない顔をしながら答えた。

「先生は疲れてしまって部屋で寝ていてね。だから安心していいさ」

つまりは鬼の居ぬ間になんとやらである。

カジノでも見せた反省の気持ちは一切ない、開き直ったかの様な言い分を聞き、ロスマン曹長も苦勞してそうだと内心思いながらジェイミーはクスクスと笑いクルピンスキーと話し続ける。

「連れの女性が眠っている間に、他の女性に手を出すなんてひどい人ですね。」

「それほど君が魅力的だったのさ。だから今日は君を優先した。」

「それが名前も知らない女性にいう言葉ですか？」

「じゃあ、レディ。よければ君の名前を覚えてくれるかい？」

クルピンスキーが微笑み語りかけてくる。

本当にキザな女性だ。この人が男でなくて本当に良かった。男だったなら数多くのウィッチが彼女の手にかかってウィッチ出なくなり、この女たらしも首に縄を括られることになっただろう。

そんな、しょうもないことを考えながらも表情に一切それを出さず、ジェイミーは用意していた偽名を名乗った。

「シユテファニー・ブロードチェストですよ。」

「ステファニーじゃなくてシユテファニーということは君もカールスラント人なのかい？」

「そうですよ。母国からこのモナコにながれてきたのですよ。」

『シユテファニー・ブロードチエスト』

年齢14歳。両親もカールスラント人の生粋のカールスラント人

カールスラントがネウロイに占領された時に両親を亡くし、ブリタニア方メインではなくロマーニヤ方面に避難してきて、モナコにたどり着きそこで生きていくために日々を働いている呑気ながらも仕事熱心な少女

という設定。

今回の作戦でモナコに潜りやすい様にジェイミーが作り出した役であり、ジェイミーが数多く所有している数多の人物設定のうちの一つ。

だが役とはいえ、ジェイミーは役を演じるのではなく『シユテファニー』になっていった。これは軽い自己暗示の一種であり、『シユテファニー』は自らの設定をまるで体験して来て今ここに存在していると確信しここに存在している。

この自己暗示を併用した役を演ずる方法はやりすぎると戻ってこれなくなるが、ジェイミーがこの方法を行うのは日常茶飯事であり習慣の様に染み付いていた。

まさか目の前の『シユテファニー』が実際には存在しない人間だとは思ひもしないクルピンスキーは自ら誘った少女の名を手に入れたことに満足し、次の段階に進み始める「じゃあ、シユテファニー。このホテルの中には良いバーがあつてね。そこで君の夜のひと時を奪わせてもらってもいいかな」

甘いひと時を誘う一言。

その誘いにシユテファニーは喜んで引き受けた。

「それは光栄です〜」

承諾を得たクルピンスキーが微笑みながらシユテファニーの手を取りホテルの中に案内していく。

これで、ホテルへの侵入ができた。

クルピンスキーに連れられながら、ホテル入り口の警備員の横を通り抜けるジエイミーはちらりと自らの腕にはめた腕時計を見ながら思考する。

『アーカーディ・ジョン』の待ち合わせまであと2時間。まだまだ時間には余裕がある。このままクルピンスキーと1時間ほど時間を潰した後、『アーカーディ・ジョン』の元に向かおう。

もし、クルピンスキーが離してくれなかったなら、軽く眠らせればいい。

そう考えるジエイミーの脳裏には懐に忍ばせた睡眠薬の存在が思い出されていた。

そんな薬を盛られる可能性があるかと思ひもしないクルピンスキーはシユテファニーを連れ、ホテルのロビースペースに入る。

そこはまるで別世界の様であった。

頭上が吹き抜けとなったロビースペースには豪華なガラス張りのドームが天井に広がり、床は研かれた大理石が使われ、その上に豪華なカーペットが惜しげも無く敷かれている。

また、各所には恐らくは途方もない値段であろう絵画や銅像が飾られ、その一角には今回の式典のために用意したであろう、ストライカーユニットも飾られている。そのユニットには見覚えのある著名なパーソナルマークとサインが施されていることから、彼女らもこのホテルに泊まったのだろう。

そして、ロビースペースにそびえるホテルの支柱も細かい装飾が彫られその奥に見えるフロントも小物ひとつ置かれていないながらもフロント台を構成している木材は綺麗に研かれたその木目と色調から美しさと力強さを感じさせられた。それらによって彩られた、このこだわり抜かれて作られたロビースペース一帯はまるで一つの芸術品の様であった

今まで様々な作戦で格式のあるホテルや建物に潜入して来たジェイミーもこの空間には流石に圧倒され思わず目を瞬かせた。

「ふふっ。圧倒されている様だね。ボクも初めてここに来た時は驚いたものさ」  
傍に立つクルピンスキーの声がジェイミーの耳に入る。

「ほあゝこんなところ始めて来ました〜」

いや本当にこんなところ始めて来ましたよ。なにここ宮殿ですか？

ジェイミーは『シユテファニー』と同じことを考え答える。

そんな驚いている様子に満足したのかシユテファニーの手を引きクルピンスキーがある一角を指差す。

「驚いてくれている様でなにより。実はあそこに飾られたストライカーユニット。僕が履いていたものがサイン付きで寄贈してあるから見ていかないかい？」

「それは見て見たいですよ〜！」

クルピンスキーの誘いにシユテファニーは目を輝かせながら心良く承諾する

だがシユテファニーの表情とジェイミーの内心はまったく違った。

ジェイミーの内心にあるのは呆れ。

そもそも、502JFWは『ブレイクウィッチーズ』を含む様々な要因で資材と金の遣り繰りに四苦八苦しているはずである。

そんな502JFWがストライカーを易々と寄贈するはずがない。

502は噂で聞き限り、壊れたユニットも使える部品を回収して再利用していると聞いている。ならなぜ目の前にクルピンスキーが履いていたユニットが飾られているの

か。

偽物か？ いやそれはない。なぜなら履いていた本人が、自分が履いていたと認めているから。

なら考えられるのは、あれは中が空っぽのハリボテであるということ、そしてわざわざこのハリボテをペテルブルグからモナコに運んで来て飾られている事から、502 JFWはこのサイン付きのハリボテをこのホテルに売りつけたのではないか？

中身が空っぽとはいえ軍用品を売るなんて横暴は普通認められない  
だが502 JFWの司令はあのグンドユラ・ラル少佐である。

502の戦力維持のためにやり口を問わず様々な裏技や裏工作を行い、強欲に人材や資材をかき集めるやり手。親しい戦友から「強欲女、人類の敵、ネウロイ以下の悪党」「くたばれ」「さっさとくたばれ」などの友愛を感じさせる熱い言葉を受け取りながらも凶々しく振る舞う鋼の女。

一体このハリボテでどのぐらい金を稼いだのやら。

ジェイミーは502に入る強欲なウィッチに慄きながらも、シユテファニーとしての笑顔を絶やさぬままクルピンスキーに腕を引かれていく。

とその時、運悪く突然彼女らの目の前を一人の従業員が手押し車を押しながら小走り



で通り過ぎた。

「おっと、あぶない」

クルピンスキーはぶつかりそうになったため足を止め、同じくぶつかりそうになったシユテファアニーの肩を抱く。

シユテファアニーはクルピンスキーに肩を抱かれながら目を白黒させた。

そんな様子に気がついた、従業員が慌てて立ち止まり、彼女たちに向き直る。

このホテルの帽子と制服を着た若い男の従業員。彼は表情に、『やってしまった』とわかりやすく表現していた。

「す、すみませんお客様！」

被って入る帽子がずり落ちそうなほど頭を下げ、謝罪をする従業員

だが彼の様子にクルピンスキーは笑顔で告げる。

「いや、構わないよ。ただ次からは気をつけてね。危うくレディが転ぶところだったからさ」

「申し訳有りません！」

再び頭をさげる従業員。

そんな真面目な彼にクルピンスキーは逆に好感を覚えながらも、ふと彼が押していた手押し車に目を向ける。

二つのものが乗せられていた。一つは白い布がかけられており何かはわからない大きなもの。もう一つはそんな白い布をかけられた上に置かれた木箱に入れられた機械であつた。

「これは…… ストライカーユニットかい？」

クルピンスキーが従業員に問う。

軍人である彼女にとつて見慣れているストライカーユニット。だがそれを問う彼女の声には少しの困惑が見られた。

「そうなんですよ。どうも新しく飾るらしくて。どうも古い型らしいですね」

「へえ……。ああ引き止めて悪かったね。もう行つていいよ」

「いえこちらこそ、本当に失礼しました」

クルピンスキーに促され、従業員が足早に去つて行く。

その様子を眺めた後、クルピンスキーは傍にいるシユテファニーに語りかけた  
「じゃあ気を取り直して行こうか」

「……… はい！ では行きましょう！」

行けるわけがない。

明るく答えるシユテフアニーとは違い、ジェイミーは混乱していた。

先ほどのストライカーユニット、クルピンスキーが困惑するのも無理はない。

あんなストライカーユニットを彼女は見たことがないからだ。

それは当たり前だ。その姿は明日まで嚴重に軍で保管されているはずの物。

あのストライカーユニットは明日お披露目される物

新型ストライカーユニット『浮遊脚』なのだから。

そんなものが高級ホテルとはいえ一般のホテルになぜ存在している？

その理由はまったくわからない。だが異常事態には変わりがない。

『アーカーディ・ジョン』の予定まで後2時間。

その2時間を『伯爵』との甘いひと時を過ごすのか、それともここにあるはずのない

『浮遊脚』の事を探るのか。

MI6の諜報員であるジェイミー・ボンドにとってその答えは明白であった。

ジェイミーはクルピンスキーに腕を引かれながら、懐に忍ばせた薬の確認をした。

## 4話 502と騒乱の始まり

1.

見慣れない天井。妙に柔らかいベッド。

おぼろげに意識を取り戻したエディータ・ロスマンが最初に認識した事はその二つであつた。

ロスマンは未だ眠気によつて朧げな意識のなか、寝転がりながらあたりを見渡す。今着ている服装はいつも寝る際に着ているシャツとズボンの軽装。

だが今いる部屋はいつもの部屋とはまるで違う、お城の一室かのようにきらびやかな部屋。部屋にある調度品のどれもが高級感を漂わせ、今自身が寝ているダブルベットも今までの人生で寝てきたベッドのどれよりも肌触りも柔らかさも上質であつた。

明らかにいつもの502の自分の部屋ではない。

そんなことを考えていると、部屋にハンガーにかけられた見覚えのある白いドレスが目に入った。

『綺麗だよ。パウラ』

脳内に響く甘い言葉。

そんな言葉を思い出したロスマンの顔は真っ赤に染めて意識を覚醒させた。

ここはモナコの高級ホテルの一室。

休暇の意味も含んだ今回の任務の兼ね合いで泊まることになった部屋である。

カジノから帰って来た後、長旅の疲れからか眠ってしまったのね……

ロスマンはなぜ寝ていたのかを思い出し、時計を見る。

時刻はまだ夜。本来ならばもう一度眠って明日に備えるべきなのだが、一度目が冴えてしまった手前、去った眠気が帰ってこない。

ロスマンの今日の日程はかなり忙しいものだった。

ガリア経由の空輸でモナコに向かうが到着が遅れ着いた時には夕方。慌てて明日の式典について予定を会場設営の人間と合わせて行き、その調整が終わった頃にはすでに夜。疲れながらホテルに帰ると同僚が明日から仕事があるのにもかかわらず夜遊びに外に出て行ったため捕獲して連れ戻す。

そんな過密スケジュールだった今日を振り返り、ロスマンはため息をつきベッドから起き上がった。

ロスマンの部屋着は汗をかいてしまいシャツがべたついていた。そして汗を流したせいか喉が無性に乾いているのに彼女は気がつく。

水でも飲もうかしら。

ロスマンはそう思い部屋に常備されたミネラルウォーターを飲むと立ち上がった。その時彼女は1つのことに気がついた。

まさかと思ひあたりを見渡すが、共にこの部屋に泊まっているはずの同僚の姿が見当たらない。

その代わりに机の上一枚のメモが置かれてあった。

『下のバーで遊んでくるよ。心配しないで』

達筆な文字で書かれたメモ、その文末には気障つたらしいサインまで書かれており浮かれているのが一目でわかる。

ロスマンは明日には朝から任務が控えているのに酒を飲みに行った同僚に対して怒りを沸かせながらメモを握りつぶした。

心配するに決まっているじゃないニセ伯爵……!!

彼女のこめかみに青筋が立つ。

別に酒を飲むことに小言を言うつもりはないし、カジノに行ったことに文句を言うつもりもない。

だが明日は任務なのだ、カジノに行くのも酒を飲むのも任務が終わった後にすべきなのである。

やはりクルピンスキーをモナコに連れて来たのは間違いだったのじゃないだろうか

?とロスマンは今回の任務が言い渡された時のことを思い出し、頭を抱えた。

あれは今から数週間前、『グレゴリー』を撃破したため戦況が落ち着いて時期のことだ。

「モナコの式典に行きたい奴はいるか?定員は1名で宿泊先は高級ホテルだ」

いつもの様に502の一同で夕食をとっている時、そんな一言がラル隊長からもたらされた。

『モナコ』それは有名な高級リゾート地。今はネウロイの脅威によつて寂れてはいるものの、かつては世界の富豪が集まり豪遊したと言われる夢の街。

その突然の提案は、娯楽もなくオラーシヤの殺意のこもった冬に耐えていた502のウィッチ達にとって夢の国へのチケットであった。

「式典か…そんな畏まった所にみんな行つたことないだろう。皇帝陛下の謁見を経験したことがあるボクが立候補させてもらうよ」

「ダメだよ!伯爵なんかモナコ行つたら帰つて来なくなる!私が立候補するよ!」

「さて!お前が行つたら不運で式典がめちやくちやになるだろ!俺が行く!」

「菅野が式典なんて畏まった処に行けるわけないだろ!」

「ああん!?!」

「美味しいもの出るのかな…?」

「ジョゼ……」

「モナコってどこですか……?」

三者三葉の反応。だが皆あきらかに式典ではなく、式典以外が目的である。

ロスマンはそんな姦しい彼女達の反応を観察しながら一つの違和感を抱いていた。

机上で腕を組む502JFW司令グンドユラ・ラル少佐の姿いつも通り、だがアレク

サンドラ・イワーノブナ・ポクルイーシキン大尉の顔色が悪く胃を抑えている。

アレクサンドラ・イワーノブナ・ポクルイーシキン大尉、もといサーシャ大尉はその

固有能力と事務能力を買われラル少佐に戦闘指揮や事務作業を委任<sup>丸投げ</sup>され、日々『ブレイ

クウィッチーズ』と書類に頭を痛めているウィッチである。

そんな彼女が今の提案に胃を痛めているのだ。

裏がある……

ロスマンは確信しラルに鋭い視線を向けて質問した。

「隊長。それは任務ですか?」

「任務だな」

「ではその式典。どんな式典でどの様な人が来て、任務として向かう者はどの様なこと

をするのですか?」

「ん?それはだな……」



ラルはそう言い、なんともない様に語り始めた。

その言葉が語られるごとに、先ほどまでモナコへの憧れで盛り上がっていた食堂が静かになって行く。

式典の内容は新型ストライカーユニット浮遊脚のデモンストレーション。

これはいい、一人のウィッチとしてとても興味のある催し事だ。

だが問題はそのあとに行われるパーティーだ。

出席するのは501の隊長などのエースウィッチだけに止まらず、各国の名だたる政界の大物や各国軍部の上層部に位置する人間、つらつらと語られる彼らの階級や地位の高さだけでもめまいがする様だ。

「パーティーの際は出席者らの機嫌を損ねぬ様に、逆に機嫌取りをしてもらいたい。ああ、時折502のことを探ろうとする人間が現れるが必要以上答ええない様に。それが終わったら数日モナコで休暇をとってもいいぞ。」

ラル隊長はそう話を締めくくった。

そして残ったのは静かになった食堂。本来なら聞こえないほど小さな、ジョゼがスープを救う際に食器が当たってしまい鳴らすカチャリという音がよく聞こえる。

数多のネウロイを叩きのめし、ついにはネウロイの巣すらも撃破した勇猛果敢な502のウィッチといえども、腹に一物かかけた者達が集まるパーティーなんて行きたくも

ない。

「……譲つてやるよニパ」

「……そつちこそ遠慮しなくてもいいよ菅野」

「行つてみようかな」

「美味しいものが出るなら……」

「やめたほうがいいですよ雁淵さん、ジヨゼ」

すつかり行く気をなくしたウィッチ達。だがそれは全員ではなかつた。

「みんなが行かないと言うならやっぱ僕が行くことにしよう。任せよ。」

ヴァルトルート・クルピンスキーが茶目つ気のある表情と共にウインクをする。

皆がやりたくない任務を率先としてやる。なんと勤勉な軍人だろう。それはさぞ責  
任感のある優秀な軍人に違いない。

そんなありがたい軍人を、502のウィッチのほとんどは冷ややかに見ていた。

いやむしろ感心しているのかもしれない。我らが『伯爵』は、名だたるエ可愛ースウ子イツちゃん  
チがいるなら些細な困難では止まらないのだ。

同じく『伯爵』を呆れた目で見ていたロスマンはため息を吐く。

クルピンスキーも子供ではない。長い間カールスラント軍人として過ごして来てお  
り、その性格からして隊長が要求して来た任務を的確にこなしてくれるだろう。

だがそれと同時に、可愛ければ富豪の娘や政界の要人の娘だろうが誰彼構わずに粉を  
かけまくるに決まっている。それが一体どんな火種になるか考えたくもない。

つまり彼女に行かせるのは悪手であり、それなら代わりに行く人間を見繕わなくては  
ならない。隊長が望む様な仕事ができそうでそんな人物は……私か

ロスマンはそこまで考えると、わかりきった回答に内心ため息をついた。

だがロスマンの気分は落ちてはいなく寧ろ口角をわずかに上げていた。

確かに様々な目論見が飛び交うパーティーに出席するのは気分が沈むが、それさえク  
リアすればモナコで休暇を取れる事実がロスマンを高揚させているのだ。

『エディータ・ロスマン曹長』

彼女は多くのエース達を生み出した優秀な教官であり性格は真面目だが、戦場や職務  
の最中以外では、毎日を楽しく生きるための努力を惜しまない陽気な享樂家である。

そんな彼女がモナコでの休暇なんて楽しいものを、多少の苦難はあれど逃すはずがな  
いのだ。

ロスマンは微笑み思索する。

モナコに着いた時、どこを観光するかかの予定。

パーティーに着て行くドレスの選択。

そしてクルピンスキーではなく私を向かわせたほうがいいと隊長に説得する方法。

だがそんなロスマンの『説得』に関しての思案は全くの無駄、いや取り越し苦労であった。

クルピンスキーが立候補すると共にラル隊長は言った

「決まったな。ならばヴァルトルート・クルピンスキー中尉とエディータ・ロスマン曹長の2名は夕食後に私の部屋に来てくれ。今回の任務について詳しい事を説明しよう」

「……え？」

カチヤンと音を立てて、ロスマンの手からスプーンが落ちる。

スプーンを落としたことに気がつかないロスマンの頭の中では今ラル隊長が言った内容を反復されていた。

『ヴァルトルート・クルピンスキー中尉、エディータ・ロスマン曹長の2名は夕食後に私の部屋に来てくれ。今回の任務について詳しい事を説明しよう』

それはまるで、2人でモナコに行くような言い方で……

そんなロスマンの様子に気がついたのかラル隊長は顔色一つ変えずに彼女に告げた。「腹芸が必要なパーティーなのだ。この502のウィッチの中で、そんな場所であまく働くことができるのは私かサーシャ、ヴァルトルート、エディータの4人しか無理だろう？」だがヴァルトルートだけに任せると女関係が面倒だ。つまり残り3人」

淡々と語るラル隊長。だがロスマンは隊長の口角が微々たるものだが上がっている

のが見えていた。

ロスマンはそこでやっと、何故サーシャが胃を痛めて顔色が悪かったのかを理解した。

彼女はロスマンに対して申し訳なかったのだ。

「それに加えて私とサーシャは書類仕事で忙しいから行けないのでな。なのでエディータ・ロスマン曹長、モナコでの任務頼むぞ」

ロスマンに告げられるモナコでの仕事。その語尾にはクルピンスキーのお目付役としての仕事への示唆も含んでいるように思えた。

そう、最初から決まっていたのだ。ロスマンがモナコに行くことは。

確かに、ラル隊長は隊長であるため基地を離れられない。サーシャは書類仕事がありこれもまた基地を離れられない。クルピンスキーは1人で行かせるのはマズイ。

ならば残ったのは1人だけ。その1人を向かわせるのは当たり前のことだ。

あとの付き添いについては誰でもいい、だから全員に聞いて見たということなのだろう。

なるほど最初から私がモナコに行くことは決まっていたのか。とロスマンは理解する。

結果的にモナコに行けることが決まった事は嬉しい。

だがロスマンは、何か納得できない。すごく心中がモヤモヤしていた。

そんな彼女を知ってか知らずかクルピンスキーはロスマンに笑顔を向ける。

「楽しい慰安旅行になりそうだね!! ロスマン先生!!」

で、結局こうなるのね……

ロスマンは再び深いため息を吐いたあと自身の顔を軽く叩き気合をいれた。

無理やりとはいえ任務は任務。しっかり明日の式典をこなさなければならぬ。

そのため、このままクルピンスキーを放っておいて明日の式典に備えるという手もあるが、それは監督不行き届きとなってしまう。ならやるべきことはホテル1階のバーからあの『ニセ伯爵』を捕まえて帰ってきてベッドに投げ入れることだ。

すでにクルピンスキーはバーに向かっているため、彼女はもう酒は飲んでいるだろう。だがあの『ニセ伯爵』は酒に強い。酒を飲んだとはいえ1杯や2杯、1瓶や2瓶では潰れないし二日酔いにはならない。だから彼女が明日に影響があるほど飲むまでに捕まえる必要がある。

ロスマンは目的を定め、部屋着を着替え始める。

そしていつもの軍服を取ろうとしたが途中で止まり、視線を別の方向に向けた。

その方向にあったのは白いドレスであった。

彼女はそのドレスと軍服を交互に見て考え始める。

数刻考えたあと、彼女はドレスに手を伸ばした。

「せっかく……だから、ね？」

誰に聞かせるでもないのに、言い訳を言いながらロスマンはドレスを掴む。

その表情は先ほどまでため息をついていたとは思えないほど朗らかな表情であった。

## 2.

1人の富豪がホテルのベランダから夜のモナコを見ていた。

夜のモナコはきらびやかに光り輝き、人々の営みを感じさせる。

目下には夜にもかかわらずまるで昼のように人々が歩いているのが見えていた。

彼は片手に持ったワイングラスを揺らし香りを楽しむ。50年もののワインの香り

は芳醇で歴史を感じさせるものであった。

そんな幸せなひと時を楽しむ中、彼は時計を見て思う。

回収の時間までもう少し、先ほどの部屋で『彼女』は、うまく『アレ』と『あれ』を

運び屋に渡しただろうか？

あの2つは、かの国に売った大事な商品。

あの2つがあれば、かの国、いやあの計画を推し進めようとしている彼らは私たちに  
とって、とても良い商売相手となるだろう。

——だが、1つの不安要素がある。

『彼女』が欲する『ウィッチ』

『彼女』は今回の計画でその『ウィッチ』を手に入れるためにも動くと言った。

『彼女』に対して不満や不安はない。

『彼女』ならば、精神的にも技術的にも私を裏切るわけがない。

だがそれでも。その余計な動きが計画を破綻させるのではないだろうか…？

未だに胸中に生み出される心配に、彼は自らの小心者に笑った。

歳をとり後ろ盾に国家を付けながらも、私の小心者は治らないのだな。

彼は自身の心臓の小ささを確認しながら、ワインを飲み、目的のものが彼の国に届く  
のを、『彼女』が仲間を再び手に入れるのを願う。

「遺児が幸福をもたらさんことを」



そんな彼の言葉は誰にも聞こえず夜空に消えて言った

3.

やつてられないわよ。

ジェイミーの胸中にそんな言葉が吐き捨てられる。

彼女はすでにシユテファニーの仮面を脱ぎ捨てて早歩きに地下駐車場に向かっていた。

クルピンスキーとのバーでひと時はとても楽しく、諜報活動を続けて荒んだ心を十分に癒すものだった。だがあの『浮遊脚』を見た以上早めに切り上げる必要があり、クルピンスキーが2杯目に頼んだカクテルに薬を忍ばせ眠らせたのがつい先ほど。

その後、彼女のことを「酒に酔って寝てしまったので少し見ててくれませんか？」と言いい店員に任せ、ジェイミーは浮遊脚を運んでいた従業員の行方を捜し始めたのだ。

怪しまれぬように慎重に、だがそれと同時に迅速にジェイミーはこのホテルにいる従業員や客から話を聞き出し、ついに今、彼が地下駐車場に向かったという情報を手に入れていた。

従業員の彼が何者で、なんで浮遊脚を運んでいたのか？

その謎は、今は解けることはないが謎をとく前にあの浮遊脚は確保しなければならぬという直感がジエイミーの体を動かしていた。

今ジエイミーが降りているのは地下駐車場につながる階段。もうあと数段降りれば地下駐車場につくはずである。

そんな時ジエイミーの耳に話し声が聞こえて来た。

その声はうまく聞き取れないが声の方向は行き先である地下駐車場。

ジエイミーは早足だった歩きを忍び歩きに変え、抜き足差し足と音を立てぬように階段を降りる。先ほどよりも声は大きく聞こえる気がする。

だがボソボソと聞こえるその会話はうまく聞こえない。

ただその声質から、言い争っているというのだけはわかった

彼らが何を話しているのか

ジエイミーはそれが気になり、駐車場に入り慎重に音を立てないようにしながら駐車場に止められた車の陰を利用して声の元にゆっくりと近づいていく。

そうやって近づいたおかげか、しばらくするとその言い争いの声が明確に聞こえてきた。

「受取人の運び屋はお前ではなかったはずだが？」

「あれえ？ そうだっけ？」

「謀るな。もとよりお前の行動はいつも怪しすぎる」

「それは君の偏見じゃないかな？それよりも、『アレ』と『あれ』はちゃんと持ってきてるようだね。最初聞いた時は偽物でも持つてくるのかと思ったけど、どうやら本物のようだ。それ手に入れるのに一体どんな手を使ったんだい？」

「貴様には関係のない事だ。」

「つれないネエ」

詰問している方は先ほどの従業員。それに答えているのは声からして女性。

彼らの姿が気になり、ジェイミーは車の陰から顔を覗かせる。

そこには2人の人物がいた。片方は先ほどの帽子をかぶった従業員。傍らに荷物の乗った手押し車を置いている。

もう1人はジェイミーに背中を向けている少女。

髪型はジェイミーと同じ金髪のオールバック。

表情に関してはジェイミーに対して彼女が背を向けているためジェイミーには視認することができない。

そんな怪しい2人の会合。会話の内容からしてなんらかの機密取引

これはまたバタな展開に出会ったわね……

ジエイミーがそう考え2人を観察する。

だがそれがジエイミーにとっては不運であり失敗であった。

「あ……」

「——ッッ!!」

ジエイミーの瞳と従業員と瞳が合ってしまったのだ。

従業員はわかりやすくその表情を驚かせる。

見つけた。

ジエイミーはそれを認識すると、忍び歩きをやめ彼女らに向けて掛け始める。

距離は約35m。見つかってしまった従業員には無理だが未だこちらに背を向けて

いる少女には不意打ち可能な距離。

地下駐車場にジエイミーの走る音が聞こえ始める。

すると、従業員の傍にいた少女が懐から拳銃らしきものを取り出した。

それはその形状からしてS&W M10。

そして形状からしてピクトリーモデル。今リベリオンで最も量産されている。38

口径リボルバーであった。

この銃で使われる弾丸は、38スペシャル弾。

つまりシールドで防ぐことが容易に可能な攻撃

たとえリボルバーといえども弾丸径9.1の弾丸ではウィッチのシールドを破ることはできない。

ウィッチにとってはただのリボルバーによる攻撃は、シールドで弾くことができる攻撃であり、恐るるに足りえないものであった。

ジェイミーは走る。

35、34、33m。ジェイミーと従業員達の距離が近づいて行くが、ついに少女の持つリボルバーが対象に向けられた。

だが、その銃はジェイミーに向けられたものではなかった。

BANG!

「なに?」

銃声が地下駐車場に響く。あまりの光景にジェイミーは驚きの声をあげ目を見開いた。

なぜなら少女の握るS&W M10からは硝煙がたちのぼり、従業員は胸を撃たれ血を流して倒れ伏したからだ。

先ほどの会話からして従業員は少女の仲間だったはず。だがそんな仲間を少女は撃った。

倒れた拍子に帽子が崩れ従業員の顔を覆う。そのせいで表情は見受けられないが、ピクリとも動かない様子から気絶……いや銃弾の着弾場所が心臓の部位であることから、従業員の彼は死んでいるのだろう。

躊躇なき発砲。彼女の後ろ姿から見える容姿からジエイミーと同年代かそれより下の年齢だとわかるが、そんな少女が行うにしてはあまりにその一連の動きは慣れすぎていた。

つまりは、この少女はジエイミーと同じ、表向きな組織の人間では無い、暗い世界の住人。

同業者である。

そんな、少女がジエイミーに向かって振り返った。

## 5話 ジェイミーとボンド

1.

「は？」

口から漏れ出た呆然とした声と共にジェイミーの動きは完全に止まった。

ありえない。あり得るはずがない

それが今、この地下駐車場で、従業員をS&W M10を使って撃ち殺した下手人の顔を見た時のジェイミーの最初の思考。

それは至極当然のことであつた。何故ならばジェイミーは下手人の顔に見覚えがあつたからだ。

その顔は今日も鏡の前で見たことがある。生まれた時から見たことがある顔。『ジェイミー・ボンド』の顔がそこにいた。

驚き惚けた『ジェイミー・ボンド』の表情を見た『ジェイミー・ボンド』がニヒルに笑う

変装か？それにしては似すぎている。

姉妹か？ジェイミーには姉妹なんていない。

ならばこいつは、私と瓜二つのこいつは何者だ？

予想もしない存在の出現にジェイミーの脳は答えを出すことはできず混乱する。

だが、ジェイミーはそんな混乱しているジェイミーを待つてはくれなかった。

偽物のジェイミーが手に持ったS&W M10をこちらに向けようとするのがわかる。

偽物の持つS&W M10の総弾数は6発。今従業員を撃ち殺したから残り5発。

つまり今偽物は最大5発の、38スペシャル弾を撃つことができる。

だがその程度の攻撃はウィッチのシールドを破ることはできない。

偽物との距離は30mほど、銃弾をシールドで防ぎながら走れば容易に接近戦に持ち込むことができる距離。

だがそれでもジェイミーはその場から全力で飛び退き遮蔽物となり得る車の影に向かって走る。

その理由を説明するなら、全く顔が同じだから。

詳しく語るならば、全く同じ顔を作るのは今の医療技術では不可能であるからだ。だが唯一それを行う方法がある。

それは固有魔法。



しかし魔法を使うには使い魔の耳が頭に現れるはずである。そんな耳は今日の前の偽物にはない。

だがジェイミーは目の前の私の偽物はウィッチであると、直勘が告げていた。

なら偽物から放たれる銃弾の威力はただの弾丸の威力ではない、ウィッチが放つ魔力を灯した銃弾

強固なネウロイの外皮すら削る驚異の弾丸。

「Damn it!!」

ジェイミーは罵倒と共に近くの車の裏に飛び込んだ。

車の影に隠れる直前、視界の端に偽物の『ジェイミー・ボンド』に狼の耳と尻尾が生えるのが見える。

『やはりウィッチ!』

BANG!! BANG!!

ジェイミーが確信すると共に駐車場の外壁がえぐれていく。

確かに拳銃でも穴は空くだらう。だがこんなマグナムをぶち込んだような大きさの穴は普通開かない。

この火力、そして頭に生えた狼の耳を見る限り、明らかに目の前の偽物はウィッチで

あつた。

ジェイミーは思案する。

確かにウィッチのスパイは自分を含めて多くいる。人類を守るための崇高な力を国家利益のために使うウィッチは愚かだが各国家に複数人いる。だが数多の諜報員がひしめき各国の著名人が集まるこのモナコで気軽に銃撃戦を始めようとするウィッチがいるとは想像できようか

ここは明日には各国が注目する『浮遊脚』のデモンストレーションがなされる土地何か事を起こしたら大事となり、下手をすれば明日の式典に参加している各国が敵に回ることになる。

そんな事は子供でもわかる事であり、それはこの偽物もわかるはず。

だが、ジェイミーは偽物が何故そんなリスクがある行動をしているかの理由が想像できている。

だからこそ、奴はあの顔をしているのだ。

だからこそ、奴はブリタニアのMI6の諜報員の顔を借りて事を起こしたのだ。

その事実にはジェイミーは怖気立つ。

つまりは、この偽物が起こす罪は全て、借りた顔の存在に擦りつけられることになる。

つまりは、この偽物が行なった罪のツケは全て私が払うことになるのだ。

最悪の場合、私だけではなくブリタニアがそのツケを払うことになるだろう。

『なんで見も知らないテロリストの尻拭いを私がしないとイケないのよ!』

ジエイミーはあまりの怒りに歯ぎしりをした。

「あれ? ドブネズミのように素早いんだねジョンブル。MI6のウィッチは皆そうなのかナ?」

ジエイミーの瞬時の判断を褒め称えるかのような上から目線の声が駐車場に響く。

その声はとつさに車の陰に隠れたジエイミーを馬鹿にする様な声色でもあった。

そんな声を聞きながら、ジエイミーは現在の状況を確認する。

奴が何者なのか、どこの組織のものなのか、なぜ私の顔を知っており私の所属を知っているのか。

様々な疑問や憶測がジエイミーの頭に浮かび上がっては消えていく。

だが、ジエイミーにとってそれらの疑問は後で考えればいい事柄であった。

ジエイミーが今考えるべき大事な事は、この場で顔を借りられた私が偽物を捕まえな  
いと後々にマズイことになるという事実と、その偽物がおしゃべりである事。

ジエイミーは、否応がなく厄介なことに巻き込まれてしまった自らの不運に悪態しながら、懐からワルサーPPKを取り出し魔力を解放する。すると同時に体に猫耳と尻尾が生える感触があった。

『本当はウィッチの力を人に向けたくは無いし無傷で捕らえたかったけれど、こうなつては仕方ないわね……』

ジェイミーは心の中で歯噛みして銃弾に魔力を込めながら、偽物の質問に答えることにした。

「さあ？　人の顔を勝手に借りる泥棒に答える必要はありませんね。そんな卑しい盗人で仲間殺しのあなたはどこのどなたですか？」

ジェイミーはワルサーの残弾を確認しながら遮蔽物越しに偽物に対して返答する。

おしゃべりな偽者から一つでもいいから情報を引き出そうとするジェイミーの行為。

ジェイミーもさすがに相手が馬鹿正直に答えてくれるとは思っていない。

だが言葉とは普通は気がつかないが多くの情報を示す媒体なのである。

語る内容、喋る言語、言語の訛り、声の音程、声色、単語の呼び方

情報を得たい対象が語れば語るほど、情報が湯水のように落ちてくることになる。

だからこそ、ジェイミーは軽く挑発を含む言葉をおしゃべりな偽物に向けて放つただ。だ。

そんな行為に対して、クスクスと人を馬鹿にした様な偽物の発する笑い声がジェイミーの耳に聞こえた。

「仲間殺シ？　彼らがどう思っていたかは知らないけど、此方は彼らを利用していただけ

で仲間じゃあないヨ。それに顔を借りル？お笑い種ダ。此方が態々使つてあげているのだから逆に感謝してほしいネ」

「…はあ!？」

あまりに凶々しい物言いに思わずジェイミーの口から怒りの声が漏れる。

そしてそんな怒声が聞こえているのにもかかわらず、偽物の嘲笑は続く。

「君のことは話には聞いているヨ？潜入捜査や諜報活動、数多の仕事を確実に遂行するくせに、必要以上に人を助けようとする諜報員らしく無い甘すぎるその精神。君はまるで、見てくれだけはいいいけど味がブリタニア料理レベルのディナーのようダ」

止まらない偽物の正論と事実、ヒクヒクとコメカミを引きつらせる。

確かにその通り、だがそれを他人に指摘されるのはムカつくし、しかもそれが同じ顔の人間なら余計にイラつく。

ついでにその言葉の節々に見られる特徴的な訛りがさらに頭に来る。

だがその訛りはあまりにワザとらしく、逆に言葉遣いによる情報の特定を混乱させている。

伊達におしやべりではないということね

ジェイミーは、うちに湧き上がり始めた怒りを宥めながら偽物に返答する。

「……それはどうもありがとうございます。ですがその話どこで聞いたのですか？そ

れほど有名になった自覚は私にはありませんので」

しつかりと怒りを隠した先ほどと同じ声色のジェイミーの返答。だがその返答もまた先ほどと同じ嘲笑にまみれた言葉であった。

「それを敵の此方に聞くかイ？ 愚かだネエ。君、絶対にその愚かさが原因で君の惨めな人生に終止符を打つことになるヨ。だから逆にありがたく思つてほしいものだヨ？ わざわざ此方達が君の貧相でゴミのような人生を有効活用してあげるのだからネ」

プツンとジェイミーの頭の中で何かが切れた

よくもいけしやあしやあとそんな言葉を吐ける。

『もう怒った。湯水のようにナメくさった言葉を垂れ流すその口を永久に閉ざしてやるわ』

ジェイミーは猫耳と尻尾を怒りで毛立たせながら、殺意と怒りを胸中に満たす。

だがそれでも彼女の頭は冷静に思考していた。

今私は車の影に隠れており、おそらく偽物は未だにこちらにS & W M10を向けたままだろう。

偽物が移動したような足音は聞こえない。そして奴がその場から動いていないということは、奴の周りにあるのは、浮遊脚に乗った手押し車と従業員の死体だけのはず、だ

から偽物が隠れることが可能な遮蔽物は近くには無い。

それにさきほど、偽物が私に撃った弾丸は2発。従業員を殺した時使用したのは1発。S & W M10の装弾数は6発。つまり敵の残り残弾数は最大3発。

私の持つワルサーPPKの現在の装弾数は6発もある。たとえ相手がリロードしようにも相手が持っているのはリボルバーであるS & W M10だ。リロードするには時間がかかり、こうやって呑気に私と会話してくれている偽物からはリロード音もまだ聞こえていない。

つまり打ち合いになれば遮蔽物があり、銃の残弾数が多い私の方が断然有利。

リロードに時間がかかるリボルバーなんて銃を諜報員が持っている方が悪い。ジェイミーは自身がどんな戦場に出る時もトレンチガンを担ぐ事実を棚に上げて偽物の不手際を笑う。

そうなると、勝負は相手にリロードさせる暇を与えないため今すぐにも攻撃を仕掛けなければならぬ。

人の顔を勝手に使い調子に乗った言葉を吐く嘘つき狼には手痛い銃弾を食らってもらおう。

そうジェイミーは思い。遮蔽物からワルサーPPKを構えながら顔を出した。

「あれえ？ ずいぶん顔を出すのが早かったネエ」

顔を出したジェイミーを偽物が出迎える。

確かにそこにはジェイミーの予想通り、偽物が隠れずにそこにいた。

だが、偽物はS & W M10を構えてはいなかった

偽物は式典で公表されるはずの浮遊脚を履いてそこにいたのだ。

「はっ。」

今日二度目のジェイミーの呆然とした声。

浮遊脚は明日の式典までロックされており足を入れることもできないと双子からもらった資料に書いていた。だが目の前で偽物が浮遊脚を履いている。

ありえないその光景。

だが無情にも、偽物の履く浮遊脚が起動してペラを回し始める。そしてゆっくりとその場で浮遊を始めた。

その様子を目にしながらジェイミーは浮遊脚の資料書いてあった利点についてを思い出していた

① 飛行脚に適性がないものでも空に浮かぶことができる

② 歩行脚には劣るものの飛行脚よりも多くの魔力をシールドや身体強化に使うことができるため飛行脚で持つこともできない大型の火器も持つことができる。

言うならば、浮遊脚は空に浮く歩行脚。



それが目の前で偽物に装着されている。

「Holy shit!」

ジェイミーは躊躇せず魔力を込めた弾丸を立て続けに発射する。

的確に頭を狙った3発の弾丸。

「かわいい攻撃だネエ……!!」

だが、そんな3発の弾丸は嘲る偽物の声と共に展開されたシールドによつてたやすく弾かれた。

浮遊脚のシールド強度が歩行脚には劣るとはいえでも、そもそもストライカーユニットを履いたウィッチのシールドをワルサーPPKの銃弾で破る事は魔力を伴っていても難しい。そのため、こうなる事は自明の理であった。

偽物はポロポロと地面に落下するシールドによつて弾かれた。32ACP弾を嘲笑い、傍にある手押し車に顔を向けて手を伸ばす。

その動きに連れられてジェイミーも手押し車を見る

その手押し車の上には何か巨大なものが未だ乗っており布がかけられている。

あの手押し車は、先ほど撃ち殺された従業員が『浮遊脚』を乗せて運んでいたものだ。

ならば、浮遊脚と共にあの手押し車で運ばれていたあの布に隠された物は浮遊脚に関わる物の可能性が高い。

そして手押し車とは、手で持てないような重い物を運ぶための物  
浮遊脚に関わる重い物？

浮遊脚を履いたウィッチが持つものとはなんだ？

それは武器だ。

そして目の前の浮遊脚は歩行脚と飛行脚の中間に存在するものだと言う。

それは、普通の飛行脚では持つことのできない武器を持つということだ

そこまでジェイミーは考え背筋を凍らせる。信じたくない答えが頭に浮かび上がる。

「君は、ハンバーグステーキとただのステーキどっちが好きかい？此方はハンバーグス  
ターキだネ」

偽物は楽しそうにジェイミーに話しかけ、手押し車に乗せられた荷物を隠す白い布を  
つかむ。

その動きはプレゼントを開けようとする子供の様であり、表情は無邪気そのもの。  
だがその捲られる布の下はジェイミーが背筋を凍らせる答えがある。

そんな偽物の動きを止めようと、ジェイミーは再びワルサーPPKを発砲するが、発  
射された1発の銃弾は先ほどと同じ無為な結果に終わる。

そんな無駄な抵抗を見ながら偽物は嗤った。

「なぜかって？それは此方が挽肉が大好きだからサ！」

捲られた布の下にあったのは巨大な銃器、いや砲。

M K 1 0 8 2連装30mm機関砲がそこに存在した。

全長1.057m、重量58kg、毎分650発の30x90R B m m弾を撃つと言  
う銃ではなく砲。

昨今ではジェットストライカーの標準装備とされている機関砲がそこに横たわつて  
いる。

もはや、勝てる勝てないの話ではない。

ジェイミーは偽物が悠々とその機関砲に手を伸ばすのを見ながら声にならない悲鳴  
をあげた。

拳銃で機関砲に立ち向かうなんて馬鹿げている。

毎分650発の口径30mmの弾丸なんて受けた時には挽肉になつてしまふだろう。  
しかもそれを撃つのはウィッチなのだ。魔力と箆つた砲弾が直撃したら挽肉どころか  
血煙となる。

だが今さら、車の影に隠れてもその砲弾によつて容易く車の装甲は食い破られる。今  
から逃げてもその砲弾の速さから逃げる事は叶わない。

絶体絶命。

ジェイミーの耳に死神の足音が聞こえて始める。

しかしそんな状況下で、ジェイミーの脳裏に一つだけ生き残る方法が浮かび上がった。

今の自分の持ち物

急がずゆっくりとMK108 2連装30mm機関砲を拾おうとする偽物。

勝ち誇った表情をしていた偽物

『浮遊脚』の機体性能

そして偽物との距離は約30m

それらが合わさり導き出された生き残るための賭け。

決して生存率の高くない賭け、だが悪くない賭けであった。

こんなところで死ぬわけにはいかないのよ。

ジェイミーはそう決心し、彼女は即座にその賭けを実行し始める。

ジェイミーは走った。人生でこれほど早く走ったことがないと自認するほどに早く

走った。

逃げるためではない、ジェイミーは今まさにMK108 2連装30mm機関砲を手に取った偽物に向けて走ったのだ。

その様子に偽物は目を見開く。

それはそうだ、ストライカーユニットを履き容易に人を殺しうる機関砲を手に入れた

自分に向かって、豆鉄砲しか持たない敵が全力で突っ込んできたのだから。

自暴自棄の行動か、それとも違うのか。

偽物にとつてどちらにせよ行うことは変わらなかつた。

偽物は自分に向かって突進して来るジェイミーを粉微塵にするために、MK108  
2連装30mm機関砲を彼女向かつて構える。

避けることも受けることもできない機関砲。

その砲身が自らに向けられようともジェイミーは目を離さない。

そしてその砲身の先、偽物である『ジェイミー・ボンド』の顔がニヒルに笑うのが見える。

あざ笑っているのだ『ジェイミー・ボンド』がジェイミー・ボンドのことを。

今まさに偽物によって挽肉にされる彼女のことを。

そんな憎い偽物の自身に対して、ジェイミーはポケットに入れていたある物を投げた。

それは細長い物体。どこからどう見ようが投げられたものはただのペンであつた。

偽物はその攻撃を見てさらに可笑しそうに表情を歪める。

死が確定した人間の、しようもない最後の一撃。それが彼女にとってもおかしく滑稽であつた。

ただのペンの投擲、シールドを張るまでもない。最後の一撃ぐらい受けてやろうと。偽物はその攻撃を体で受けた。

だが偽物は姿を騙っているのならば知っているべきであったのだ。

『ジエイミー・ボンド』の固有魔法の恐ろしさを

ジエイミーの固有魔法『起爆』

それは球状に近い物体に魔力を含ませた時、それに規定以上の衝撃が加わった時に爆発すること。

そしてその規定の衝撃の大きさは任意に変えることができ、爆発の威力は含ませる魔力量と物体が球体に近いほど上がる。

偽物は知っているべきであった。

その投げられたペンが近年流行り始めたペンであり。

その名を『ボールペン』言う名であることを。

そして『ボールペン』はその名の通り、ペン先に球体の金属が付いていることを。

つまり、投げられたのはただのペンでは無い。魔力が籠った『ペン型爆弾』となったボールペンだ。

パンツという軽い音になる。

右肩に突如起こった突然の衝撃と巻き散らかされるインク。偽物の右肩に当たったボールペンが爆発したのだ。

その爆発はあまりに小さな爆発。そんな小さな爆発による、怪我は偽物にはない。だがその攻撃は意表をついたものであり、その認識外の攻撃による痛みと爆発の衝撃は容易に偽物の体勢を崩す。

そして、空中での体勢が崩れるとどうなるか。その実演が目の前に繰り広げられた。

「——ツツツ!!」

空中に浮遊している偽物の体が大きくふらつき、偽物は本物を嘲る表情をついに崩す。

そりやそうだ。MK108 2連装30m機関砲なんて重い物を持ちながら体勢を崩したらこうもなる。それに加えて浮遊脚はまだ、『かなり扱いが難しく不安定なユニット』。そんな新型のユニットに初めて乗った偽物が、浮遊脚を履いているところとは陸戦ウィッチである偽物が、熟練の空戦ウィッチ達のようにすぐに空中で体勢を立て直せるわけがない。

だが、偽物もただのウィッチではなかった。初めて装備した新型ユニットの特性を瞬

時に理解し、数秒のうちに体勢を立て直す。

ただのウィツチならばその場で地面とキスするであつたはずの、この窮地を脱するその動きは、数々の修羅場をくぐつてきたのだと思わせる動きであつた。

しかしそれでも数秒間そちらに意識を集中することになる。

体勢を瞬時に立て直した偽物は前を向く。

するとそこには自らと同じウィツチの顔がすぐ近くにあつた。

そう、体を空中に浮かせ、胴体と地面を水平にし、胴体を中心に体をねじり、足を振り下ろさんとする『ジエイミー・ボンド』の姿がそこにはあつた。

「Ты 冗談 шутишь?」

偽物の口から溢れる綺麗なオラーシャ語。

ジエイミーによる空中での胴回し回転蹴り。まさかの白兵攻撃。

偽物にとって予想外なその攻撃はシールドを張るにはすでに近すぎる距離であつた。

曲芸じみたジエイミーの蹴り技は風切り音と共に振り下ろされる。

とつさに偽物が腕でガードしようとするがもう遅い。

「Good night!! クソ野郎!!」

ジエイミー・ボンドの叫びと共に、偽物の脳天に渾身の蹴りが直撃した



## 6話 拳打と銃撃

1.

地下駐車場に荒い息が響く。

偽物を倒した本物は倒れ伏した偽物の側で地面に横たわりながら激しく咳き込んだ。

それは死と隣り合わせの危ない賭けをした代償だ。

筋肉の限界を無視して走り、宙に浮いている相手には普通の蹴りでは当たらないと判断して繰り出された空中胴回し回転蹴り。

だがそんな慣れない曲芸の結果、彼女は受け身に失敗し地面に叩きつけられたのだ。

死の淵にいた緊張感、短期間での肉体の限界までの行使、受け身の失敗による痛み。その痛みと疲労が一気にジエイミーに襲いかかっていた。

ジエイミーは深呼吸をして猫耳と尻尾を消しながら息を整え、上半身を起こす。

そして先ほどまでのことを思い出し苦笑した。

『これ報告したらボスにまた小言を言われるわね。お前はアクション映画の俳優かってね』

あとは危ない時に漏れてしまいうりべリアンの様な口調を治さなきゃ、とジエイミーは

自身の欠点を独白しながら倒れている偽物を見下ろした。

自分と全く一緒の顔の手下人。だがその顔に変化が見られた。

金髪は白髪へと変わっていき、髪がみるみると伸びていつている。それだけではなく体の肉付きも少し変化し、顔はまるで靄がかかったかの様に見えなくなっているのだ。

術者本人が気絶したから固有魔法が解けてきているのか？

ジェイミーはそう思い偽物の身体検査を始める。

だが、見つかるのはナイフと先ほど偽物が使っていたS&W M10のみ、身元の特定につながる物品は見当たらない。

『もしもの時のために身元につながる情報は的確に潰している……その用意周到さから、やはりこの子も私と同じ諜報員かそれに近い何か……』

ジェイミーが気になるのは偽物が最後に思わずこぼしたオラーシャ語。素直に考えるのならオラーシャの諜報員となるが。だがそれも彼女の撒いたダミーの可能性がある。

そう思案しながらジェイミーは地面から立ち上がった。

それにしても、この固有魔法と思わしき現象の恐ろしさだ。これ一つで一体幾つの諜報任務が楽になるだろうか。そんな存在を内に抱え込んでいた組織はどこなのだろうか。

ジェイミーは考察するが、すぐにその考えを切り上げる。

尋問や推理は仕事じゃない。そういったことそれが仕事の人間に任せればいい。

それが彼女の出した結論だ。

とりあえず、銃声を聞きつけた誰かが来る前にこの場をどうにか片付けなくてはならない。

そんなことを考え、息抜きに懐からカスタムメイドのタバコを取り出したところでジェイミーの視界に一つの物が目に入る。

先ほどまでMK108 2連装30mm機関砲が置かれていた手押し車。

そこに一つのアタツシユケースが置かれてあった。

あれもまたMK108 2連装30mm機関砲と同じ浮遊脚に関わる物だろうか。

ジェイミーは疑問に思い、取り出したタバコを直しながらアタツシユケースに近づく。

するとぐしやりと何かを踏みつけた。

ジェイミーは地面とは違う感触に足元を見る。そこには従業員の体から出た赤い液体によって濡れた手帳らしきものが落ちていた。

おそらく従業員が銃弾によって倒れた時に落としたのであろうその物品。

思い出されるのは、この従業員と偽物が会話していた内容。

『受取人の運び屋はお前ではなかったはずだが?』

『あれえ? そうだっけ?』

『謀るな。もとよりお前の行動はいつも怪しすぎる』

『それは君の偏見じゃないかな? それよりも、『アレ』と『あれ』はちゃんと持ってきてるようだね。最初聞いた時は偽物でも持つてくるのかと思ったけど、どうやら本物のようだ。それ手に入れるのに一体どんな手を使ったんだイ?』

ジェイミーは疑問に思う。

『あれ』と『アレ』とはなんだ?

『あれ』が浮遊脚としたのなら、『アレ』はMK108 2連装30mm機関砲だろうか?  
?

確かにそれもあるだろう。だがジェイミーの直感は、『アレ』が目の前のアタッシュケースなのではないだろうかと告げていた。

あのアタッシュケースがなんなのかはわからない。下手をすれば開ければ爆発する爆弾かもしれない。ならばその前にやるべきことは1つ。

偽物の所持品にヒントはなかった。ならばその協力者と思われる従業員ならばどうだ?

ジエイミーはそう考え、従業者の遺品を拾おうとして……ふとあることに気がついた。

それは視界と感覚の違和感。

存在してしかるべきのものがいないという疑問。

『…血の匂いがしない?』

空調の悪い地下駐車場であるのにもかかわらず、従業員から溢れ出た血の匂いが一切しないのだ。

匂いのしない血などあり得ない。ならばこの赤い液体は血ではなく別の何かであり……

ジエイミーの脳裏に戦慄が走った。

すぐさまワルサーPPKを従業員の死体に向ける。

だがそこには死体はなく、見えたのは起き上がりざまに振るわれる従業員の右足

「ぐあつ…ツ!!」

ジエイミーの声にならない苦悶の声を上げワルサーPPKを取りこぼす。

右わき腹に直撃した鈍器による一撃を思わせるような蹴り。その一撃は的確にジエイミーの骨と内臓に深刻なダメージを与え鈍い痛みをもたらした。

だが致命傷ではない。

衝撃を足さばきで受け流すことも不可能と断じたジェイミーは大きく飛び退き転倒を免れる。

その際に腕からこぼれ落ちたワルサーPPKを足で弾き、拾われぬように転がした。カラカラと音を立てて両者の間合いから離れて転がっていくワルサーPPK  
追撃範囲から離れたジェイミーは距離を置いて、突然の襲撃者の姿を見る。

初めて会った時は体が細い若い男を思わせたその風貌は大きく変わっていた。

あの従業員らしい真面目な雰囲気は消え去り、重く剣呑な空気を醸し出す。細身に見えた体はガツシリと肉付き、そしてその顔は、今倒れ伏している偽物と同様に靄がかかって認識する事が出来ない。

『あいつ、自分だけでなく他人の顔もいじれたの!?!』

偽物が残した置き土産ともいえるべき現象に慄くジェイミー。

自身だけでなく他人も変装させる事ができるといふのなら、それだけで大きく世界を動かすことも可能である。

ジェイミーの意識が偽物の存在価値の大きさや考察に傾きかけるが状況がそれを許さない。

「じきに魔法が切れるな…時間がない」

従業員が呟いた言葉。その声質はロビーで聞いた彼の声と大きく変わっており、それ

が男なのか女なのか判別がつかない。

まるで音程を調節しているスピーカーのように声を変質して機械じみていた。

そんな敵対者は、突然体を倒れこむかのように前に倒すとその倒れこみを利用してジェイミーに急速に駆け寄って来る。

『疾い……!!』

その急速な接近に対して、即座に魔力を再び解放して猫耳を生やしたジェイミーは、重い一撃を受けた体を動かして対峙する。

彼女の意図しない2回目の戦闘の火蓋が地下駐車場で切つて落とされた。

1秒もせず両者は両者の間合いに入る。

そして間髪を入れずに従業員とジェイミーの格闘技が無数に交錯した。

互いの急所を狙う拳が空を切り、互いの肉体を傷つける打撃音が地下駐車場に響き渡る。

不意打ちを受け体調が万全でないにもかかわらずジェイミーはその拳劇に飢えた獣のように追いつがる。だがそれは彼女の最後の気力なのだろう。度重なる運動により筋肉が、受けたダメージにより内臓が、限界を超えて行使させられる脳や肺が悲鳴をあげ続けていた。

しかしそれでもなおジェイミーは縋り付く、筋肉が動かぬなら魔力で動かし、痛みが

動きを阻害するのなら痛みを忘れ、心臓を過剰なまでに行使して身体に栄養を行き渡らせる。それが後々の体にどんな悪影響を及ぼすのかという現実を彼女は無視した。なぜなら、彼女はこんなところで絶対に死ぬわけにはいかないからだ。

「……よくここまで鍛えたものだ。感心する」

そんな死に物狂いの彼女に対して従業員、いや敵からの賞賛が送られる

「——ッ！」

だがその言葉は彼女にとって良い意味になりえない。

なぜならそれは、彼女が肉体を限界まで酷使して戦闘をしているのに対し、目の前の敵は言葉話し、相手を賞賛する余裕があることの証明にすぎないからだ。

時間が経過することに徐々に追い詰められて行くジエイミー。それに加えて肉体が絞り出した最後の気力も枯れ果てようとしていた。

『一撃……一撃入れれば勝機はある』

ジエイミーは焦りながらも思案する。

魔力を付与した一撃を相手に当てさえすれば勝機はあるのだ。

その願いともいうべき思考の元、彼女は重い一撃を受ける覚悟で深く相手に近づき渾身の拳を叩き付けようとする。捨て身に近い右拳による一撃。その鬼気迫る拳の一撃を敵はあろうことか逆に近づいた。



そして拳が伸び切る前のジェイミーの右腕を容易く受け流し、敵はそのまま大きく一歩彼女の右後方に足を踏み込む。

次の瞬間、ジェイミーの耳に地面が強く踏み込まれる音が聞こえた。

その音に彼女は戦慄し視線を横に向ける。

横に見えるのは大きく右腕を弓の様に引き絞った敵の右半身。

シールドを貼ろうとするが間に合わず、とつさに左腕で右側頭部をガードするジェイミー。

だが放たれた肘打ちは頭部ではなくガードの空いた脇腹へと的確に突き刺さった。

「ガ……ハッ!!」

まるで槍による一撃の様に振るわれた鋭く重すぎる一撃。

肺の空気が全て吐き出され、脇腹から激痛が悶え走る。

そんな一撃を受けたジェイミーの体はゴロゴロと地面を転がし数メートル先の柱にぶつかり静止した。

もはや勝負はすでに決していた。

片や息一つ乱れず転がった少女を見下ろし、片や呼吸が乱れ痛みと損傷で立つことも体を起き上がらせる事もままならない。

しかし

『死んで……やるわけには……いかないのよ……!!』

悲鳴をあげ震える腕を床に叩きつけジェイミーは無理やり地面から起き上がる。

体はすでに限界を迎え、最後の気力も先ほどの一撃で吹き飛んだ。だが彼女の眼光是諦めていない。

その瞳は諦めや絶望の光を一欠片も灯さず、生き残るためにギラギラと輝いている。

もはや状況は生き残る道が耐えているのにもかかわらず、彼女は生きることと絶対に諦めていなかった。

そんな『自らの死』を頑なに否定し争う姿は、狂気ともいべき意志の強さでありもはや20にも満たない少女がする瞳ではない。

そんな彼女を見て、敵は哀れみの視線を向けていた。

「諦める気はないか……？」

それは憐憫の言葉だろうか？

10代でM I 6という重く暗いものを背負い続け生きてきた彼女への哀れみだろうか？

だがそんな言葉はジェイミーにとって無用の長物であった。

彼女は吼える

「だれが…諦めるものですか……！ 私には幸運と運命に恵まれているらしいのよ……こんな所で死ぬわけが……ないでしょうが!!」

ジェイミーの心からの叫び。それを聞いた敵はピタリと動きを止めた。

敵は彼女の言葉に感銘を受けて見逃す気になったのか？

それは否である。

敵は歩き、あるものを拾いに行く。

一つは手押し車に乗せられていたアタツシケース。もう一つは床に転がった別のもの。

左手にアタツシケースを持ちながら数歩歩いた場所にその鉄塊は落ちていた。

それはワルサーPPK。ジェイミーが先ほど落とした拳銃。

それを拾い、状態を確認しながら敵はジェイミーに語りかける。

「お前が自分のことを幸運と言うのなら、お前が運命に恵まれていると言うのなら試してやろう」

敵はそう言うのと右手でワルサーPPKを構え銃口をジェイミーに向けた。

「今からこの銃の中に残った2発の銃弾をお前に撃つ。魔力を使い無理やり体を動力している今のお前にはシールドが張れないだろう。だがそれでも、お前の言う幸運や運命がお前を生かすと言うのなら私はお前を見逃してやる」

這いつくばるジェイミーが見えるのは銃口と靄がかった敵の顔。

敵のその行動は戯れか、哀れみか、だがそのどちらにせよジェイミーにとって絶体絶命なことは変わりがない。

しかし、それでも生き残るチャンスが現れたのだ。

ジェイミーは心身を振り絞り、ウィッチになってから使い慣れたシールドを展開する。生き残る技

見慣れた青く光る魔法陣が術者の盾となるべく敵と彼女の間に阻む。

敵が使用できないと語ったシールドを展開して見せたジェイミー。

だがその光はすでに乏しく明滅し、弱々しいものであった。

それは敵によるたった二撃の打撃で彼女の体は限界を迎え魔力の安定ができなくなっているからだ。

『しつかりしろ私!! ここで死んだらアレンに笑われるわよ!!』

亡き友を思い出し自らの体を叱咤するジェイミー。だがまともなシールドを張る事が出来ないのは当然のことであった。

まだ20にも満たない少女に対して重い攻撃が二度も直撃したのだ。大人ですら苦悶する一撃を子供が耐える事ができるわけがない。精神論ではどうにかできない域まですでに達しているのだ。

だがそれでもジエイミーは足掻き続ける。脳を過剰に動かし目の前のシールドを強固にしようとする。

その生き残ろうとする執念は『ウィッチに不可能はない』という言葉を実証するがごとくハリボテのシールドを強固にしていく。

もしかしたら、もう少し時間を置けば銃弾1発ぐらい防げるシールドを作り上げる事が出来るのかもしれない。

しかし無情にも敵の銃口はすでにジエイミーの額に向けられ発射されようとしていた。

もはや防ぐことは叶わない攻撃。ならば避けるしかない。

『動け…動け動け動いて!!』

ジエイミーは奥歯を砕くほど噛みしめながら肉体に命令する。

だが筋肉は痙攣するばかりで動きを見せることはない。

足掻くジエイミー。その姿を無情にも見下ろす敵。

わき腹に二度目の打撃を受けた事によって完全に傾いた戦いのシーソーゲームは終わりを迎えようとしていた。

射撃者によってワルサーの狙いはすでに定められている。

その時、運命は定まった。

『この距離ならば外すことはない』

射撃者はそう認識し、撃鉄を落とした。

2.

響いたのは一発の銃声。硝煙の匂いが香り、撃たれた者の血が地面に滴り落ちる。

「……ぐう!？」

そんなうめき声とともに、敵の右手からワルサーP.P.K.がこぼれ落ちた。

ジェイミーは突然のことに混乱して目を白黒させる。

一体何が?とジェイミーが思索していると『射撃者』の聲が駐車場に響き始めた。

「バーテンダーから話を聞いた時は驚いたわ。あの『ニセ伯爵』がたった2杯のカクテルで酔い潰れて眠っているなんて、ありえない冗談を聞いたのだから」

鈴のように鳴り響く女性の声。

そんな声で語る彼女はカツンカツンと音を立てながら近づいてくる。

「だってありえないのよ。あの酒好きが2杯で酔い潰れるなんて。それも女の子を口説いている途中にね。」

その姿は白いドレスを着た銀髪の女性

だがその表情は固く、格好とは不釣り合いな剣呑とした雰囲気醸し出している。

「なら考えられるのは薬。誰かが私の戦友に薬を盛ったという事」

そんな彼女は、その華奢な体には似合わない、カールスラント軍に支給される拳銃であるワルサーP38を持ち、銃口を敵に対して構えている。

「第一容疑者はあの人が誘っていたカジノの給仕。聞き込みをしてみたらボロボロと情報が出てきたわ。よっぽど急いでいたのね」

その視線は鋭く、まさに軍人の目であった。

そんな彼女目がちらりとジェイミーを見つめる。

「後で、詳しく事情を聞かせてもらおうわ」

彼女はジェイミーに一言うと再び敵に視線を向けた。

『エディータ・ロスマン曹長』

カールスラントのエースの1人にして502JFWの英雄の1人がこの混沌とした地下駐車場に姿を現したのだ。

## 7話 顔なしとアシダカ蜘蛛

1.

相対した軍人と従業員。

ロスマンの銃口はヒタリヒタリと右腕から血を流す従業員に向けられている。

そんな光景を、膝をつきながら見るジェイミーは自身の不手際により命を救われた事実  
実に呆然としていた。

睡眠薬を飲ませたら、飲まされた人物の友人が怒って犯人を探しに来て、その友人が  
犯人の九死に一生の場面を助けてくれる。

前世で一体幾つの善行を行ったらこんな幸運に恵まれるのだろうか？ と彼女は自  
らの幸運に度肝を抜かれる。

とは言っても完全に幸運なわけではない。

もし本当に幸運な運命を持っているのなら、こうやってM I 6の仕事なんてやってい  
るわけがないし、この状況を打破した後にロスマン曹長から逃げなくてはならない事にな  
っていないからだ。

ジェイミーを捕獲するのが同じブリタニア所属ならば大丈夫なのだが、ロスマン曹長



はカールスラント軍人。

他国の軍人に諜報員が見つかり捕まった場合、昔から決まって同じことが起こる。それは、その諜報員への拷問か、その諜報員の謎の死である。

絶体絶命なのはかわりない。だが死は遠ざかったのだ。

その事実にはジェイミーは安堵しこの後、どうするのかを思案し辺りを見渡す。

目の前の状況は、未だ上手く体を動かすことがままならない私、相変わらず倒れ伏している偽物、右腕から血を流しながらも痛みがりもしていない従業員、そして従業員に対して綺麗なシューティングフォームでワルサーP38を構える軍人。

『……何をどうしたらこうなるのよ』

どうするかではなく、どうしてこうなったかを考えてしまったジェイミーは一人独白した。

だがそんな時、状況に変化が訪れた。

従業員が肩を震わせ笑い始めたのだ。

彼、まはや彼女は右腕が銃弾で貫かれ痛みが感覚を襲っているはずなのに、靄で見えない表情を歪ませ不気味に笑う。

「何がそんなに可笑しいのかしら？」

そんな不気味な存在にロスマンが詰問する。

その詰問に対して従業員はまるで降参するように両手を上げ始める。

右手は血が滴り、左手にはアタッシュケースが握られている。

そんな従業員の表情は相変わらず霏がかかったかのように見えない。だがその霏は先ほどより晴れてきている気がする。

従業員がロスマンに対して返答を始める。

その声は先ほどと同じ機械音のような声だが、少しずつ肉声に近づいていた。

「可笑しいに決まっている。エディータ・ロスマン曹長」

名乗ってもいないのに名前を呼ばれる。

この行為は普通なら少しは動揺するものだが、ロスマンは眉をピクリと動かすだけで動揺しない。

「あら、名乗った覚えはないのだけど？」

「502の英雄は有名だからな…出会えて光栄だ」

「そう…こっちは全く嬉しくないわKein Gesicht<sup>顔</sup>さん」

ロスマンは思う。

当たり前だ。誰が好き好んでこんな状況に身を踊らせる羽目になるといふのか。

ただ私は戦友に薬を盛った相手を捕えるために地下駐車場にきたのだ。

そしたら、ストライカーユニットを履いた少女が倒れているし、給仕の子が死にそうになっているし、その子に銃を向けて殺すとしているホテルの従業員がいる。しかもその従業員はKein Gesichときたものだ。

もう無茶苦茶で訳がわからない状況。

見るからに厄介ごとであり、本来なら関わるのを避けるべき状況だったのだが。

それでもウィッチである私は目の前で人が死ぬことを容認できなかったのだ。

その結果がこの状況。

クルピンスキーが騒動を起こすことへのお目付役として向かわされた私が結局騒動のど真ん中にいる。

『これじゃあ、今後あの人のことをとやかく言えないわよ…』

そんな頭痛がすることを考えるがそんなことを顔にお首も出さず、

Kein Gesichを睨む。

睨まれたKein Gesichは未だに体を震わせ笑っている。

まるで今の状況に危機感を抱いていない様子であった。

「ああそれは残念だな…。それでなんで笑っているかだったか…」

Kein Gesichは声を震わせ語る。

その雰囲気、笑い声、そして靄にかかつて見えない表情のせいで、一層不気味に見える

る。

するとKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>な</sup>は顔をジェイミーに向けた。

「な……何……？」

突然顔を向けられたジェイミーは困惑する。

Kein<sup>顔</sup> Gesich<sup>な</sup>はじつとジェイミーを見つめた。

それが何を意識しての行動なのかはジェイミーにはわからない。だが、なんらかの感情を含んでいる行動であると容易に想像がたった。

そんなジェイミーの様子に満足したのかKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>な</sup>はロスマンの方向を向き直り、なぜ笑ったのかの軽い声で説明をした。

その声はまるで楽しい思い出を語るかのような語り口であり、ロスマンには理解できない答えであった。

「フォーチュンクッキーの占いは当たるものだと思ってな」

その答えはロスマンにとってはなぜ笑いつながるのかわからない答え。

だが、その答えを聞いたジェイミーは違った。

「え………？」

本日何度目かもわからない呆然とした彼女の声。

だが今回に関して今日は今日の中で最も彼女の意表をついた言葉であった。

なぜならばその答えは、彼女と彼女の戦友の思い出を知っていなければ答えることのできない答えだったから

その様子に気がついたのかロスマンは眉をひそめる。

その時であった。

ガチャンという音が響く。

それはアタツシケースのロックが外れる音であった。

Kein Gesicht<sup>顔</sup>は両手を上げながら、左手に持ったアタツシケースを開いたのだ。

アタツシケースの口が開き内容物が公開される。

そしてそれを見たジェイミーとロスマンの思考が一瞬停止した。

内容物は二種類。

たくさん書類と二つの透明なシリンダー。

シリンダーの大きさはワインボトルほどであり、二つのシリンダーの中には共に一つの綺麗な宝石のような物体が入っていた。

それは、赤く輝く結晶状の物体。

それは人類の天敵の心臓。それはここにあってはならない物

『ネウロイコア』

なぜそんなものがこのモノコにある？なぜコアだけが存在している？

そんな疑問が頭の中に浮き上がる前に1つのことが起きた。

片手で開かれたアタツシユケース。

本来ならばそんな開け方をしたら溢れるはずのアタツシユケースの内容物だが、内容物はしっかりとケース内のベルトでロックされているため開いても内容物が溢れることはなかった。

……1つのシリンダー以外。

それはワザとなのだろうか、偶然なのだろうか、1つのみベルトでロックされていないかったシリンダーは、ゆっくりと重力に従いアタツシユケースから傾きこぼれ落ちていく。

わずか数コンマの瞬間であるのにもかかわらず、その動きはゆっくりと見え、まるで時間が遅延しているようであった。

だが、一つの絶叫がその遅延を打ち砕く。

「コアを撃てえええツツ!!」

ジェイミーの絶叫にも似た叫び声が地下駐車場に響き渡る。

だがその声を聞くのは倒れ伏している偽物、シリンドーを宙に踊らせた  
K<sup>顔</sup>ein Ges<sup>な</sup>ich<sup>し</sup>、そして唯一銃器を持った軍人の3名のみ。

ロスマンは地面にダイブするシリンドーに向かって瞬時に銃口を動かす。

その動きをみてK<sup>顔</sup>ein Ges<sup>な</sup>ich<sup>し</sup>は身を翻しアタツシユケースとともに逃げ出した。

だがロスマンは、従業員の動きを視界の端で追いながらも無視をする。

ロスマン曹長は今この状況が、何が起こってこうなったのかは全く理解していない。だがそれでも、あのシリンドーが割れてコアが外に出たらとんでもないことになることから湧き上がる危機感が告げていた。

なぜなら彼女が見間違うはずがないのだ。多くの戦友と国民を殺戮して来た人類の天敵の心臓の事を。

ロスマンは狙いを定める。

『空中から落ちるシリンドーの中にある小さなコアを地面に落ちるまでのわずかな時間で撃ち抜く』

そんな曲芸、彼女の知る限りできるウィッチは『偏差射撃』の固有魔法を持つグンドユラ・ラルしかいない。

そんな魔法はロスマンにはない。だがそれでも彼女には当てられるという確信が

あった。

ロスマンのJG52の経験が、502JFWでの日々が、人々を守るという義務感が、上で眠る友を守るといふ熱い想いが、彼女をアスリートのようなゾーン状態へと導いていた。

彼女は今まで自らが教え子たちに教えて来た銃の撃ち方を忠実に言い始める

『体重の重心は前へ』

『身体は目標に対して正面を向く』

『腰は両足の間で安定させる』

『頭ではなく腕を動かし銃と視線を目標と一直線に』

コンマ数秒で彼女はそれを完全にこなした。

普通の人間からしたら信じられない一瞬の動作。だがそれは不可能ではない。

その動作を行うだけの、肉体と経験と知識をロスマンは、カールスラントのエアス達は皆所持している。

『当てた』

トリガーを引いた瞬間彼女は必中を確信した。

撃鉄が落とされる



確かに、ロスマンはこの行動を行うだけの肉体と経験と知識を持っていただろう。

だがそれは前述した通り、カールスラントのエースならばだ。

ロスマンは思い出すべきであった。今の自分はカールスラントの軍服を着た曹長ではないことを。

ロスマンは知るべきであった。ゾーンに入った集中した意識が、射撃以外の意識を、注意力を排斥してしまっていることを

撃鉄によつて銃弾の雷管が叩かれ発射薬に添加された瞬間、人間には知覚不可能なそんなわずかな瞬間にロスマンは違和感を覚えた。

『体幹が…おかしい?』

今まで数多の生徒達に何度も教え実演してきた拳銃の撃ち方。

けれど、それと同じことをしているはずなのに、この時に限つて発砲した時の衝撃を受け流しきれない自らの体の違和感。

だがそれは当たり前のことであつた。

今の彼女の姿は、いつもの軍服と軍靴ではなく白いドレスとハイヒールなのだから。動きやすい軍服とドレスでは、地面との接触面積が軍靴とハイヒールでは、射撃をす

る際の誤差が違いすぎた

彼女は気がつかなかったのだ、一発目の従業員の右腕を狙って放った銃撃が『幸運』に恵まれて命中したことを。

ロスマンの一撃はシリンドーに直撃する。

しかしその銃弾はコアを掠るだけだけにとどまった。

シリンドーは地面と接触し、派手に割れた。

巻き散らかされる中に入っていた無色の液体とコア。

ロスマンは外してしまった事に動揺しなかった。

動揺し体を固まらせるほど彼女の軍人としての経歴は短くない。

すぐさま銃口を修正し第二射を打ち込まんとする。

それは1秒も満たない素早い行動であった。

だが、その速さよりも早く動いたものがいた。

それは新たな乱入者か？いや、それは最初からこの地下駐車場にいた。

『ソレ』は長年の拘束を解かれた事で瞬時に自らの使命を遂行し始める。

目の前の存在が自らを殺すよりも早く、自らのコアを守る肉体を再生する。

響く二射目の銃声。

それは『コア』ではなく、『ネウロイの外皮』を削るにとどまった。

三射目は発射されなかった。

突然現れた巨大なものがロスマンの体を吹き飛ばしたからだ。

それは横薙ぎに振るわれた蜘蛛のような足。

その足は黒く巨大であり丸太のように太い。その一撃は瞬時に貼られたシールドごとロスマンの体を弾き飛ばした。

宙を舞う華奢で小柄な体。

彼女はコンマ数秒の浮遊体験の後に激しく車に体を激突させた。

激しい衝突音とともに車がひしやげる。

「ロスマン曹長ッ!!」

ジェイミーがロスマンに駆け寄ろうと前へ1歩進もうとするが、その目の前に巨大な杭が突き刺さり行く手を阻む。

いや、杭ではない。

それもまた足であった。

ジェイミーは突然自らが影に覆われた事に気がつき上を見上げる。

そこには蜘蛛がいた。

普通の蜘蛛ではない、トラツクのように大きい体は鎧のような黒い外骨格に覆われ、そこから丸太のような太い8本の足が生えている。

そしてその体から生えた顔はじつと目の前のジエイミー<sup>獲物</sup>を見下ろし、節足動物ではありえぬ縦に開く顎を開き、鋭い牙を見せる。

ネウロイ。

形状からして名付けるなら、『アシダカ蜘蛛ネウロイ』がそこにはいた。

ジエイミーは目を閉じていたわけではなかった。だが彼女が瞬きするような一瞬のうちには目の前のネウロイは、コアが外気に触れた瞬間その体を再生させていたのだ。

あまりに速すぎる再生速度。それについて彼女が思考するよりも前に、彼女の頭を噛み砕かんとネウロイの開かれた顎が近づく。

『いっ！まで来て……ッ！』

体が重く身を翻し逃げることでできないジエイミー。

そんな彼女は後数秒でたどり着く自らの死を防がんと、シールドを展開しようとする。

無駄なあがきとも言える行動。だが彼女は死ぬまで生きることが諦めないのだ。

「やっぱり君は、ドブネズミのように生き汚いネ」

その時、轟音が響いた。

1つではない、幾重もの砲撃音が地下空間に響く。

その音の発生源をジェイミーはすぐに理解し、そちらに目を向ける。

そこには倒れながらもMK108 2連装30mm機関砲を持ち打ち続ける偽物の姿があった。

偽物の顔には靄がすでにかかっておらず、頭に狼の耳を生やしたニヤついた性格の悪そうな表情が見える。いつから彼女が起きていたかはわからない。しかし、彼女の瞳の焦点があつていないことから頭部へのダメージが回復していないことがわかる。

だが、瞳の焦点が合わずとも、目標は地下駐車場という限られた空間の中におり、しかも巨大である。

そんな存在に毎分650発の砲弾が当てられないはずがないのだ。

音が重なり合う轟音とともに機関砲から放たれた30×90RBmm弾は地下駐車場と『アシダカ蜘蛛ネウロイ』を穴だらけにしていく。

響く轟音、弾ける外壁、崩れるネウロイの外皮。

圧倒的な破壊が辺りに巻き散らかされる。

すでに『アシダカ蜘蛛ネウロイ』は穴だらけで体が崩壊していた。普通の生き物なら死ぬはずの致命的損傷。だがネウロイはコアを破壊しなければ死ぬことはない。そしてこのネウロイにはその驚異的な回復スピードがある。

『アシダカ蜘蛛ネウロイ』は連装砲によって体を崩壊されながらも、その崩壊以上に体を再生し足を我武者羅に暴れ回し始めた。

容易に人を殺し売る8本の巨大な足が暴風雨のように暴れ狂う。

その結果、弾き飛ばされた瓦礫や車が宙を舞い踊った。

考えるまでもなく当たるだけで死に至る、車という名の鉄塊や瓦礫。

それらが、天井や床を跳ね返り、転がり、弾き飛ばされ死の暴風雨となって暴れまわる。

「くDあmnた iれt!!」  
 「くqあepたrt:」

奇しくも同じことを吐き捨てた両者にも、弾き飛ばされた無数の車や瓦礫が襲いかかった。

シールドで受けるか？避けるか？それとも撃ち落とすか？

どれが最も生存率が高いのか二人の思考が回転する。

だがその思考が結論を出す前に、二人を助ける存在が飛んだ。

それは魔力を惜しげも無く全力で使った方法。足にはち切れんばかりの魔力を込め彼女は今にも瓦礫によってミンチになりそうな二人に向かって飛んだ。

ウィッチはストライカーユニットがなくても箒で飛ぶことも可能なのだ。

ならば魔力を使えるだけ使い、飛行時間さえ考えなければ、生身で一瞬の時間だけ飛ぶことは可能である。

彼女は、いやエディータ・ロスマンは地下駐車場を超低空飛行で砲弾のように飛び、体当たりのように二人のウィッチを拾い上げた。

次の瞬間彼女たちがいた場所に無数の車が転がる。

まさに九死に一生の出来事。死を避ける行動。

だが安心はできなかった

確かに、飛ぶことはできるだろう。

だが止まることはできないのだ。

「頭を守りなさい!!」

ロスマンの大声が二人の耳に聞こえる。

二人は瞬時に頭を抱えシールドを張る。

風を切り裂く風切り音。ロマーニヤの12歳のエースパイロットが聞き慣れたその音が3人の耳に音を奏でた次の瞬間。

3人のウィッチによる砲弾は着弾した。

2.

3人のウィッチによる突撃によって生まれた大きな衝撃と激突音。

普通なら目を引くであろうそんな轟音は『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の聴覚には入らなかった。

なぜならその音は『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の暴れまわる音によってかき消されたからだ。

ネウロイは暴れまわる。

自分への攻撃は無くなった。だが土煙と瓦礫まみれで確実に敵を殺せたかが認識できな

くない。

だがそれでもネウロイは暴れまわった。

なぜかはわからない。ただただネウロイは暴れまわる。

それはまるで長年拘束された鬱憤を晴らすように

それはまるで攻撃された仕返しをする激情に飲まれていくかのように

それはまるで、なにかに操られるかのように



## 8話 自己紹介とフットボール

1.

固い感触がする。

その感触がいつもの枕の感触が違うことに気がつき少女は胡乱な目で開眼した。

最初に目に入ったのは優しげな瞳。

そこには黒髪の少女の顔が自身を見下ろしていた。

まだ十代中頃の欧州人系の顔をした黒髪の少女。彼女のことを少女は聞いていたが

膝枕されるほど仲良くなつた覚えはなかった。

そんな黒髪は少女が目を覚ましたことに気がつき口を開く。

「私の膝枕の寝心地はどうだ？ ルーキー」

そんな声を聞いたルーキーと言われた少女は顔をしかめて起き上がった。

ボサボサの金髪の長髪が体の動きによつて揺れ動く。その姿は黒髪の少女よりもさ

らに幼い姿であつた。

「別に……」

取り付く島もないような返答をした金髪の少女はボサボサになつた自らの金髪も気

にせずにあたりを見渡す。

そこは無機質なロツカールームであつた。

そして今いるのはそんなロツカーに置かれた長椅子。そこで自分はこの黒髪に膝枕されていたのだろう。

そんな現状を思い出し、次は自室で体を休めようと思い少女は立ち上がる。

その様子をじつと見つめていた黒髪の少女は少し呆れた顔で彼女に再び声をかけた  
「随分と鍛錬を頑張っているらしいじゃないか。だがあまりやりすぎると体を壊すぞ？」

今日初めてあつたのにもかかわらず遠慮なしに喋る黒髪の忠告

そんな声を煩わしく思いながら金髪の少女は黒髪に背を向けて身を正しながら答えた。

「エリートですから大丈夫です」

答えになっていない答え。幼い少女にしては固すぎる返答。

だがその答えには金髪の少女の信念が籠っているような重い感情を含んでいた。

そんな返答に、何が可笑しいのか黒髪は体を震わせて笑い始めた。

突然の笑い。嘲笑ともいふべきその声を聞いた金髪はバカにされたのかと思い、振り返り黒髪を睨む。

だが睨まれてもなお黒髪は笑い、口を開いた。

「そのエリート。『候補生』でしかも『元』…だろ?」

その返答を聞いた金髪は顔を真っ赤にして拳を振り上げ黒髪に突進する。

振り下ろされんとする拳。

だがその拳を振るう腕はあまりに幼くひ弱であった。

次の瞬間にはその腕は黒髪によって受け止められ、そのまま流れるように体を抱きとめられてしまった。

「は、離せ!!」

金髪の少女がバタバタと暴れる。

その姿は先ほどまでの子どもらしくない固い表情ではなく表情豊かであった。

黒髪はそんな少女をあやすように今度は少女の両脇をもちあげる。

「や、やめなさい!! 恥ずかしいでしょ!!」

子どもに行う『高い高い』のように持ち上げられた少女は、今度は怒りではなく羞恥で顔を赤らめながら叫ぶ。

そんな年相応な様子に満足したのか、黒髪はウンウンと頷き。

「よし、気分転換にいっしょにお散歩でもするか」

そのままロッカーから出て廊下を歩き始めた。

「や、やめて!!子供扱いしないで!! ツ!!その人見ないでください!!」  
ブリタニアのある基地の廊下でそんな少女の声が響く。

だが哀れにもそのまま数分の間黒髪によって彼女は運ばれるのであった。

## 2.

「うう…運ばないで…見ないで…」

何か変な夢を見ているのだろうか、ジェイミーの寝言がポツポツと紡がれる。

だがそんな寝言も、辺りに時折響く騒音のせいで気にもならない。

狼はニヤニヤと笑いながら、そんな寝言を言うジェイミーの鼻と口を覆った。

手のひらに生命の呼吸があたり、それが徐々に荒くなつていく感触に快感を得ていく  
変態。

だがその快樂もすぐに終わる。

「…? …… ツ!モゴツ!フゴツ!」

寝ていたジェイミーはあまりの息苦しさに目を覚ました。

彼女が最初に目の前に見えたのは、狼の耳を生やして頬を染めたニヤついた笑顔。

先ほど機関砲をぶつ放し、その前は人の顔を勝手に借りて散々嘲笑してきた女。

「あんだ!! 一体なんのつも…っ痛った!!」

詰問しようとしたジェイミーは、その言葉を途中で途絶えさせ脇腹を抑えた。

未だ広がる鈍い痛み、その痛みが突然体を動かしたせいで再び振り返ってきていたのだ。

その様子を可笑しそうにニヤつきながら偽物は答える。

「ああ、あまり無理しないほうがいいヨ。多分肋骨にヒビが入っているからネ」

ジェイミーを心配する言葉。だがその表情は心配ではなく嘲笑を意味していた。

ニヤニヤと笑う偽物にもう一発蹴りをぶち込んでやろうかとジェイミーは思案すが代わりの物がすぐに偽物に下された。

ポカンという音と共にゲンコツが偽物の頭に振り下ろされた。

偽物は頭を摩りながら後ろを振り返る。

「ひつどいなア……」

「あなたがこの緊急事態にふざけるからでしょう」

エディータ・ロスマンはこんな時にでもふざけた雰囲気崩さないその姿にデジャブを感じながらため息をつき、ジェイミーに目を向ける。

「気絶していたようだけど、大丈夫かしら？」

「は、はい。意識はちゃんと明瞭です」

偽物とは違う優しげな声にジェイミーは思わずこくりと頷いた。

辺りには瓦礫が巻き散らかされ、横転した高級車の陰に3人はいた。

ジェイミーは床に寝そべっており、偽物は足に浮遊脚を履いたままジェイミーの真横に座っている。そしてロスマンは横転している車に背を預けていた。

するとその時、轟音があたりに響きわたる。それは巨大な何かが振り下ろされ車がひしゃげる音。

『アシダカ蜘蛛ネウロイ』が未だ暴れている。

その音を聞いたジェイミーは表情を改める。

「状況はどうなっているのですか？」

ネウロイに見つからないようにささやくような大きさの声でジェイミーの口から溢れる。

その声に対して偽物は答えた。

「状況も何も、さつきと変わらないヨ。相変わらずあの謎のネウロイが此方たちを探しているヨ」

「謎のネウロイって…あれはあなたの組織が持つて来たものでしょう？」

ジェイミーは偽物を睨みつける。

その視線を受けた偽物は、さっぱりだとも言うようなジェスチャーをして、その表

情には先ほどと同じニヤついた笑みが貼り付けられていた。

最初に対峙した時と全く変わらないその雰囲気。顔は変われどあのイラつく偽物と同一人物であることが確信できる振る舞いであつた。

偽物がジエイミーの追及に答える。

「知らないものは知らないヨ。此方はあれを持つてくるように言われただけだからネ」

「どの口が言いますか」

「この口だヨ」

「は?」

「それにしても、今更敬語で喋つて猫かぶつても意味ないヨ?リベリアンもどきちゃん?」

「あ? やるなら今ここで息の根を止めてあげるわよ??」

脱線する話。威嚇し合う猫と狼。

だがそんな喧嘩もすぐに狐によって終止符がうたれる。

「いい加減になさい!」

振り下ろされたのはゲンコツ。頭をかかえる二人の諜報員。

生徒を叱る先生のようにゲンコツを振り下ろしたロスマンは深くため息をついた。

私が話を進めないダメなのね。

ロスマンはそう決心し、二人を交互に見て口を開く。

「まずは自己紹介をしましょう。知っているかもしれないけれど私はエディータ・ロスマン。階級は曹長で今は第502統合戦闘航空団『ブレイブウィッチーズ』の所属よ」  
唐突に語られたロスマンによる自己紹介。

そしてどうやら、彼女が話の司会進行を取ってくれようとしていることに気がついた残りの二人は顔を見合わせ、此れ幸いと用意している自己紹介を話した。

「シユテファニー・ブロードチェストです。カジノの給仕をやっているものです」  
「ヴァルトルート・クルピンスキーだよ。よろしくネ」

「…そんな嘘が今更通用すると思う？」

冷たい視線と共に向けられるワルサーP38。そして、スタンドアップする二人の両手。

今更給仕のふりをするには遅すぎっており、片方に至ってはその名前はロスマンの戦友である。顔も背丈も髪の色すら似ていない。

もう、二人が普通の少女ではないことを知っているロスマンに対して偽装の身分は意味をなさなかった。

諜報員にとって自らの情報はとても重要なものだ。



だがそれは策謀が渦巻く人間社会の中でのみの話であり、ネウロイがすぐそばで暴れているこの状況下では意味をなさない。むしろ今更ごまかす余裕はない。

ここで下手にごまかしてしまえば信用を得られず、今のこの状況は3人で協力しなければ潜り抜けられない状況なのだ。

それにジェイミーは思う。

別に今の名前を教えたところでこの名はコードネーム。それに所属を言ったところでその名を調査しても、ブリタニアがそんな人物知らないと言えばそこで終わる話だ。

そしてこの身分はウソではない。下手な嘘を言えば怪しまれ信用を失うが、『ジェイミー・ボンド』という身分は今の私にとつての本当の身分なのである。

ジェイミーと偽物の二人の諜報員はやつと自らの身元を語り始めた。

『『ジェイミー・ボンド』ブリタニア軍秘密情報部の所属よ』

『『フジコ・ルーガルー・アンウィン』ロマーニヤ軍の諜報員だよ』

一瞬の空白。だがすぐに二人の視線が一人に集中する。

「…はっ？」

「…本気？」

語られた二人の自己紹介。だがジェイミーとロスマンは『フジコ・ルーガルー・アンウィン』と名乗った女を睨みつけた。

フジコは扶桑の女性名。アンウインは英語の家名。ルーガルは人狼のガリア語での読み方。所属はロマーニヤ、よく口ずさむ単語はオラーシヤ語。

赤ずきんに出てくる嘘つき狼もびつくりのウソまみれ。

しかもこのウソはワザとらしい、すぐわかる嘘ときている。

だがそんな事を知らないと言うように、ルーガルは嘘う。

「お互いの呼び名さえわかればいいだろウ？」

ロスマンは熟考する。

明らかにあからさまにあやしい自己紹介。だがそれをここで怪しんでも答えは見つかることはなく、そもそも言うなら『ジェイミー・ボンド』と名乗った彼女も本当ことを言っているのかわからないのだ。

それに今は彼女達を尋問するよりも、あのネウロイを倒すことが先決。

「わかったわ。ルーガル。詳しい身元は後で聞きましょう」

「……」

ロスマンはなんとか納得し、同じ事を考えていたであろうジェイミーも顔をしかめながら無言で同意する。

「助かるヨ、二人とモ。この状況を脱したら本当のことを言うサ」

ルーガルはウインクしながら二人に感謝した。

これでお互いの名はわかった。なら後に行くのは現状の打開である。

「それで、あれをどうにかする算段はあるの？逃げれそうにはなさそうだけど」

ジェイミーは車の陰から顔をゆっくりと出しながら二人に問う。

今ネウロイは駐車場から外への出入り口の前で暴れまわっている。

そのせいで逃げようにも、出入り口を塞がれてしまっており逃げ出すこともできない。それに加えて、地下駐車場から建物への出入り口はすでに瓦礫によって塞がれてしまっていた。

だが問題はそれだけではない。

ジェイミーの視線がロスマンの足に向く。

彼女のあの砲弾のような移動による弊害なのだろう。その雪のように白く綺麗な足首は青く腫れ上がっており、内出血をしているのが見て取れた。

その足首を見るだけでジェイミーは彼女の高潔さに身を背けたくなった。

ジェイミーは思う。

こんな状態ではロスマン曹長は歩くことができない。

だがこうなる事は行う前から彼女もわかっていたはずだ。しかしそれでも彼女はウィッチとして私たちを救うために行動した。

人を救うために魔力を使うその姿は、国家利益だけのために魔法を使う私たちよりも傷ついてはいけなかった存在だ。

ジェイミーがそんな思いとともに向けた視線にロスマンは気がつき、視線の先を見て苦笑した。

「気にしなくていいのよ。おかげであなたたちを救えたのだから」

自らのした事への後悔が一切見られないその表情はやはり眩しい。

「そうだとしても…」

ジェイミーはその答えを聞いても暗い表情を変えようとしない

そんな彼女の様子に、友人に睡眠薬を盛った諜報員とは思えないほど落ち込んでいる姿に、ロスマンは、あの時バーで感じた怒りが少し収まるのを自覚する。

それと共にふと彼女はバーのある一つのことを思い出し、それを口にするこ  
た。

「24フラン」

「…？」

「あなたがバーで払ってくれたクルピンスキーの酒代よ。」

ロスマンはそう言うのと微笑みながらジェイミーに告げる。

「あなたが私の行動が気になるなら、私の行動は酒代の借りを返すために行っただけ

とにして。」

ロスマンはそう語ると、茶目つ気のある笑顔をジェイミーに向ける。

そんな笑顔について頬を赤らめ顔を背けた。

微笑ましい光景。だがそのバックコーラスではネウロイによって車がスクラップになる音が響いている。

ニヤニヤと二人の様子を見ていたルーガルは口を開いた。

「とりあえず、ロスマン曹長がこれだから逃げられない。なら隠れてネウロイがどっかに行くのを待つてみるかい？ 確かモナコに501などのエースが来てたからなんとかなのでハ？」

「確かにそうかもしれないけれど。それは……」

ルーガルへの提案にロスマンが待ったをかけた。

確かに彼女の言う通り、逃げれないのなら救助を待つしかない。それかあのネウロイがどこかに行くのを隠れてやり過ごすのが一番だろう。

だがここから去ったネウロイが何をするのかは想像に容易い。

間違いなくウィッチが駆けつけるまでの間に多くの死人が出る。

それは軍人として、ウィッチとして避けなければならないこと。

そんなロスマンの苦悩する表情を見たルーガルはもう一つの案を出した

「なら倒すしかないネ。とは言っても武器はこれだけだけド」

そう彼女はいい、武器を広げる。それに応じてロスマンとジェイミーも手持ちの武器を広げた。

3人の所有している武器が地面に置かれた

ワルサーPPK 装弾数2発

ワルサーPPKのマガジン3つ

ワルサーP38 装弾数4発

ククリナイフ2本

「あれを倒すには火力が足りないわね…」

ロスマンの呟きとともに沈黙が広がる。

とてもあの『アシダカ蜘蛛ネウロイ』を倒せるような武器ではない。

絶望的な状況の中、ククリナイフを二本しか出さなかったルーガルーをジェイミーはジロリと見た。

「あんたS&Wはどうしたのよ…」

「踏み潰されたネ」

「じゃあ機関砲は…」

「あそこにあるわ」

「……？」

ルーガルーではなくロスマンが答え、指で指し示した先。そこにジェイミーは視線を向けると確かに機関砲が転がっていた。

砲身どころか胴体の真ん中からひしゃげ、ただの鉄塊となつてはいるMK108 2連装30mm機関砲の哀れな姿があつた。

「どうすんのよ……」

「二応ナイフがあるからあのネウロイ切り刻めるけど、あの巨体じゃあ、ククリナイフの刃の長さではコアまで届かないヨ。それにあんな巨体の攻撃長時間捌けない」

「切り刻めるって……。ルーガルー、あなたやっぱ何者なの？」

「扶桑のウィッチだヨ、ロスマン先生」

「さつきと所属が変わっているじゃない……」

無為な会話が続いて行く

だがいつあのネウロイがその場で暴れまわるのをやめ、外にその歩みを進めるのかわからない現状そう時間は多くなかった。

3人のウィッチは3者ともに考え込む

そんな時、現状を打破する答えがなかなか導き出されないジェイミーは再度同じ質問をルーガルーにした。

「もともとあんたの組織の物でしょ。なんでもいいから情報はないの?」

「だからさつきも言ったように、ろくに知らないヨ。元から此方は裏切るかもとされていた人員だからネ。機密情報は渡されず、渡される仕事もしようもない運び屋仕事ばかりサ」

「で、現に裏切ったと言うわけね」

「そういうこと。一応覚えているのは、あれが『遺児』の一つつてことだケ」

「『遺児』?」

「そう『遺児』。だけどそれ以外の情報はわかんないヨ。あの見たこともない謎のネウロイなんて……」

「見たこともない?」

二人の会話にロスマンが疑問を上げた。

二人はロスマンに視線を向けて見ると、そこには疑問符を頭に浮かべ困惑したロスマンの表情があった。

その表情をみてジェイミーは目を瞬かせながら聞く。

「ロスマン曹長、あれを見たことがあるの?」

「見たも何も、あなたたちも軍学校で見たことあるでしょう?」

「???」



「……」

ロスマンの返答に逆に疑問符を頭に浮かべる二人。

その様子に本当に知らないのかと驚いたロスマンは二人に説明を始めた。

「あの形のネウロイは第一次ネウロイ大戦の初めごろに見られたネウロイよ。あのネウロイはその身体構造のほとんどがアシダカ蜘蛛の体を参考にしてているわ。そんな形状が特に目立ったから戦場で写真も撮られていて。その写真が各国の教科書に使われていたはずなのだけ……」

語られて行くネウロイの知識。

諜報員たる二人が知らないのも無理はない。現在を生き、ネウロイではなく同じ人間相手に戦う彼女たちにとって、30年も前に存在したネウロイの1個体という雑学に近い情報は触れる機会がなかったのだ。

そんな雑学にルーガルは感心しながらロスマンに質問した。

「ヘエ…… そんなに情報があるならコアの位置もわかったりするのかい？」

「昔と同じなら、胴体と首の付け根。人間でいうならば『うなじ』ね。とはいってもそのコアを撃つための火力が足りないのには変わりはないわ」

思案しながらロスマンは答える

ロスマンの知識により確定ではないが心臓部の予測はついた。だが、そのコアを潰す

ための火力が不足しているという問題は超えられていない。

「なら、ボンド。君の固有魔法で爆破出来ないのかい？」

ルーガルーがジェイミーに聞いてくる。

確かに先ほど手痛い一撃を受けた彼女はそう思うだろう。その質問が来ることを予測していたジェイミーは彼女にとって残念な回答をした。

「私の固有魔法は、球体であればあるほど爆発しやすいけど、球体でなければいほど爆発の威力も爆発しやすいかも変わるのよ」

「つまり……？」

「弾丸を爆発させようとしても、形状が球体に近くないから、弾丸に込めた魔力のほとんどが爆発の起動のためのエネルギーに使われて爆発火力が落ちる。」

「あー……どれぐらいい？」

「野球ボールならあのネウロイの片足吹っ飛ばるけど、ラグビーボールなら外皮を削る程度」

「そりやまた極端だね」

その答えにルーガルーは苦笑して手を挙げた。

まさにお手上げ。

そんな彼女に今度はジェイミーが質問した。

「そっちこそ浮遊脚履いているのだから、どうにかならないの?」

「どうにかしたいのは山々だけれど、手元に武器がないからねえ。たとえば歩行脚に近い魔導エンジン履いていても出来ないものはできな…」

「まって」

ロスマンの一言が再び二人の会話を止めた。

二人は先ほどと同じようにロスマンを見る。

彼女は何か思いついたような顔をした後、真剣な目で二人に疑問を投げかける。

「その付けているユニットは浮遊脚なのね?」

「そうだヨ」

「浮遊脚は歩行脚に近い魔導エンジンを積んでいるのね?」

「そうですね」

「ルーガルは一応あの足の攻撃をナイフで捌ききることができるのね?」

「長くは持たないけど5分ぐらいなラ」

「最後に聞くけど、ジェイミーの固有は誘爆するの?」

「まあ、しますね」

ロスマンは目を瞑り、頭の中でピースを組み始める。

コアは頭の付け根

武器は少数。

歩行脚に近い魔導エンジンを積んだ浮遊脚。

5分ほどなら捌ききることができるウィッチ。

誘爆する魔法を付与できるウィッチ。

そして501

ロスマンは組み上がった現状の打開策の内容に頭痛を感じていた。

あまりに突飛で頭の悪い作戦。成功する見込みもない。

だがそうやって眉間にしわを寄せていたロスマンを見てジェイミーが笑いかける。

「ロスマン曹長。何か思いついたのならそれをやりましょう」

ルーガルも頷きがそれに同意する。

「対人に関してはプロのつもりだけど、ネウロイに関しては先生がこの場で一番のプ

ロフェツショナルなのサ。従うヨ」

そんな二人に見つめられ、ロスマンは決心を固める。

そして作戦概要を話し始めた。

「行うかどうかは置いておいて、一つの家としてを聞いて…」

所属も生きて来た道も違う3人のウィッチの作戦会議が始まった。

3.

「みなさん落ち着いてくださいーい！」

従業員たちの声が響く。だがその声も走り逃げる客たちの騒音によつてかき消される。

数刻前にホテルに響いた無数の砲撃音、その音は地下から聞こえ、その後には何かが暴れているような振動がホテルを襲う。

そしてきわめつけは一つの鳴き声であつた。

多くの者たちが聞いたことがあるその声は金属を捻りすり合わせたような特殊な声。そう、ネウロイの声がこのホテルの地下から響き渡つたのだ。

その声を聞き、多くの客たちが狂乱し逃げ回る。そんな客達を今、従業員たちが必死に避難誘導を行つていた。

彼らの様子を見ながら富豪はため息をつき内心で独白する。

予想外の事態である。

まさか、一匹の飼い犬が裏切つたせいでここまでひどいことになるとは思ひもしなかつた。

今聞こえる声は、おそらくは『遺児』の一匹。

浮遊脚を逃し、『遺児』を解放してしまったのは大きな痛手とはいえ、優秀な部下が書類と残りのシリンダーだけは回収して来てくれただけ、よしとするべきなのかもしれない。

だが、こうなってしまうては後始末が大変である。

各国の様々な組織が今回のことの調査に入るだろう。

富豪は再びため息をする。

今回の騒動のせいで、このままでは『計画』にまで別組織からの手が及ぶ可能性が出て来た。

それは非常に低い可能性だが、可能性が生まれたこと自体がまずいのだ。

そしてその対策として用意していた予防策を発動させなければならない。

問題はその予防策が、自らの子供のように可愛がっている優秀な部下が私に頼み込んできた願い事を潰して行こう策だからだ。

富豪は傍らに立つ2人の秘書に命令をする。

それは対象を『強制的な引き抜き』から『トカゲの尻尾』に変更する命令であった。

4.

『アシダカ蜘蛛ネウロイ』は暴れていた。

目に入るものを壊しつくす勢いで腕を振り回していた。

そんな時、ネウロイの視界に一体の生き物の姿が現れる。

その生き物は足におかしなものを履いて浮かび、両手に刃物を持っていた。

そちらに体を向けるネウロイ。だがその巨体を向けられてもなおその生き物は嗤い、手に持った刃物を動かす。

その動きはまるで手招きしているかのような動きであった。

次の瞬間にはすでにネウロイの体は動いていた。

轟音のような風切り音、鳴り響く金属音、あたりを彩る無数の火花。

暴風雨のように振り回される『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の脚部。

その巨木のような足に人間が掠りでもすれば脳震盪、直撃すればひき肉となりうる。

そんな自らの攻撃が、些細な衝撃と共に軌道がずれていく違和感をネウロイは感じていた。

目の前で線香花火のような火花が無数に咲いていく。

その煌めく火花は目の前の存在が両手に持った武器で黒塊の足を弾いたものだろう

か

ならばそれごろ潰さんとネウロイは踏み潰すように足を叩きつける。

だが、それすらも僅かな感触の後に軌道がそれ、無為に地面を破壊した。

ルーガルーはその場に浮き続け動かない。

ただ両手に持った二本のククリナイフを振るい、宙に無数の刃の線を描いていく。

その線の一本一本が黒線に触れると白い閃光を放ち、それと共に黒線の進路は乱れあらぬ方向に流れる。

ネウロイは自らの巨体から繰り出される必殺の攻撃が、矮小な存在の細腕によって弾かれる現実には違和感を募らせていった。

ルーガルーは別に攻撃を弾いているわけではない。

あのような豪脚の一撃を弾きでもすれば、良ければ手に持ったククリナイフが折れ、悪ければ腕ごと持ってかれる。

だからルーガルーは逆にその豪脚に刃を絡め引き寄せ、その勢いに後押しをさせていた。

その結果、ネウロイの攻撃は勢いを増すがそれによって着弾地点がずれルーガルーから攻撃がそれていく。

『剛に対して柔で制す』

扶桑の武術の極意が欧州人の手によって再現されていた。

だが武術を怪異に実践し成功させるなどこの世に幾人いるだろうか？

目の前で行っているのは普通の人ならば腰を抜かすほど恐ろしい巨大な大蜘蛛、そしてその



巨大な怪異の8本の豪脚によつて振るわれる暴風雨なのだ。

だがそんな中を狂人は嗤い、武術を示して行く。

狂人には確信があつた。

相手が人間ならばまだしも目の前にいるのはただの獣。このような技法など想像もつかないだろう。

その確信は正しかった。

ネウロイは目の前で募る違和感に対して策を弄するのではなくさらなる剛で対抗し始めた。

豪脚の暴風雨は津波となる。

巨木のような足が幾十にも見え死の壁を作り出す。もはやその速度は動体視力で捉えるのも難しいほど早く、例えるならばまさに『死の津波』

その津波が一斉に目の前の矮小な生き物に襲いかかる。

だがその光景を見てもなお、狂人は嗤う。

確かに、この死の津波を全て流すことは不可能だろう。

そう……全てならばだ。

次の瞬間、ネウロイは爆発音を聴覚が認識すると共に視界が暗転した。

目を覆われたのか？

そんな怪異の考えは現在の身体損傷状態の報告により覆される。

今の爆発により視覚器官吹き飛んでいたのだ。すぐさま急速に視覚器官の再生を始めるが、間髪おかず2射3射と顔面に直撃し爆散して行く。

爆発を引き起こしたのは一人の諜報員。

瓦礫を盾に割座に座ったジェイミーが、ワルサーPPKで固有魔法を込めた。32ACP弾を撃つたのだ。

だが、その攻撃は視覚器官を潰しても先ほど彼女が語ったようにその威力は小さく、『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の驚異の再生速度に完全に負けている。

だがそれでも、その弾丸によって作り出された僅かな暗転によって死の津波に穴が作り出されたのだ。

その時ネウロイは聞いた。目の前の矮小な存在による侮蔑を含んだ嘲笑を。

「ГЛУПЫЙ……狩りは一人でするものじゃないヨ」

ジョンブルの活躍によって生まれた僅かな綻びをルーガルーは認識し、その穴を二本のククリナイフでこじ開ける。

視覚を奪われた事によって数本の黒線がルーガルーからそれていく。

だがそれでもまだ存在する彼女に直撃せんとする猛攻を、彼女はより正確に、より早

く、よりの確に。彩る無数の白刃が津波をかき分けて行く。

ネウロイの思考が苛立ちに染まる。

決死の乱舞は目の前の存在に防がれ、それに苛立ち攻勢を増そうとすると、その出だしを的確に後ろの射撃手が潰して行く。

ならば射撃手を潰さんとしても目の前の存在が邪魔である。

幾度火花が散つただろうか、だがルーガルの動きは一向に鈍る様子がなかった。殺せるはずの矮小な存在が未だ存在し続ける現状。

ネウロイの心に生み出されるのは苛立たしき、煩わしき、鬱陶しき。そんな感情が湧き上がるが、ネウロイの胸中に焦りだけはなかった。

ネウロイは経験で知っているのだ、

目の前の存在はよくわからないものを履いてはいるもののあの雪国で無数に蹂躪した矮小な生き物。

そんな貧弱な体がいつまでもこの猛攻を耐えることができるわけがなく、いつかは息切れを起こす。

万が一近づかれたとしてもあんな小さな刃物では殺されるわけがない。

その知識と共にネウロイは乱雑に腕を振るう。だがそれもまた再び弾かれた。

ちようどその瞬間、突然飛んで来た5発の9 x 19 mmパラベラム弾が振るわれよう

としていた足達の関節に直撃し、その動きを一瞬静止させた。

ネウロイはその弾丸が飛んで来た方向を見る。

その方向は、ジェイミーがいる方向とはまた別の方向。エディータ・ロスマン曹長がワルサーP38を構えていた。

ルーガルの剣戟、ジェイミーとロスマンの射撃、ネウロイの慢心。

それらが組み合ったのか、一瞬だけ繰り広げられていた暴風雨が、作られていた死の津波が消え去ったのだ。

生み出された僅かな隙。

それでもネウロイに焦りという感情は存在しない。

だがネウロイは……いや長年眠り拘束され続けていた怪異は知らなかった。かつては蹂躪したその生物が今は自らの巢すらも殺しうる力を手にしていることを。

その力の一つが、いま彼女が履いているストライカーユニットだということ。

先ほどの無数の砲撃を受けた時点で、怪異は人類の技術の進歩に気がつくべきであったのだ。

浮遊し、宙に留まり続けていたルーガルーが初めて動きを見せる。

確かにネウロイのいうとおり、小さな刃物で、小さな拳銃では今ここにいる『アシダカ蜘蛛ネウロイ』を殺すことは難しい。

だが、代わりになるものはある。

その方法は、ロスマン曹長が501JFWによるガリア解放の真実を知った時に知った情報。

その方法は、501JFWの戦いの最後を飾った決死の一撃。

その方法は、常識はずれと名高い扶桑の魔女の中でもさらに常識はずれが行なった最後の攻撃。

ルーガルーが空を舞った。

その動きは奇しくも数刻前自身が受けた曲芸と同じ動き。

体を地面と水平にして、胴を捻り、右足を振るう。

空中胴回し回転蹴り。

しかしその蹴りは『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の胴体には届き得ない距離。

空中を空振りする滑稽な曲芸。

だが、そもそも彼女は蹴りを当てるのが目的でこの技を行なったわけではない。

勢いと飛距離を伸ばすために行なったのだ。

「刺激的な料理をこ馳走してあげるヨッ!!」

そんなルーガルーの声と共に回転蹴りは放たれ

ストライカーユニットが宙を舞った。

右足から故意にすっぽ抜けたユニットは、まるでフットボールの選手がゴールにボールを蹴り入れるように、『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の開いた顎の中に蹴り込まれる。

ひしやげる浮遊脚。口腔内を舞う部品。

そして、起動する固有魔法と暴発する魔力エンジン。

「kaboom!」

ジェイミーのリベリアンもどきな決め台詞と共に、『アシダカ蜘蛛ネウロイ』の頭はうなじごと大爆発の閃光に包まれた

## 9話 ウォーロック計画とヤヌス

1.

爆発によつて発生した土煙により、視界のほとんどが遮られている。

地下駐車場は今まで散々暴れまわつたおかげでズタボロになつたせいか、元々外壁や床だつた砂のように細かい残骸が宙を舞い、地下空間であるがゆえに風が吹かず宙にとどまつた土煙が辺りを見えなくさせていた。

だがそんな細やかな残骸も時間を置けば重力に引かれ地面に落ちていき、時間と共に少しずつ視界が開いていく。

そんな中、土煙に囲まれながらジエイミーはホツと一息ついた。

自分が一步間違えれば、人の死に関わるのは精神を疲労させる。それがたとえ、一時的に協力しているだけの仲間とはいえどもだ。

そんな事を思いながら彼女は作戦立案時のことを思い出し、手に持ったワルサーPPKを下ろした。

それはロスマン曹長が提案した一か八かに近い無茶な作戦。

浮遊脚を爆弾がわりにして、敵の口腔内にぶつける作戦。

ルーガルは面白がってその案に乗り、501の宮藤芳佳がストライカーを特攻させてコアを撃破していた話を知っていたジェイミーもまたその案に乗ってみたのだが、まさかここまで上手くいくとは思わなかった。

作戦に成功したのは、ルーガルの超人的な刃物捌き、『起爆』の固有魔法、ロスマン曹長の正確な射撃があつてからこそであり、誰一人欠けていては『アシダカ蜘蛛ネウロイ』を打倒することは不可能であつた。

ジェイミーはそんな実感と共に奇妙な達成感を感じながら体を起こし立ち上がる。

彼女は最後の瞬間、浮遊脚の爆発とともにネウロイのコアごと頭が四散したとき、爆風によって吹き飛ばされ地面を転がっていったルーガルを見ていた。

『吹っ飛ばされて気絶してるかもしれないし、拾って来てあげますか』

認めたくはないが、最も危険な仕事を任せてそれを達成したルーガルへの感謝を胸中に浮かばせながら、ジェイミーは未だ痛みで重い体を引きずるように歩き始める。

だが数歩歩いたところでコツンと彼女の後頭部に何かが当たった。

「…喋るな。止まって両手を上げろ」

後頭部に接触する固い感触と警告を発する声。

ジェイミーは突然後ろからかけられた言葉に一瞬体が固まり、すぐに警告に従って歩



みを止めた。

後方からかけられた声は、最初まで聞いていた機械つぼさがなくなった女性の肉声。そしてその声はジェイミーには聞き覚えがあった。

ジェイミーは両手を上げながら今自らの後頭部に銃器を突きつける人物に質問する。  
「……私のワルサーを拾っていたから拳銃を持っていないかと思つてたけれど、持っていたのね」

「ロスマン曹長から借りたよ。まあ返事はもらつていないが」

Kein Gesichの返答にジェイミーは最悪の展開を考える。

あのロスマン曹長が易々と自らの武器を渡すはずがない。

ジェイミーの背筋が今日一番に凍りつく。

「……ッ!? あんたまさかっ!!」

「……気絶させたただけだ。私は諜報員でもないウィッチは殺したくない」

今すぐ掴みかかりそうなジェイミーの様子にKein Gesichはロスマンの

無事を語る。

Kein Gesichのような怪しい人物の言うことは信用できない。

だがジェイミーは、彼女の言う『ウィッチを殺したくない』という文言に動きを止める。

この文言もまたジェイミーにとって聞き覚えのある『相棒』の言葉であった。最初のフォーチュンクッキー、今の文言、そして何よりこの声。

ジェイミーの中で疑念が確信に近くなっていく。

その思いに耐えれなくなりジェイミーは、自らに銃口を向ける彼女に尋ねた。

「あなたは……アレンなの……？」

その声は震え、信じたいような信じたくないような複雑な気持ちが含まれていた。

『私は死体を見ない限り死んだと信じないと決めている』

昔の上官がジェイミーに語った言葉が頭の中で反復され、Kein Gesichが死んだはずの相棒なのかという疑問が、彼女の胸中に渦巻く

後頭部に拳銃が当てられたまま時間が進んで行く。後頭部に接している死に意識が集中してしまい、数秒が何十秒にも長く認識できるような静寂の時間が過ぎていきさつていく、

そんな時間がジェイミーには何秒何分たったかが分からなくなったその時、Kein Gesichは解答した。

「アレンは死んでいる。私は……そうだな、Kein Gesichだ」

静寂を破るその返答は平坦で何も感情を含んでいない。

だが6年ぶりとはいえジエイミーが相棒の声を間違えるわけがなかった。

「馬鹿も休み休みいいなさい！私があんたの声を聞き間違えるはずが…!!」

「…最初に喋るなど言った」

「——ツ!!」

コツンと後頭部を銃口で小突かれる。

聞きたいことが山ほどあるが、後頭部に銃口を当てられている彼女は黙って聞くしかない。

ジエイミーが黙った事を確認するとKein Gesichは喋り始める。

「…お前がここまで優秀だとは思わなかったよ。ジエイミー・ボンド。」

「浮遊脚と遺産を手にいれたまでは良かったが、あの狼とお前のせいで計画がむちゃくちゃだ」

「おかげで博士が残したウォーロックの遺児を一つ無駄にする羽目になった」

ジエイミーを責めるような口調。だがその言葉の中に聞き逃せない単語が含まれて

いた。

ウォー  
Warlock

ウォーロックとは、男の魔術師の事を指すことが多い単語。

だがその単語は近年では別の意味を持つものとなっている。

## 『ウォーロック計画』

ブリタニア空軍元大将 トレヴァー・マロニーが推し進めたウィッチに頼らない人類の新たな力を作り出す事を目的とした計画である。

軍上層部にも秘密裏に進められたこの計画は新たな力を作り出すことに成功している。

それが、ネウロイコアを使った無人人型航空兵器『ウォーロック』

『ウォーロック』の力は凄まじく、その力は人類がなしえなかった偉業である、ネウロイの巢を破壊に成功した。だがその後『ウォーロック』は人類に牙を剥き最後には501 JFWによって破壊されている。

その後、この計画と事件は、事件に関わった人物と軍上層部の一部しか知らない機密となった。

人類の新たな敵を作ってしまう、最新の人類の過ち

そんな最上級の厄ネタ。

だが、ジェイミーに驚きはなかった。

その理由は、あのネウロイのコアが入ったシリンドーだ。

コアを活性化させず保管するなど『ウォーロック計画』の技術がなければ不可能だからだ。

さらにそこから考えられることとして、そんな機密となった技術を使っているということは、Kein<sup>顔</sup> Gesich<sup>な</sup>の組織の人物たちの中に、おそらく『ウォーロック計画』に深く携わっていた人物がいる事となる。

『ウォーロック計画』に携わっていた人間は限られている。

トレヴァー・マロニーはそれによりこの計画は機密性を高め、501JFWが暴くまで誰一人知られないほど、この計画を隠蔽性の高いものにしていった。

その隠蔽性の高さにボスが驚いていた事を、計画の後始末に駆り出されたジェイミーは知っている。

ジェイミーの頭の中で、後始末の際に見た人物リストが流れていく。

『ウォーロック計画』に携わっていたものの多くが左遷や解雇にあっている。だがその人物の中で一人だけ行方不明になっている博士がいた

「アルス・フィーゼラー博士…?」

ジェイミーの口から人名が溢れた。

その瞬間後頭部にある銃口がさらに強く押し付けられる。

「…やっぱり優秀だな『元』エリート」

「…ッ!!」

Kein<sup>顔</sup> Gesich<sup>な</sup>から送られる賞賛の言葉。

だがその言葉もまた、ジェイミーの思い出を刺激する言葉であった。

グリグリと後頭部に銃口を押し付けながら *Kein Geschick* は語りかける。

「…そんな諜報員として甘い、それ以上に優秀なお前を本当なら仲間引き入れたかった。だがこうなつてしまった以上お前は『トカゲの尻尾』となつてしまった」

語られていく *Kein Geschick* の言葉の羅列。

だがその言葉の羅列は語られていくほど感情がこもつていく。

その感情の名は落胆や苦悩だろうか。

*Kein Geschick* の言葉は続く。

「…お前はこれから今回の騒動の犯人に仕立て上げられるだろう」

「それは私たちの組織の根回しもあるし、この騒動の早急な落とし前をつきたい各国の思惑も含まれている。」

「…わかるだろう？ おまえなら」

「お前の死によつて、この騒動は終わる事を」

各国の著名人が集まる式典の前日に起きた今回の騒動。

浮遊脚が盗まれ、銃撃戦が起こり、ネウロイが現れた。

こんな大騒動、もちろん調査が行われるに決まっている。

だが、今の各国の策略や陰謀が渦巻くモナコで下手な調査をされてしまつては各国の

痛い腹を探られる可能性が出てくる。

そのためどの国は早急に騒動を終わらせたいのは確実だ。

騒動を終わらせるにはどうするか。

それは昔から決まっている。

騒動の犯人を見つけて罰すればいいのだ。

その罰せられるものが本当に犯人なのかは関係がない。だれかが矢面に立てばそれで終わる。

そして今、その誰かはジェイミーであり、一度矢面に立たされれば、ただの一人の諜報員など母国が庇うことはなく、そのまま各国の赴くままに犯人に仕立て上げられるに違い無い。

それに、ルーガルーがジェイミーの顔を真似ていた事から、Kein Gesich  
の組織はルーガルーを使って作った私が犯人であると言う偽の証拠も作っているのは容易に想像できる。

また、MI6のエージェントであるジェイミーの経歴を知っており、『浮遊脚』をこんなに容易に盗んでいることから、おそらくKein Gesichの組織は各国にも顔が利くのだろう。

だが今はそのことはどうでもいい。大事なのは犯人として捕まったらどうなるかだ。

犯人となったジェイミーがどうなるのか、彼女にとってそれは想像に難しくは無い。良ければ痛みもなく死ぬが、悪ければ苦しんで死ぬ事になる。

どちらにせよ死ぬ事には変わりがない。

しかし、そうなる事で各国間の平穩は保たれる。

ジェイミーから冷や汗がタラリと流れ落ちた。

そんな顔を青くするジェイミーをKein Gesichはじつと見下ろす。

「…なあジェイミー・ボンド。それでも、お前は生きたいか？」

Kein Gesichからの質問。それはジェイミーに言い聞かせるような声であつた。

自らの死によつて騒動がおさまる事を教えられた後で行われる問い。

だがその問いはすぐに返答された

「生きたいに決まっています」

迷いが一切見られぬ力強い答え。

その答えに動揺したのか押し付けられていた後頭部の感触が離れる。

それを認識したジェイミーはゆっくりと振り返つた。

そして額に銃口を突きつけられながらもKein Gesichと視線を合わせ吼



える。

「私は絶対に死んでなんかやらない。見知らぬ犯人のための人柱になんかなくてやるものか！ 人柱にされる前に犯人を、あんたをひっ捕らえて突き出してやるわよ！」

そう語るジェイミーの瞳は、初めてKein Gesichと対峙した時と同じようにギラギラと輝いている。

彼女にとつて『生きる』とはいかなる状況にあつても揺らぐことはない信念。たとえどんなことがあるうと彼女は『生きる』事をやめない。そして何より彼女は人の尻拭いが大嫌いだ。それが敵ならなおさらな事である。

そんな信念を胸にジェイミーは初めて靄のかかつていないもKein Gesichの顔を見た。

その顔はまぎれもない6年前死んだ『アレン』の顔。

6年ぶりの相棒の表情。間違えるわけのない親友の顔。

しかし

「それと……あんたアレンじゃないわね。誰なの？」

ジェイミーは銃口を向けられながらもKein Gesichを睨みつけ、言い放つ。

彼女には確信があつた。

彼女が『生きる』と言う事に執着する源流は『アレン』によるものだ。

その源流たり得る『アレン』が私に『生きたいか?』という当たり前のことを聞くわけがないのだ。

その直感がKein Gesichtとアレンが違うという自身の判断を揺るぎないものにしていた。

Kein Gesichtはそんな確信とともに向けられる視線を真正面から受け止める。

そして、その表情を崩した。

「…なるほど、これが『ジェイミー・ボンド』なんだな」

「——ッ!?!」

ニヘラとしたルーガルーがするような表情。

そんなアレンの表情を、相棒であつたジェイミーは一度も見たことがなく違和感と不気味さに背筋を震わせる。

『…いつは…なんだ…!?!』

相棒の声と顔を持つが明らかに違う相手にジェイミーは動揺する

そんな動揺したジェイミーを見て取ったKein Gesichtは嗤う。

その時複数の音が聞こえて来た・

それは足音。

いくつもの音が地下駐車場の出入り口から聴こえてくる。

その音から一つ一つが統率された動きを感じさせ、おそらくは軍隊、または警察機関であることに想像がつく

「…君の迎えが来たらしい。君が生きたいと言うのなら、逃げないとな？」

Kein Gesichは楽しそうに嗤い語りかける。

『マズイ…』

ジェイミーに動揺が走る。

建物との出入り口は塞がれ、唯一の出入り口である外への道は人々が来ている。

最初の計画通りなら、巻き込まれて怪我をした一般人のふりをして病院に運ばれた後に逃げ出す予定だったが、Kein Gesichの言う通りに私が犯人になるように根回しされているのなら、病院ではなく軍の基地か警察署に運ばれる可能性が高い。

そして何より、いま私の目の前には銃口が煌めいている。

表情を歪め打開策をジェイミーは思考する。

今日何度目かもわからぬ、ジェイミーの危機。

だがそんなおそろく今日最後だと思いたいジエイミーの危機は再び同じウィッチによつて救出される事になる。

ジエイミーの視界が突然揺れ、体が突然浮いた。

いや、抱えられたのだ。

その動きにKein Gesichは瞬時にワルサーP38を発砲するが、放たれた9x19mmパラベラム弾はシールドによつて弾かれる。

「まったく、世話がやけるヨ」

そんな呆れた声を出すのはルーガル。

彼女は片足のみの浮遊脚で宙に浮きジエイミーの体を抱えていた。

まだ、作られたばかりで操作性が悪い浮遊脚を片肺で履いて浮くという曲技にKein Gesichだけでなく、助けられたジエイミーも目を見開く。

「あ、あんた!!それができるならなんで私の時に体勢崩したのよ!!」

「一度失敗した事を二度も失敗する人間はいないサ」

「…む、無茶苦茶な」

危機に陥っていた猫を救出した狼はKein Gesich《顔なし》に嗤いかける。  
「で、殺り合うかい?」

餓狼を思わせるどう猛な笑みを向けられたKein Gesich《顔なし》は、彼

女に向けていたワルサーP38を下ろす。

「…いいや、行くといい」

その様子にルーガルは表情を落胆させ聞き返す

「あれ？随分とあつさりなんだネ」

「…すでに、出回っているからな」

「ああ、そういうことネ」

Kein Gesicht顔の答えに納得し、ルーガルは視線を出口に向ける。

そこにはワラワラと手に拳銃を持ったモナコ警官たちが来ていた。

ネウロイの声が聞こえていたのにもかかわらず、市民を守らなければならぬという崇高な使命感で拳銃という貧弱な装備で駆けつけた彼らには悪いがジエイミーたちにとっては邪魔なだけである。

このままモタモタしていたら完全に出口をふさがれる可能性もある。

ルーガルは体を傾け今すぐにでも出口から逃げようとする。

「さて、しっか捕まっついてヨ、ジョンブル」

「ま、まちなさいー！」

ルーガルの忠告にジエイミーは反論する。

だがルーガルはその反論を待たずに脱出を始める。

そんな彼女たちに銃を下ろしたKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>し</sup>は語りかける。

「私が誰だかと聞いたなジェイミー・ボンド」

その声に、ジェイミーはルーガルの肩に負ぶさりながらKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>し</sup>を見る

「え？」

ジェイミーは驚いた。

それはKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>し</sup>の表情は先ほどの啞う表情ではなく、6年前にアレナがジェイミーに向けていた何かを信じるような何かを託すようなそんな表情だったからだ。

「…私は『ヤヌス』所属のウィッチ、『オナトツプ』」

「…ボンド、生き残りたいのならアルス博士を探せ。彼女は鉄の貴婦人と共にある」  
オナトツプと名乗った彼女の姿が遠ざかって行く。

聞こえてくる警官隊の怒声と浮遊脚のプロペラ音。  
ジェイミーには理解できなかった。

最初は自らを殺そうとし、相棒との思い出を知っており、偽物かと思ったら本物のよ  
うな表情をする。そんな『オナトツプ』という女がわからなかった。

遠ざかって行くKein<sup>顔</sup> Gesich<sup>し</sup>

だがジェイミーは最後にオナトツプの口が動くのをみた。

すでに距離があり、周りの騒音でその声は聞こえない。

だが、それでもその言葉は口の動きで理解できた。

それは祈りの言葉であつた。

『Pray for you』

そんな、祈りと共に猫と狼はついに地下駐車場から抜け出した。

## 10話 JICとMI6

1.

いつもの喧騒とは違う喧騒に包まれているモナコ。

街にいた人々が足早に自らのホテルに帰って行くのを警官は眺めながらため息をつく。

『われらがモナコは呪われているのか…』

彼がその連絡を聞いたのは1時間も前。息を吹き返したかのような人に人の熱気が溢れる故郷の姿を見て仕事に励んでいた時に同僚の警官が慌てて連絡をよこしてきた。

なんとネウロイが突然現れたという連絡だ。酒を飲みすぎた酔っ払いしか相手にしたことがない警官にとつてはどうしようもない自体。だがやるべきことはやろうと避難誘導を始めると、今度は別の事件が起きた。

それは明日の式典で登場するストライカーユニットが盗まれたというのだ。

回ってきた手配書には特徴が書かれており、犯人が見る限りまだ20にも満たない少女であることがわかる。

活気を取り戻した日に起こる度重なる事件に、故郷を愛している警官は涙が溢れそう



であった。

すると、目の前に帽子を被った二人の女性が通り過ぎて行く。その一人の格好が手配書に書かれていた特徴と合致したため警官は後ろから声をかけた。

「あのーレディ。少しよろしいでしょうか」

「何でしよう……？」

女性が振り返り警官と目がある。

薄く化粧をしながらも可愛らしい顔立ちの女性。そんな女性の帽子からはみ出ている髪の毛は赤毛であった。

『あちゃあ、手配書には金髪と書かれていたから別人か……』

手配書に書いてあった身体的特徴が一致しない。つまりは別人である。

警官は自身の失態を自覚しながら、声をかけられたことに戸惑っている赤毛の女性に話を続けた。

「じつはある少女を探しているのですが、レディと似たようなドレスを着た金髪の少女を見ませんでしたか？」

警官はそう言つて、彼女たちに手配書を見せる。

見せられた二人は興味深そうにその手配書を見た。

「うーん。見てませんね。ねえあなたは見た？」

「いやゝ。見てないヨ？」

赤毛の女性が傍にいる女性にも聞くがどちらも知らない様子。

警官は呼び止めたことに頭を下げ、彼女たちが去って行くのを見送った。

彼女たちが曲がり角を曲がり、姿が見えなくなつてから警官は再びため息を吐く。

『早くこの騒乱が終わればいいのに…』

そんな警官の祈りはモナコの夜空に消えていった。

## 2.

「で、君に言う通りここまでできたわけだけど、どうするんだい？」

ルーガルーは歩きながら、森林を歩くには適さないドレスを着た前を歩く少女に聞いた。

「ここはモナコの山岳部。つまりは森の中。明かり一つないそんな森を二人のウィッチが歩いている。」

先導するのはジェイミーであり、彼女は目的地に向かって歩みを黙々と進めている。

「確認しなきゃいけないことがあるのよ……それよりもあんたなんで着いてくるの？」

ジェイミーは鬱陶しげに着いてくるルーガルーを見る。

そんな視線を向けられた心外であるとも言おうようにジェイスチャーをしながら答

えた。

「僕も君と同じ追われる身なんだ。協力しようヨ。それに僕の固有魔法が有用だってさつきわかったでしヨ？」

「……」

ルーガルーの正論にジェイミーは赤毛に変わっている自らの髪を弄りながら反論をしない。

現に彼女の固有魔法のおかげで二人は楽に街を突っ切ることができた。

先ほど警察官に手配書を見せられた通り、ジェイミーの手配書はモナコに出回っている。そんな状態ではルーガルーの固有魔法を借りなければモナコを脱出することもできないだろう。

だが一応、その手を使わなくても脱出する方法はある。

それは同じMI6である『双子』の手を借りればいい。

事前に緊急事態が起こった時の合流地点は『双子』と決めてある。なのでそこにいけばいいだけの話だが…

『やっぱり気になるのよね…』

しかしジェイミーは合流地点には向かっていなかった。

それは彼女の胸中に幾つかの疑念が浮かんだためである。

その疑念は言葉ではうまく説明できないものだが、それでも彼女はその疑念を晴らすためにも彼女はある地点に向かって歩いて歩いている。

それから5分ほど歩いただろうか、ジェイミーは目的のものをを見つけ歩みを止めた。

同じく歩みを止めたルーガルーがそれを見る。それは大木の麓に巧妙に木の葉で隠されてはいるものの、よく観察すればそれが人工物であるのがわかる。

「通信機かい？」

「ウィッチ専用のね」

ジェイミーは猫耳を生やし、その通信機の受話器を手を取った。

そして魔力を通信機に込め魔法圧を調整する。

すると通信機からナイトウィッチが発生させるような魔導針が出現し、回り始める。

「わざわざ隠していたの力。準備が良いネ」

「こんな仕事をしているのよ。もしもの時の用意はしているわ。ちよつと話すから離れてなさい」

「ええ」

「協力する気があるならさっさと離れろ」

「しようがないア……」

ルーガルーが距離を離すのを見てからジェイミーは大木に背を預け通信に相手があ

るのを待つ。

そんな彼女の胸中は複雑であった。

彼から渡されたこの通信機。これはカールスラントが作り出した、魔導針を生み出すシステムを搭載したユニット『J-U-88C-6』を元に作られた物。魔力と魔力圧の細かい調整が可能なら長距離通信と時間制限はあるが高い隠密性を持つ優れものである。

だが、一度魔力を通してしまえば魔力を通すのやめた瞬間に中の回路がお釈迦になるという致命的な欠点を持つ。

これ一台作るだけでも莫大な資金が必要なのに、使い捨てにしななければならないという欠陥品。渡された時は無用の長物だと思っていたがまさか使うような状況になるとは……

この通信機を使う状況。

それはたつた一つ、直接上司に話を聞きたい時のみである。

ガチャリという音が受話器越しから聞こえた。

しかし受話器越しに聞こえる音はない。本当につながっているのか怪しくなるような無言。

だがそれでもジェイミーは受話器に向かつて喋った。

「フ  
Oxford, not brogue」

事前に決めていた暗号。彼女がもつと幼い時に遊びの一環で彼が教えてくれた言葉。彼が言うには彼の持つ英国紳士としてのこだわりの一つ。

そんなこだわりへの返答はすぐに答えられた。

「そうだ。英国紳士にはシンプルなオックスフォードの方が似合う」

聞き慣れた上司の声。自らのボスが出てくれたことにジェイミーは安堵の吐息を吐いた。

「昔からそのこだわりは変わっていないわねボス」

「君が生まれる前から私はこのこだわりを貫いているよ。001」

受話器越しに両者の軽口が交わる。

数時間ぶりの安堵する会話にジェイミーは微笑み、一息ついた後、本題に入った。

「さて、ボス。現在の状況は把握している?」

「ある程度は、だが君の口から聞かせてくれ」

「わかったわ。さて始まりは今日のカジノのだけけれど…」

ジェイミーはこのモノコで体感した騒乱を語って行く。

ルーガルーはその様子を視界に入れながら、ジェイミーから少し離れたところで暇そうにあくびをした。

## 3.

彼女が目覚めると、そこには戦友の顔があった。

いつもの飄々とした表情とは違う心から心配している表情。

『そんな表情、久しぶりに見たわね』

エディータ・ロスマンはそう独白しながら戦友に声をかけた。

「あら、クルピンスキー。やっと起きたのね」

心配していた当人から逆に心配されてしまったクルピンスキーは、表情をいつもの笑顔に戻す。

「それはこっちのセリフだよロスマン先生。とりあえず、看護婦さんと呼んでくるよ。すぐに戻るから待っていて」

クルピンスキーはそう言うと、足早に病室から出て行く。

ロスマンはその姿を見ながらあたりを見渡す。

白を基調とした病室。どうも自分は病院に運ばれて来たらしいということを選れながら彼女はやっと気がついた。

思い出すのはあの地下でのネウロイとの戦い。

ネウロイを倒した後ホッと一息ついた時に突然首に巻きついてきた腕。

土煙の中消えて行く視界。

後ろから忍び寄って来た下手人。恐らくはKein Gessich顧 女 しに絞め落とされたのだろう。

ロスマンは敵を倒した後に意識を緩めた自らの失態に齒噛みする。

あの後共に戦った二人がどうなったのかは彼女にはわからない。

もしかしたら殺されているかもしれない。

だが、彼女にはあの二人が今も生きているという確信があつた。本当に短い共闘だったが、その共闘でロスマンはあの二人がそう易々と殺されるウイッチではない事を知っている。

そんな願いとも言ふべき確信を胸にしたロスマンは病室の窓から夜空を見る。

夜空には月が輝き、モナコを照らしている。

エディータ・ロスマン曹長は、二人の戦友の無事をそんな綺麗な月に祈つた。

#### 4.

「君の話を全部聞いた結論を言おう。そもそも私は君に、何も指令も命令も下していない。」



街の喧騒から離れたモナコの森。

そんな暗闇の中で受話器を持ったジェイミーの目は見開かれた。

唐突に自らの上官から語られた短い短文をジェイミーは理解できなかった。

彼女は今回の『アーカーディー・ジョン』の監視というMI6長官からの任務を、いつもと同じように勤めていたはずなのだ。

だがそんな指令はなかったとMI6の長官自身から語られている。

もしジェイミーが受けた指令が全て嘘であるということは、最初から自分は策略に貶められていたことになる。呆然とするのも無理はない。

しかし、この機密回線を使える時間は長くなく、それも一度つきりのもの。

彼女は突然のことにフラつきながらも、喉から声を絞り出した。

「ボス、ふざけているわけじゃ……ないのね？」

「ああ、ふざけてはいない。そもそも『アーカーディー・ジョン』と言う名の富豪は存在していない」

「あの指令は『連絡課』の『双子』が渡して来たものよ？それが本当なら『双子』が裏切り者ってことになるのよ？」

ジェイミーは手のひらで目元を覆い、暗い表情で問う。

MI6には様々な課があり、その中に『連絡課』というものがある。

『連絡課』はエージェントたちと『M I 6 本部』との連絡の橋渡し役となる重要な役職であり、基本的にエージェントたちは『連絡課』から『本部』から送られて来た指令を受けることになる。

今回、『本部』でありM I 6 長官であるボスは指令を送っていないと言っている。だがジェイミーには『本部』からとされた情報が届いた。

つまり『連絡課』が嘘の情報をジェイミーに渡して来たことになる。

『双子』はその能力や経歴から最も信用ができる『連絡課』である。

ジェイミーも彼女たちと多くの任務をこなして来た。

これが本当ならば、そんな信用ができる『連絡課』が自分を騙して謀った事になる。

信用していた仲間による裏切りの可能性が上がっていき、ジェイミーは心に重い淀みが溢れてくるのを感じる。

しかしその可能性はあっさりと覆された。

「いや、裏切り者ではない」

はつきりと断言をするボスの答え。

そんなボスの答えにジェイミーの心が少し軽くなる。だが、それでも胸中から『双子』への疑念が晴れない。

彼女が握りしめる受話器がミシリと音を立てた。

「だったら、私が受けた指令は？『双子』が私に語った情報は？今の現状だって、私の手配書が出回るのが早すぎるし、そもそも敵に私の情報が漏れすぎている。それでも『双子』が裏切り者ではないという理由は？」

ジェイミーの口から矢継ぎ早に追求が漏れていく。

本当は『双子』が裏切り者ではないと信じたい、だが現状信じる事が出来ない。そんな複雑な彼女の心境が、『双子』への疑念を拭い去る事が出来なかつた。

そんな焦るように動揺しているジェイミーに、ボスは冷静に語る。

「落ちて着けボンド。確かに彼女たちは君に嘘の指令を渡したことは事実だが、彼女たちが裏切り者ではない」

「それが裏切り者じゃないとしたらなんなのよ！」

「ボンド……私たちMI6にとつての裏切り者とはなんだ……」

逆に問いかけてくるボスの声。

その声は諭すような冷静な声を聞いたジェイミーは、頭に血が上って感情に支配されていた頭が冷えていく。

「裏切り者……そんなの身内でありながら、ブリタニアの国益を故意に損害させる者で

……あつ」

冷静になった彼女の頭に一つの回答が導き出された。

確かにこれならば、確かに彼女は裏切り者ではないだろう。

だが、それは同時に『双子』が裏切り者であったことよりもはるかに最悪な自体に巻き込まれていることになる。

新たに信じたくない答えを得てしまったジェイミーはその答え合せをボスに問う。

「ねえボス……『双子』は今、誰の命令にしたがつているの？」

「双子はある合同情報委員会J I Cのメンバーの一人『アーサー・フェルプス』首相首席補佐官から個人的に連絡を受けているという報告がある。その事から今回の双子の行動はそのメンバーからの命令だと思われる」

「……ボスにはその命令についてのJ I Cから連絡がないのね？」

「そうだ。ちなみに今言った情報は、私が他のJ I Cメンバーからもらった特ダネだ。合同情報委員会

そのメンバーから『アーサー・フェルプス』の不審点なども教えてもらったぞ」

「とても再いりベリアンスラング  
\*\*\*\*\*」

ジェイミーの口から淑女らしからぬ言葉が吐き捨てられる。

ボスからもたらされた答えは最悪の中でもトップを争うほど最悪な答えであった。

M I 6は外務・英連邦省の管轄だが、それだけでなく首相や合同情報委員会、通称『J I C』からの指揮も受ける関係にある。

J I Cは1936年の発足された、情報機関の活動を『指示』『監督』『立案』し、集め

られた情報を情報評価報告書として政治家に提供する機関である。メンバーはブリタニアの高官によって構成され、日々ブリタニアの国益のために動いている。

そして、MI6はここで立案された作戦をMI6長官が受託し、長官がエージェントたちを指揮して達成するのが仕事である。

だがボスがジェイミーに語ったのは、合同情報委員会JICを構築するメンバーの一人であるアーサー首席補佐官が、頭であるMI6長官ボスを飛ばしてエージェントに直接命令して動かし、合同情報委員会という事。

正式な作戦ならばそんなことをしなくても合同情報委員会JICからMI6に正式に言い渡せばいいだけの話。それがJICの一人が個人的にエージェントを動かしているというのは、これが正式な作戦ではなく、アーサー首席補佐官が勝手に行なっていることとなる。

それに加えてその情報を同じ合同情報委員会JICのメンバーがボスに情報を漏らしたという事は、『双子』に命令しているアーサー首席補佐官とボスに情報を渡した合同情報委員会JICはお互い良い関係ではない事がわかり…

つまり簡単にいうと

「なんで合同情報委員会JICがガリアみたいの内ゲバしてるのよ!？」

「ガリアほどは酷くないだろう…?」

「巻き込まれる人間にしたらどっちも変わらないほど酷いわよ!!」

「ちなみにアーサー首席補佐官の味方をしているJICCのメンバーも敵対しているメンバーもそこそこの数が出て、現在JICCは二つに別れてしまっているな。まあ、皆ブリタニアの国益を目的に動いているのが救いだが」

「救われないわよー」

ジェイミーは頭をかかえしやがみこむ。

予想もしない状況について立っている気力も無くなってしまったのだ。

ジェイミーは、仮にも今は戦争中であるのにもかかわらず政府の中核の一部である機関が内部で割れている可能性があるなんて信じたくもなかった。

しかもジェイミーはそんなJICC内部のいざこざに巻き込まれた被害者である。あ

まりの事に足の力が抜けしやがみこむのも当然のことであった。

そんな彼女の心境を無視したボスの声が受話器越しに彼女の耳に淡々と入ってくる。

「おそらくJICCが割れている原因は二つある」

「一つ？」

ジェイミーは受話器越しに首をかしげる

「一つは506JFWの件だな」

ボスが語った一つ目の要因

第506統合戦闘航空団。通称『ノーブルウィッチーズ』

ガリア解放後にガリア方面防衛のために新設された部隊であり、主任務はガリア防衛と西方からのカールスラント奪還拠点の構築。

だがその部隊編成に当っては、各国の政治的意図や国内事情が絡み、それに加えてガリア内部の政治的対立が深く関わっているという国際色豊かな策謀が駆け巡る舞台となっている。

そのせいで第506統合戦闘航空団なのに、部隊が二つ存在する。

二つの部隊は互いに別の航空団のように動いている。

すでに部隊として動いているはずなのに結成が宣言されていない。

などの酷い有様なのである。

もちろん三枚舌で有名なジェイミーの母国も506がこうなった原因の1つだ。

つまり我が母国は、自らが発生させたイザコザで自らの政治内部でもイザコザを引き起こしてしまった事になる。

あんな陰謀の世界万博部隊が政府内でのイザコザの原因になるのはジェイミーにもたやすく理解できる。

だがそれがなぜJICが割れるほどになったのかは理解できない。

ジェイミーは受話器のコードを指で弄りながらボスに質問する。

「それが、なんで今回の件に関係あるのよボス。506に対してのイザコザなんていつ

ものことでしょ、2つに割れるほどの問題になりはしないわ」

「そうだな、だがそれが些細な亀裂を生んでいる。それに。割れた原因の一つと先に言っただろう？ 今回の件に深く関わるのは、亀裂を分裂に変えたのはもう一つの理由だ」

「それが？」

「『ウオーロック計画』に伴う責任と技術についてだな」

そんなボスの言葉を聞いたジェイミーはコードを弄る指を止めた。

『やっぱり関係あるのね…… ウオーロック』

アレンと同じ顔をした女。オナトツプが語っていた内容にも出て来た『ウオーロック』の存在にジェイミーの眉間にシワがよる。

ボスは説明を続けた。

「ウオーロックが暴走して扶桑の空母赤城がウオーロックに撃沈された『ウオーロック事件』ことは知っているな」

「501が後始末をした事を言っているのなら知っているわよ」

「それだな。そのあとの話になるのだが、ブリタニア政府はその代償として扶桑に『魔導ダイナモ』を譲与する事になった」

「『魔導ダイナモ』？」



聞き慣れない単語にジエイミーは頭をかしげる。

『ウォーロック計画』の資料をもとに開発された、コアコントロールシステムをベースにした新たな技術だ」

新たな人類の力の開発がボスから語られる。だがそれを聞くジエイミーは疑わしい目をその技術に向けていた。

「元の計画が人類の新たな敵を生み出す一歩手前まで行つたというのによく作る気になつたわね…」

「どうも暴走原因の大きな要因だつた『周りのネウロイのコアを操る機能』はオミットして、『搭載されたコアのみ制御』し稼働時間も制限をつけている事で暴走を防いでいるらしい」

「へえ…」

説明を受けてもなおジエイミーの視線の質は変わらない。

一度失敗したことを再挑戦することは良いことだ。だがその失敗が大きすぎたために疑わしき目を止めることがジエイミーにはできないのだ。

だが今はそんなことは関係ない。確かに『魔導ダイナモ』とやらが成功したら良いものになるだろう。そしてその技術と現物が赤城の代償として渡されるのも仕方ないことだ。だがそれが理由でJICが割れるなどジエイミーには想像がつかなかった。

もしやその『魔導ダイナモ』に関して新たな政治的戦略が繰り広げられたのではないのか？

そんなことをジェイミーは想像してボスの説明の続きを待つ。

彼女の予測は正しかった。だがその原因の原点は予想外であった。

「基準排水量65, 000 t、満載排水量72, 809 t、全長263. 0 mにおよぶ戦艦。主兵装は45口径46 cm三連装砲3基、他に60口径15. 5 cm三連装砲を後に1基ずつ2基、46口径12. 7 cm連装高角砲12基、25 mm三連装機銃35基、同単装25基、13 mm連装機銃2基を装備」

「……」

唐突にボスから語られる船のスペック。聞くだけでも凄まじく巨大で世界で一番と行っているほどの火力を持った戦艦である。

だが、なぜボスがそんなことを語るのか？ジェイミーにはわからず、その疑問を口にする。だがそれよりも早く、その疑問の答えが受話器から聞こえてきた。

「こんな超弩級戦艦が『魔導ダイナモ』を取り付ければ飛行機能と再生機能を獲得することができるとらしい」

「……………は、はあ!？」

思わずジエイミーは驚愕し声を上げる。

まるで酔っ払いのホラ話のような情報。だがそれを語るのはMI6長官であり、その声の質からして冗談でも嘘でもないことがわかる。

ボスの声が続く。

「正確にはそんな超弩級戦艦ぐらいにしか『魔導ダイナモ』を搭載できないのだが。とりあえず、そんな夢物語に出て来るような存在が扶桑で開発されている」

「それは、扶桑の嘘や欺瞞情報ではなくて…?」

「報告は扶桑国から出された正式な文章であり、報告書を見る限り理論上可能どころか試験起動も成功させ実用段階に入るのも今年中とのことだ。」

「……………扶桑は狂っている」

何をトチ狂ったら戦艦を空に飛ばそうとするのかがわからない。まさに狂っている。としか言いようのないことを実現させてしまう扶桑人にジエイミーは今年一番の頭痛を抱え天を仰ぐ。

おそらくそんなジエイミーを察したのだろうボスがかすかに笑う。

「まあ私も最初聞いたときは同じ反応だったよ……。だがこれが合同情報委員会JICが割れた大きな

原因だ」

「…？」

「大きなリターンを望むものと、大きなデメリットを恐れるものがあるということさ」  
「ああ、なるほど…ね」

そこまで言われたら、ジェイミーにも想像がつく。

『魔導ダイナモ』

それはボスの言った通り、戦艦が空を飛び、傷ついても再生するという夢物語を現実  
に引き起こすことができる夢の技術。この技術が量産され実用化されたのならネウロ  
イとの戦争も終わらせることができるのかもしれない。

しかしこの技術は機密とされている『ウォーロック計画』の遺産である。

現にその計画により人類の敵を作り出してしまい、その時に501JFWがいなければ、  
今頃人類は『ウォーロック』によって大きく損害を被ったことは容易に想像がつく。  
もしもう一度失敗したときに同じように暴走した『ウォーロック』を止めてくれる存在  
が近くにいるとは限らない。

だがそれでも、大きなリターンがあるのならそこにどんなリスクがあろうとも手を  
伸ばす性をもった人間は多く存在する。そんな人間が存在することは、このモナコの  
ジノがすでに証明している。

さて、話を最初に戻すが、『ウォーロック計画』はそんな大きなリスクを見据えながら

も大きなリターンを求めた末の事件だ。

だがその結果はリスクを踏み、史上最悪は逃れたものの最悪の結果となった。最悪、そう最悪だ。

この計画の主人はブリタニアの高官が計画していた。

しかもその高官は501JFWの邪魔を行なっていて、最終的にその恥を他国にさらしてしまい、誉あるJFWの上官を降ろされる羽目になるという、ブリタニアにとつて恥の上塗りどころか恥のミルフィーユと形容すべき失態を起こしているのだ。

そして、そんな『ウォーロック計画』はブリタニアの手を離れ、扶桑が引き継ぎ、『魔導ダイナモ』という大きなリターンを生み出した。

この大きなリターンは人類の未来を担う希望になり得るものだ。

だが、それはブリタニアだけが、大損したという結果と同義であると考えられることも可能である。

『魔導ダイナモ』の基礎である技術は『ウォーロック計画』のもの。

だが『ウォーロック計画』は人類の敵を生み出す一手手前まで行ったブリタニアの恥であるのに、かたや『魔導ダイナモ』は扶桑が生み出した人類の希望。

ブリタニアが作った基礎が使われたものであるのに、ブリタニアのみが得をしていな

い。

基礎が我が国にはあるはずなのに、その基礎を使って他国が得をし、我が国はそれ  
有効活用できていない。

もしそんな考えをするものがいたとしたら、もしそれが高官であるのならば……

ジェイミーは妄想に近い思考の末、恐る恐る結論を口にした

「つまり『ウオーロック計画』の再始動を望んでいる人間がJ I C合同情報委員会にいるの？」

まさかと思いつながら口からこぼれ落ちた答え

だが、もしそうならば理解が可能である。

『ウオーロック計画』の基礎、いや遺産を使い『ウオーロック計画』を復活させようとするのならば、それが原因でJ I C合同情報委員会が割れるのも理解ができてしまう。

それはリターンを求める人間と、リスクを恐れる人間の思想の違いであることだと  
ジェイミーには容易に想像できる。

そんな、妄想であつてほしい答えが正解かはすぐに受話器の先から回答された。  
「その通Exa c t l y .」

ああ、無常

ここまでジェイミーには当たって欲しくなかったクイズは存在しない。

彼女の眉間にシワがより、表情が険しくなる。

そんな彼女の耳にボスからの情報が次々に入る

「その『計画』の再始動を目的に行動している一派の筆頭が『アーサー・フェルプス』首相首席補佐官だ。」

「上も上の高官じゃない」

「数日前に彼らがどこかでなんらかの取引を進めていると真偽不明のガセネタに近い情報が私のところに来たことがある。今思えば、今回のモナコで君がさつき語った『オナトッフ』の所属する『ヤヌス』と呼ばれる組織と合流し情報や資料を交換するのが目的だったのだろう。』

「しつかり真偽の情報か精査していたらこんなことには…。」

「それはしようがないことなのは君もわかっているだろう？ 重要度の低すぎる情報に労力を避けるほど人員は多くないんだわね。組織はね。」

まああ、まさかその取引が盗んだ『浮遊脚』と『ネウロイコア』という特級の厄ネタだったとは想像もつかなかったわけだがね」

「最悪ね…で、ボス。そんな真つ二つに割れて変な取引をしている派閥がある組織の命令に常に従っている我らがMI6の今の立ち位置は？」

合同情報委員会

「今の立ち位置を比喻するならJICという名の父と母が親権を巡って争っている中の子供だな。身動きが取れず、そろそろ何らかの動きを見せないと近いうちに、こつちも

二つに分かれてしまっただろう物理的にね」

「死んじやうじやない」

「そういうことだよ」

「……………」

「……………」

「…ボス直下のエージェントとしての私の立ち位置は？」

「片方からは罪を被せるには丁度いいトカゲの尻尾、もう片方からは厄介な濡れ衣を着せられた面倒な替えのきく駒と見られている」

「……………つまり？」

「全員が敵ではないが、味方は私しかないな」。

「淑女が使っべきでないスラング」  
「\* \* \* \* \*」

ジェイミーは苦虫を嘔み潰した表情をして頭を抑える。

いくら大きなリターンがあろうが『ウォーロック計画』はネウロイに次ぐ敵を作り出してしまった経歴がある計画だ。

そんな計画を再始動させようとするのなら、それは合同情報委員会J I Cも割れる。

合同情報委員会J I Cが割れたらその下にあるM I 6もこうなってしまうのも自明の理だ。

そして、そんな被害をジェイミー・ポンドが一身に受けることになってしまったとい



うわけである。

……だが一つだけジェイミーに疑問が残る。

「じゃあ、なぜ私を地下駐車場に誘導したの？」

ジェイミーが思い出すのはホテルの地下駐車場に行くことになった経緯。

『双子』に誘導され、ロビーで従業員の運ぶ『浮遊脚』を認識した為、彼女は地下駐車場に向かった。

『双子』に誘導されなければ私はホテルどころか、そもそもこのモナコにも来てはいないあのロビーで従業員であるオナトツプが自分に『浮遊脚』を見せたのも、今を思えばわざとであったと考えることも可能だ。

だがそれでもなぜわざわざ、自分を地下駐車場に誘導したのがジェイミーにはわからなかった。

「その答えはボンド。君が私に教えてくれたじゃないか」

ジェイミーが最後に残った疑問に頭を悩ませていると、その回答が受話器から答えられる。

その声を聞きジェイミーの脳裏にはオナトツプが語っていた言葉を思い出す。

『…そんな諜報員として甘い、それ以上に優秀なお前を本当なら仲間に引き入れた

かった。』

あの言葉が嘘か真かはわからない。だが真実であると仮定すると地下駐車場への誘導の理由が説明できてしまう。

「……まさか、本当に勧誘？　でも最初に私を殺そうとしたわよ？」

「それは本当に殺そうとしたのか？　お前は急所に一撃でも攻撃を受けたか？　銃弾で撃たれたか？」

ジェイミーが口にした疑問にボスは矢継ぎ早に答える。

あの地下駐車場の戦闘。確かにジェイミーが受けた攻撃は全て脇腹。しかも二度も手痛い打撃を受けているが致命傷になっていない。そしてオナトツプが拳銃を手にした時、一度もジェイミーに対して発砲していない。

考えれば考えるほど真実味を増して行く『勧誘』。

だが自分をこんな手間のかかる手段を使ってまで勧誘する理由は1つ思いつくがそれはありえない為、それ以外となるとジェイミーにはさっぱり思いつかなかった。

ジェイミーは受話器に向かって聞いた

「ねえボス、母さんが実はすごい人物だったってことはあるのかしら」

「それはない。ただの一般家庭の街娘だったよ」

最初からわかっていた答えにジェイミーは大した落胆もせずにロダンの考える人の

様な体勢で沈思する。

その時、ドンという何かを叩く音が聞こえた。

ジェイミーは辺りを見渡すが、そこにいるのは暇そうにククリナイフでお手玉をするルーガルーがいるのみ。

何か音が聞こえたらルーガルーも反応するはずだが反応していないということは、叩く様な音はこちらではなく受話器の先になる。

「すまないボンド。誰か来たらしい」

ボスから謝罪の言葉にジェイミーは下唇を噛む。

この通信装置は一度使つて通信を着れば二度と使えないもの。ならば通話したままにすればいいと思うかもしれないが、通話時間が長引けば長引くほどこの通信電波を傍受されやすくなるという欠点を持つ。

それはボスもわかつていたのだろう。矢継ぎ早に彼は喋り始める。

「なあボンド。君をオナトツプと名乗った女が何故勧誘しようとしたのか本当の理由は私にもわからない。だがそこには何らかの個人的理由が含まれているのは確かだ。その感情がオナトツプの物なのかその上司の物なのかはわからないが」

「オナトツプが所属する『ヤヌス』と呼ばれる組織の実態もわからない。なぜ『浮遊脚』

を狙ったのかも、『ウォーロック計画』を何に使うかもわからない。だがJ I Cの『ウォーロック計画』再始動派と関係があるのは確かだ」

「そして君は今、手配書が出され追われている身だ。このまま悠長にしていともいつかは捕まる。私も君を助けたいがM I 6の長官としてJ I Cが割れている現状では動くこともままならない。だが一つこの状況を打開する方法がある」

早口で紡がれるボスの言葉の数々。

ジェイミーはその言葉を一つも取り零さないようにと受話器を握りしめ聞くことに集中する。

「ボンド、君に指令を下す」

受話器から任務拜命時の前置きが語られた。

M I 6長官からM I 6の諜報員へ直接の任務が下される。

ジェイミーは目をつぶり指令内容待つ

受話器越しから声が聞こえる。

「君がこの事件を解決しろ。『ヤヌス』の正体と『ヤヌス』に手を貸すJ I Cメンバーを見つけてその証拠を手に入れるのだ。たとえJ I Cと言っても『ヤヌス』と呼ばれる不透明な組織と暗躍することは許されない。」

「それに、その証拠さえ掴めれば今回のモノコでのネウロイ発生事件を盾に奴らを追い

結めることができる。なおこの任務でMI6からのバックアップは一切ない」

ついにジェイミーに任務が下された。

今度は嘘ではない。MI6長官から言い渡された本当の任務。

自らの指名手配が行われ、母国内部には自身の破滅を望む者がおり、MI6は身動きが取れない。それだけではなく敵である『ヤヌス』の正体は不明であり、その手がかりは敵が語った情報のみ。それに加えて仲間は信用できない1匹の嘘つき狼である。

そんな状態で、『ヤヌス』の正体とそれに手を貸すJICのメンバーを見つけて証拠を掴めという指令。

不可能ともいうべきミツシヨン。

だがしかし

「その任務拜命しました。」

ジェイミーは目を開けしつかりとした声でその任務を受ける。

その声に不可能なミツシヨンを言い渡されたことに動揺の色も迷いの色もない。

彼女は今日1日でいったい何度感情を乱されたのだろうか。

いったい何度死の淵を渡るようになったのか

いったい何度6年前に亡くしたはずの相棒のことを思い出したのだろうか。

こんなに振り回されたのは彼女が生きてきた人生の中で一度もない。

なのに、何もわからずに終わるなんて帳尻の合わない事はジエイミーには納得できなかった。

そして何より『ヤヌス』にアレンが何らかの形で関わっている事は明白である。ゆえに彼女は今回の事件の謎を謎のままに放置することなどできない。

『やれと言われた仕事は必ずやる』。

それがM I 6の諜報員になるために必要な第一条件だ。

ジエイミーの迷わない答えにボスは満足そうに頷き、最後の言葉を送る。

「最後に、私が君を裏切る時はちゃんと事前に連絡するから安心するように。では幸運を祈るよ001」

そんな捻くれた心配の言葉にジエイミーは苦笑する。

彼が一番用する少女

そんな事を言いながら彼が自分を裏切るわけがないと、001は理解していた。

M I 6長官であるがために、001などと言う遠回しな呼び方をする羽目になったいる男に対してジエイミーは精一杯の親愛の言葉を送る

「I am proud to be your . . .」

だがその言葉は最後まで紡がれる前にブツリという音を立てて途切れた。

ジエイミーは何も音がしなくなった受話器を少し見つめた後、かすかに微笑み受話器を直す。

「準備はできたみたいだね。さて今後はどう動くかい？」

そんな彼女に対してルーガルーが声をかけた。

ジエイミーは通信機の『後始末』を行いながら行き先を答える。

「目的地はガリアよ」

「ガリア？ あそこは506 JFW関係でこのモナコ以上の諜報員の博覧会になっているけど何でわざわざ？」

モナコから逃げるのは当然として、なぜロマーニヤやヴェネチアではなく各国の政治的策謀が渦巻くガリアに行くのか解らないルーガルーが目を瞬かせる。

そんなルーガルーに対して、なぜガリアに行くのかをジエイミーは語った。

「オナトツプが言ったのよ。アルス博士は鉄の貴婦人と共にあるってね」

「ああ、あれか……だけれどそれが何故ガリア？」

「鉄の貴婦人……エツフェル塔の別称よ」

『後始末』を終えたジエイミーがパチンと指を鳴らした。その瞬間軽い爆発音とともに通信機の内部が爆発しその機能を完全に停止させる。

ガリアの首都パリの象徴とも言うべき名所『エツフェル塔』

その存在はガリア人たちから時折『鉄の貴婦人』という愛称で呼ばれている。

現在のガリアは、復興が進んだおかげでやつと昔のような人々の賑わいが取り戻されてきているが復興に紛れて多くの難民や諜報員がパリに紛れ込んでいると聞く。その際に、『ウォーロック事件』で追われることになったアルス博士も紛れ込んだ可能性は高い。

「敵の言うことを信じるんだネ」

ルーガルがジェイミーの方に抱きつきながら問いかけてくる。

その表情は今日の間は何度も見た人をあざ笑うかのような笑み。

だが、そんな笑みを今日一日で見飽きたジェイミーは面倒臭そうに表情を歪ながら彼女を振り払う。

「『ヤヌス』の手がかりはそこにしかないのよ。ダメだったらその時考えるわ」

「へえ…随分と適当なんだネエ。でも面白そうダ」

嘘つき狼は納得がいった答えを得たのか、さらに笑みを深め猫に再度抱きつき戯れた  
「ああもう面倒臭い!! 別についてこなくてもいいのよ!!」

「いいや着いて行くネ。追われる人間同士一蓮托生だ口?」

「あんたは自業自得じゃない!!」



夜の帳が落ちきった森の中。二匹の諜報員はモナコからガリアに足を進めて行く。そんな姿を見るのは森に潜む虫と空に輝く月のみであった。

5.

彼女の幸運を祈り、MI6長官は紅茶を飲み込む。

ちようどポッドの中に入っていたゴールドエンドロップだ。その香りも味も彼にとつてとても満足の行くものであった。

まるで優雅な英国の昼下がりのようなひと時。

だがそれも蹴破られたドアの騒音によつて崩れ去る。

鍵がかかっていたドアを破壊して侵入した武装した幾人もの人物たち。

その中に見知った顔もいれば部下もいた。

そんな彼らの後ろから一人の人物が歩いてくる。

MI6長官にとつて長年の戦友でありスーツや紅茶の趣味は合うが致命的に靴の趣味の合わない男がブローグシューズの音を立てながら手に令状を持って目の前に歩いてくる。

「イアン：お前に国家機密情報漏洩の罪状が上がっている。おとなしく来てもらいたい」

「ギャレス、こっちは優雅なアフタヌーンティーの時間なんだ。もう少しゆっくり入れないかね？」

「私たちは散々ノックしたし、それに今の時間帯はすでに0時を回った深夜、  
Afternoon<sup>後</sup>ではなく、Morning<sup>前</sup>だ。諦めろ」

ギャレスと呼ばれた男は武装した者たちに命令してM I 6長官に手錠をかけ連れて行かせる。

イアンと呼ばれたM I 6長官は抵抗一つせず、まるで散歩のように軽やかに歩きついでに行く。

その姿に彼を連れていたM I 6のエージェントたちは申し訳なさそうに顔を俯かせた。

ギャレスは肅々と部下に命令しながらも、逮捕され連れて行かれる男に背中にも声をかける。

「……貴様の子飼いのコマであるあの子ももうすぐ捕まる。2人揃って今は大人しく捕まっついていろ」

そんな声に抵抗一つせず歩いてきたイアンが立ち止まった。おとなしくついて来た彼の突然の抵抗に連行していた者たちは困惑する。

立ち止まったM I 6長官は振り返る。

その姿は手錠をかけられているのにもかかわらず、まるで舞台俳優かのような絵になるような動きであった。

そんな彼は自らの戦友の予測に笑う。

どうやら靴以外に閉しても彼の目は節穴らしい。

そんな皮肉を思いながらMI6長官は語った。

「ギャレス…私が作った『ジェイミー・ボンド』を舐めないでもらいたい。」

「あの子の存在は私が今まで行って来た全ての行動の中で唯一『私は正しかった』と思っている事なのだから」

「その意味が…君にはわかるだろうか？」

イアンはそう言うかと最後にウインクをしてMI6長官室を後にする。

その後ろ姿は連行されているように全く見え、まるで凱旋のようであった。

長官室に残されたギャレスは誰にも聞こえぬ一言をつぶやく。

「わかつているさ。あの子は貴様の若い頃にそっくりだ。」

そう語るギャレス・コービットJIC委員長は友の背中を見送った。

## 『承』 ガリア策謀

### 第1章までのあらすじとキャラクター紹介

『第1章までのあらすじ』

MI6所属のジェイミー・ボンドは『連絡課』の双子から指令を受けモナコにやって来た。指令の内容は『アーカーデー・ジョン』という富豪を調査することであった。

モナコでは新型ストライカーユニットである『浮遊脚』のお披露目も兼ねた式典が行われる予定であり、大きく賑わっている。

式典の前日、『アーカーデー・ジョン』が昔よく訪れていたカジノに給仕として潜入していたジェイミーは、502JFWの英雄であるヴァルトルート・クルピンスキーとエディータ・ロスマンと出会う。

その後『アーカーデー・ジョン』のホテルに潜入することになったジェイミーはクルピンスキーが同じホテルに宿泊していることに気がつき、彼女がホテルのバーに誘って来たことに乗じてホテルに侵入する。

ホテルに侵入したとき、ジェイミーは明日お披露目となるはずであり嚴重に保管されているはずの『浮遊脚』をホテルの従業員が運んでいることに気がつく。

クルピンスキーを葉で眠らせたジェイミーは従業員が向かった地下駐車場を訪れるが、そこでジェイミーとまったく同じ顔のウィッチが従業員を銃撃した後に襲いかかって来た。

そのウィッチをなんとか倒すものの、ジェイミーは死んだふりをしていた従業員に襲われ絶対絶命の危機に陥ってしまう。

しかし、そこでロスマンが乱入し従業員に銃を向ける。ロスマンはジェイミーに「後で、詳しく事情を聞かせてもらおうわ」といい、先に従業員を確保しようとするものの、従業員が手に持っていたアタッシュケースからネウロイのコアが入ったシリンドーを落として割ったため地下駐車場にネウロイが出現してしまう。

危うくジェイミーは殺されそうになるが、先程倒した同じ顔をしていたウィッチが助けしてくれる。

身体的特徴を変えることのできる固有魔法を持っているそのウィッチは自らを『ルーガルー』と名乗り、あのネウロイが『遺児』と呼ばれている存在だと話した。

そしてそのネウロイを『ジェイミー』と『ロスマン』、『ルーガルー』の三人のウィッチは協力し撃退する。

撃退後、従業員は表情をジェイミーに見せるとその顔はジェイミーの死んだはずの相棒『アレン』と同じ顔であった。

従業員は自らを謎の組織『ヤヌス』の所属ウィッチである『オナトツプ』と名乗り、今回の騒動は本来ならジェイミーを仲間に引き入れる目的であったが、ルーガルが計画をぐちゃぐちゃにしたため、ご破算となったという。

そして、この騒動の濡れ衣はジェイミーに被せられることになる<sup>と宣言し</sup>、「生き残りたいのならアルス博士を探せ。彼女は鉄の貴婦人と共にある」という言葉を送り、地下駐車場から逃げるジェイミーとルーガルを見送る。

その後、警官たちから今回の騒動の犯人として追われることになったジェイミーとルーガルは森に逃げ込み、ジェイミーはそこでM I 6長官と連絡をとった。

すると、「アーカーディ・ジョン」の調査の指令は嘘の指令であり、長官はそんな指令は知らないという。

そしてジェイミーにその嘘の指令を伝えた『双子』は合同情報委員会J I Cのメンバーの一人『アーサー・フェルプス』首相首席補佐官から命令を受けて行動していると長官は語った。

また、今回の騒動は『ウォーロック技術』を巡り上層部が二つに意見が別れてしまった事が原因であると話し、ジェイミーは自身がその騒動に巻き込まれてしまったことを知る。

長官はネウロイのコアを保管するというウォーロックの技術を有していた『ヤヌス』の正体とそれに手を貸す合同情報委員会J I Cのメンバーを見つけてその証拠を手に入れるとジェイ

ミーに指令を出し、ジエイミーはその指令に合意した。

時間の濡れ衣を着せられたジエイミーと裏切ったため追われることになったルーガルーは、『鉄の貴婦人』つまりは『エツフェル塔』があるガリアの首都パリに向けて歩みを進めた

通信機が切れた後、M I 6長官はJ I C合同情報委員会委員長が率いるM I 6のエージェントたちによつて拘束されていた。

### 『人物紹介』

#### ①・ジエイミー・ボンド（偽名）

身長：148cm

年齢：18歳

所属：ブリタニア秘密情報部（M I 6） 諜報部員

階級：中佐

使い魔：メイנקイーン

固有魔法：『起爆』

自身の魔力を付与した物体を爆破することができる魔法。その爆発力は付与した魔

力に比例する。ただし、その物体が球体に近くないほどその爆発力は急激に減少する。  
『概要』

金髪の髪をオールバックに固めた小柄な女性。

幼い頃からエージェントとして育てられており、M I 6長官からは001という呼び名で呼ばれている少女。001が何を意味するのかは長官と彼女しか知らない。

現在名乗っている『ジェイミー・ボンド』は偽名であり、作戦ごとに彼女の名は変わる。これら偽名は全て長官が決めているらしい。

情を持ちやすく熱くなりやすいという諜報員らしからぬ性格をしており、そのせいで作戦に余計な手間を費やすことが多く、能力的にエージェントとして優秀ではあるものの『最優』にはなりえないと上層部に判断されている。

また、生き残ることにかかなりの執着を持ち、いかなる絶望的な状況下においても諦めることはしない。これは昔、死に別れたとされている相棒『アレン』の受け売りらしく、今でのその信念をジェイミーは持ち続けている。

趣味はトレンチガン（散弾銃）収集と映画鑑賞と喫煙。

トレンチガンは固有魔法との兼ね合いで好んで使っており、手に入れた給料で各国のトレンチガンを買い集めている。

映画に関してはリベリオンの映画を好んでおり、よく影響を受けている。



喫煙に関しては、かなりのヘビースモーカーであり通常よりもニコチン含有量の高いカスタムメイドのタバコを好んで吸い続けている。元々喫煙する趣味はなかったが度重なる仕事のストレスと『アレン』が吸っていた影響でジェイミーも喫煙する様になっていた。

現在は『双子』から言い渡された偽の指令から始まった謎の組織『ヤヌス』やブリタニア本国のゴタゴタに巻き込まれてルーガルとともに逃亡しながら『ヤヌス』のことを追っている。

②・フジコ・ルーガルー・アンウィン（自称）

身長：158cm

年齢：16歳（自称）

所属：ロマーニヤ空軍（自称）

階級：中佐（自称）

使い魔：フソウオオカミ（自称）

固有魔法：『変身』（自称）

男女問わず、身体的特徴を完璧に模倣した変身を行うことができる固有魔法（自称）。他者にも変身を付与することができる。（自称）

『概要』

長い銀髪をなびかせて常にニヤついている少女。

『計画』の協力者であったが裏切り、『浮遊脚』と『遺産』を強奪しようとしたがジェイミーに妨害されてしまい、強奪できずに裏切り者としてお尋ね者になってしまった。

同じく追われる者となったジェイミーとともに行動中。

高い近接戦闘能力を持つが、同時に常に慢心しており、ジェイミーにはその隙を突かれることになった。

もちろん『フジコ・ルーガルー・アンワイン』という名は偽名であり、その固有能力も自称であるため信用できる情報ではない。

唯一わかるのは『浮遊脚』を嵌められたため、空戦ウィッチではないということ。

### ③・アレン

身長：168cm

年齢：14歳（1939年時点）

所属：ブリタニア秘密情報部（MI6）諜報部員

階級：中佐（1939年時点）

使い魔：カラス

固有魔法：なし

『概要』

6年前のオラーシャにて行われた作戦にて死亡されたとされているM I 6のエージェント。ジェイミーの相棒であり、同時に先輩でもあった。

現在、モナコにて同じ顔で同じ声の人物が現れているが彼女が何者なのかをジェイミーはまだ知らない。

④・双子

身長：150cm

年齢：14歳

所属：ブリタニア秘密情報部（M I 6）『連絡課』

階級：少尉

使い魔：キツネ

固有魔法：『隠匿』

『概要』

隠密と逃走、そして夜間飛行に適した固有魔法を持つ双子のナイトウィッチ。

M I 6『連絡課』と呼ばれる、エージェイントたちと『M I 6長官』との連絡の橋渡し役となり長官が指令した命令をエージェイントに届ける重要な役職についている。

だが、現在は長官ではなく『アーサー・フェルプス』首相首席補佐官の命令で動いており、ジェイミーに嘘の指令を言い渡した。

⑤・オナトツプ

身長：約170cm

年齢：不明

所属：『ヤヌス』

階級：不明

### 『概要』

アレンとまったく同じ顔と声を持つ謎の女性。『ヤヌス』と呼ばれる謎の組織に所属しており、ジェイミーを嵌めた一人なのだが、なぜかジェイミーに対して敵に塩を送るようなことを幾度か行っており、ジェイミーと戦闘になり彼女を痛めつけたが、殺そうとはしていないかったのではないかと話を聞いたM I 6長官は言っている。

# 1 話 徒歩と昼寝

1.

ガリア共和国

それは欧州西部に位置する歴史ある大国である。

だが1939年の第二次ネウロイ大戦が勃発し、1940年の6月にカールスラントの首都であるベルリン陥落からわずか一月で首都であるパリを守り切れずに陥落した歴史を持つている。

これはガリア軍の装備は不十分なものとブリタニア軍も主力が未着だったためカールスラントから押し寄せるネウロイたちからライン川の防衛が不可能であったのが理由とされている。

その後、ダイナモ作戦により多くの国民が国外に逃げる事ができたとはいえ、その弊害でガリア臨時政府が乱立してしまうという事態を引き起こしている。

その後1944年の9月に501JFWによってガリアの巢が破壊され、その翌月の10月にガリア全土が解放されている。

ガリアの現在の政治体制は共和制だが、帝政の名残として貴族が存在しており、その

中の君主制の復活を望む王権派と共和制派の対立と、一度ネウロイによつて国土を奪われた弊害による亡命政府の乱立などが原因で政治的混乱を抱え込んでいる。

その混乱と政治的策謀から生まれた、ガリアを守る新たな盾である506 JFWもガリア国内だけの問題だけでなく、欧州に発言権が欲しいリベリオンとそれを阻止したいブリタニアによる政治的対立も含み、様々な政治的策謀の糸に捕らわれていた。

ガリアの巢が消えてから半月経った1945年3月。

国内で不穏な空気をにじませながらもガリアは復興を進めている。

## 2.

AM 2:30 ガリア共和国セダン基地

第506統合戦闘航空団A部隊の基地であるセダン基地。

そんな深夜のセダン基地は夜にもかかわらずキャンプファイヤーのように赤々と照らされていた。

それもそのはず、数時間前に格納庫で大規模の爆破が起こり未だにその炎が燃えているのだ。

だがその日も爆発当初から考えると火の勢いは小さくなっている。

その様子をこの爆破事件の捜査指揮を取るようになったガリア諜報部、クリス・キラ少佐はじつと見つめていた。

すでに格納庫は武装した部下達によって隔離されており彼らによって現場保全が進められている。

爆発が起きたのは、このセダン基地で506JFWのA部隊とB部隊の合同模擬戦が行われた昨日の夜。

それは基地全体が震えるような大きな爆発であり基地の多くの窓ガラスが吹き飛ばすほどであった。爆発原因は不明で、出火場所は複数。それが弾薬に引火して起こったものであるとされている。

幸い死者は出なかったものの合同演習を見て来た部外者を含め負傷者多数。

数十日後には506JFWの発足式が行われるというのに、外部の人間が集まるのをまるで狙ったかのように起こった大事件。

この事件は内部の破壊工作が疑われるものの表向きには『事故』として処理され、その責任をA部隊の整備班長が取ることになっている。

内部の破壊工作の可能性が高いことを知っているのは外部の一部の者を除けばA部隊とB部隊の人間だけ。

ただでさえ仲が良くないA部隊とB部隊がこの事を知って、このまま犯人が見つからなければお互いの仲がさらに悪くなり疑心暗鬼に陥る可能性がある。

そんな筋書き通りの結末にキーラ少佐は薄く笑みを浮かべた。

一から百まで計画通り。このまま行けばガリアのため、均衡のためにうまく事が進むことになる。

そんな予定通りに計画が進む様にキーラの口角はつい上がってしまった。

だが、彼女はすぐさまその笑みを正し、次なる算段に考えを巡らせる。

このまま行けば、疑心暗鬼を育てる新たな要因として、爆破事件当日の午後に到着していた物資に時限性の可塑性爆薬ノーベル808が見つかった事が両部隊に報告される。

そしてその物資に外部の者が接触した形跡がないこと、つまりその物資に接触できた整備班員とA・B両隊のウィッチの中に犯人がいるという流れになり、それはさらに両部隊に不和をもたらすことができる。…のだがキーラには一つ気がかりな要因があった。

その要因は先日舞い込んで来た情報。

モナコで起こった、新型ストライカーユニット『浮遊脚』の盗難。



その犯人がガリアに潜入したという情報であった。

新型ストライカーユニットの盗難という大事件なのは代わりないが、それはキーラにとっては何関係のないことだった。

だが、それに連動するかのようには、ガリアの一部でおかしな動きが見られたという情報が入って来ている。

ただでさえ506 JFW関連で忙しいというのに新たな混乱のタネがガリアに撒かれてしまったことにキーラは嫌な予感を隠しきれなかった。

何か、厄介なことになるかもしれない。

キーラの脳裏にそんな直感が浮かび上がっていた。

### 3.

太陽から燦々と暖かい日差しが降り注ぐ昼間、まだ冬の寒さを微かに残した気温が暖かな日差しと合わさり、人々に微睡みを与え昼寝に誘うような天気の良い日。

そんな気持ちのいい日、長い間放置され半ば自然に帰っているぶどう畑の脇道を茶髪と赤髪の二人の少女が歩いていった。

茶髪をした少女はスキップをしながら先導して周りのぶどう畑を楽しそうに見ながら

歩いており、もう一人の赤髪の小柄な少女は口にタバコをくわえて、うつむきながら歩いている。

茶髪の少女、『フジコ・ルーガルー・アンウィン』はそんな辛気臭い雰囲気醸し出している赤髪の少女にニヤニヤと嗤いながら声をかけた。

「どうしたんだいリベリアンもどき？ずいぶん元気がなさそうだね」

そんな能天気な声に赤髪『ジェイミー・ポンド』は恨めしそうに顔を上げ茶髪を睨む。「うるさいわよ狼。今日だけで何キロ歩いていると思っているの？疲れるに決まっているじゃない」

その表情は疲れ切っており、口にくわえたタバコもその疲れを表しているかのようにへニヨリとしなびていた。

そんな様子が余計におかしかったのか狼と呼ばれた茶髪がさらに笑みを深める

「それは君がタバコを吸いながら長時間歩いているのが原因じゃないかな？」

「仮にも追われる身の私たちがこんな白昼堂々と二人で歩いているのだから。タバコ吸わないとやってられないわよ。いつ見つかるか気が気じゃないわ」

ジェイミーはそう言い、自己肯定をする。たとえルーガルーの言うことが正しかったとしても喫煙家としてその発言を認めるわけにはいかなかった。

そんな彼女の様子にルーガルーは自らの髪をつまみ、見せびらかす。

その髪はいつもの彼女の銀髪ではなく茶髪。ルーガルの固有魔法の効果によって変色した髪の毛がそこにあった。

「此方の魔法があるから見つからないヨ。それにここら辺はガリアの田舎の中の田舎、そうそう追っ手なんて来ないし見付かりっこないヨ」

「田舎だからこそ追っ手は来るのよ。覚えときなさい狼」

「M I 6のエージェントのご高説痛み入ります」

「喧嘩売っているの? ……後で休憩するとき買つてやるわ」

「今じゃないのかイ?」

「……………うっさい」

ジエイミーは息を荒げながら、ため息をつく

彼女達がいるのはガリア東部にある土地『ヴァランス』

果実、野菜、ワインなどを生産する農業地でありパリとの距離は約570 km。

まだまだ麗しのパリは遥か遠くであった。

そんな現実にはジエイミーはげっそりと嫌気がさし過去に思いをはせる。

「クソ……リオンはまだなの……」

「だからあれほど、1日待てば良いって言ったの二。」

「……………うるさい、モナコを脱出してここまで来るのに数日使ったのよ。時間短縮できる

なら短縮するに決まってる」

ジェイミーはそう言うのと、のっしのっしと足を進め前に進んでいった。

服を調達して着替え、『ルーガルー』の固有魔法を使ってモナコを抜け出し、ガリアに侵入してマルセイユに到着した彼女達が最初に考えたのはパリに行く方法だった。

徒歩では遠すぎ、車を用意するにもあてがない、ストライカーユニットも手にはなく、片足だけの『浮遊脚』も荷物になるからと重要な基板を抜いてモナコの中に置いて来てしまった。(本来は基板すら持つていく気はなかったが、いつのまにかルーガルーが抜いていた)

その結果選択された方法が、列車でパリに向かう方法であった。

ガリア奪還からの復興で着々と失われていた路線も復活し、今では主要な都市間の鉄道は息を吹き返している。

だが、鉄道をつかうというのは、多くの人々が集まる場所に行くということであり、多くの人々が集まる場所は追われる身である二人とって避けなければならぬ場所。

しかし彼女達にはルーガルーの固有魔法があり身体的特徴を変えることができる。

それに加えてあまり時間を掛けすぎしまうと、今巻き込まれているこの事態がどう転ぶかがわかったものではなかったため、早くパリに到着できるといふのなら逃す手は

なかった。

だからこそジェイミーは鉄道を使いパリに向かうと言う手段を選択した。

だが結果的に彼女達は田舎道を歩くことになってしまっている。

その理由は簡単。

列車が動かないのだ。

途中までは良かった。二人は列車に揺られパリに向かっていたが、ちょうどヴァランヌ駅に到着したところで列車が止まったのだ。

その理由は、進路先の線路にて不調が見つかり、その修理の為に一日かかるという。

つまり列車に乗る為には一日、待たなければならぬ。

だがそこでジェイミーは要らないことに気がついた。

不調が見つかった線路よりも先の駅まで徒歩で行けば、その駅からパリへ列車でいけるのでは？

つまり、ヴァランス駅の次の駅であるリヨン市の駅まで歩けば良い

その考えは間違っていない。確かに次の駅まで歩けば、パリへの列車に乗れるだろう。

ただ間違っているのは二つの駅の距離。

ヴァランス市の駅とリヨン市の駅との距離は約100kmもあるのだ。

ウィツチが魔力を使ってランニングしても十数時間かかるのは目に見えている。

だがそれでも時間が惜しいジエイミーは歩き始め、ルーガルは観光気分ですれについていった。

それが今から五時間前の話。

そしてその結果が、今の疲れ果てたジエイミーである。

「休憩ー」

ジエイミーはそう言うのと道の脇に生えていた木に寄りかかった。

木陰は日の下よりも気温が低いものの寒すぎることはなく、木漏れ日がほのかにジエイミーを照らす。

歩き続けて来た疲れも含めて急激に眠気が襲って来るがジエイミーは気力でそれ耐えた。

今ここで寝てしまったらヴァランス駅から歩いて来た意味がなくなり、下手に夜まで寝てしまったら真夜中の行軍をする羽目になってしまう。手持ちに明かりになるものは持っていないため、夜になってしまったら明かり一つない中での行軍を行う事になり、そうなったら一体どんなハプニングがあるかなんて考えたくもない。

そんなこと、ジエイミーは真平御免である。

「じゃあ、此方も休憩しよつと」

だがそんなジェイミーの気持ちを知ってか知らずか、ルーガルはジェイミーの横に座るとジェイミーの肩を枕にして呑気に目を閉じる。

まるで悠々自適な猫のような振る舞いにジェイミーはコツンとルーガル頭の頭を小突く。

「ちよつと、アンタ。何寝ようとしてるのよ」

そんなジェイミーの態度にルーガルは一向に目を開けず、ルーガルは口を開く。

「別に休憩で一眠りしても良いだろ？」

「その一眠りが何時間になるかわからないから注意してるのよ」

「リベリアンもどきは気にしすぎだね。もっと気楽に生きていくと良いヨ」

「……アンタ、私たちが今どんな状況なのか覚えてる？」

「リベリアンもどきが無茶して歩いて行こうとした結果、疲れて休憩しているル」

「……ぐっ」

「もし寝ても、君が起こしてくれるから安心だよ」

「あ、ちよ、ねえ！」

ジェイミーはルーガルの肩を揺さぶるが彼女が一向に気にせず体から力を抜き全

く反応しない。

その様子にジェイミーはため息を吐き諦め、そのまま空を見上げた。

空は青く、真つ白な雲が様々な形を成している。

ジェイミーにはこんな平和な空の下どこかでネウロイとの殺し合いや人類同士の策謀が応酬しているなんて考えられなかった。

優しい風が撫でるかのように木陰で休む二人を通り過ぎる。

こんな日に空を飛ぶと気持ちがいいんだろなあ。

そんな思いが浮かぶと、耳に規則的な吐息が聞こえて来た。

ふと顔を横に向けると。そこにはルーガルが穏やかな表情で眠っていた。

いつもの人を馬鹿にするような笑みではなく幸せそうな表情な寝顔。

こいつも、普段からこんな表情をすれば良いのに。

ジェイミーはそんなことを思いながら彼女を観察する。

ジェイミーにとってルーガルはよくわからない存在だ。

最初の出会いは殺し合い。

次はネウロイに襲われそうになった瞬間助けられ

その次は共に協力してネウロイを倒した。

最後はモナコ脱出どころか、パリに行くのにも手助けしてくれている始末。



彼女自身のことを聞いても、いつも帰って来るのは嘘の経歴のみ

側から見ても自問しても信用できる相手ではない。

手助けするには裏があり、いつ裏切るとも知れない相手。

しかし今、彼女はまるで信用しているかのように無防備に寝顔を自分に晒している。

敵か味方か判断がつかない謎のウィッチ。

それがジエイミーにとつてのルーガルだ。

だがそれでもジエイミーは彼女を一応信用しよう決めていた。

諜報員なんて仕事をしていると、いかに信用や信頼が脆く作りやすいものであるかわかりやすい。諜報員という存在は、情報を得るために、言葉巧みに人の心に寄り添い、他者から信用を勝ち取って行く。そしてその信用を利用して時には様々な情報を抜き取り、時には人々を煽動し、最後には裏切ることが常である。

だからこそジエイミーは、仕事が関わらないならば信用をしてくれた相手に対して絶対に裏切らない事を常にしていた。

それが自らの首を絞めることになろうとも、そこだけは譲れなかった。

ここを譲ってしまうと、今後何を、誰を信用すれば良くなるかわからなくなるといふ恐れがあるからだ。

「結局、仕事を抜きにすれば私は臆病なだけなのかもね」

ジエイミーはそんな独り言を呟き、少し目を閉じることにした。

大丈夫、意識をしつかり保つていれば寝ることなんてありえない。

そんな考えを巡らせながらジエイミーは体の力を抜き、耳をすます。

すると風の音が木々をゆらし、その葉や枝が優しい音を奏でるのが聞こえる。

その音はジエイミーに癒しを与えてくれた……………

……………

……………

……………

#### 4.

「結局寝てるじゃない私!!!」

ホウホウというフクロウの声が響き、月がきらめく夜。

そんな静かな夜にに使わない絶叫が響く。

「いや〜お互い気持ちよく寝たネエ」

地面に手をつき項垂れるジエイミーを見下ろしルーガルーが楽しそうに笑う。

するとその態度が気に食わなかったのかジエイミーはルーガルーの襟首を掴み激し

く揺さぶり始める。

「なにが『いや〜お互い気持ちよく寝たネエ』よ!! 今日中にパリに到着するどころか今日中にリヨンに到着できるかわからなくなったじゃない!」

「あははははははははは」

「『あはは』じゃない!」

時刻はすでに8時を過ぎており、すでに日は完全に沈んでいる。

あたりは月明かり以外明かり一つなく真つ暗な道しか見えない。

明らかに不味い状況。

今日中にパリに行くことは不可能になり、それどころか、こんなあたりに人工物一つない田舎道。

二人ともウィッチチであるため、獣に襲われても撃退するすべはあるが、それでも明かり一つない夜道を歩くのは危険である。

その後も十数分の間、ジェイミーはルーガルに思いの丈をブチまけ、一通り感情を発散すると襟首から手を離し、今度はしやがみ込み頭を抱え始めた。

ヴァランス駅から歩く失敗に加えて、寝てしまうという二度目の失敗。

そんな度重なる自らの失敗にジェイミーは顔を羞恥で真つ赤にする。

あー！何やっているのよ！私！

そんな自問自答をしていると、背後から肩を突かれる。

まるで恐る恐る指で肩を突くというルーガルーらしくない行為に羞恥と後悔で混乱しているジエイミーは猛獣のように怒鳴りながら後ろを振り返った

「何?」

「ひえっ!!」

カシヤンとランタンが地面に落ち、一人の女性が尻餅をつく。

そこにいたのは茶髪の妙齢の女性。

明らかにルーガルーではない人物がそこにいた。

え…誰?

ジエイミーの混乱している脳がさらに混乱する。

呆然と目を瞬かせるジエイミーの様子にルーガルーがニヤニヤと笑みを浮かべる。

そんな二人の様子に、困惑しながら妙齢の女性は口を開いた。

「あ、あの…私近くの児童擁護施設で働いているものですが…こんな夜中にどうされたのですか…?」

困惑しながらも、ジエイミーとルーガルーを心配するような表情。

こんな夜中の明かり一つない夜道に騒ぐ二人に警戒ではなく心配するというお人好し。

そんな人物が現れた幸運にジエイミーの口から思わず声が漏れた

「泊めさせてください」

「へ…??？」

妙齢の女性のさらに困惑した声が夜に響き、それに続いてルーガルーの笑い声が夜を彩っていった。

## 2話 パンとスープ

1.

夜の帳が下りた、とある児童福祉施設。

その食堂にて椅子に座った3人の人物がろうそくの明かりに照らされながら雑談していた。

一人は妙齢の女性、残りは二人の少女、ジェイミーとルーガルであった。

先ほど声をかけてくれた妙齢の女性はイリスと名乗り、彼女の懇意で二人は一夜だけこの施設に泊めてもらえる事になったのだ。

それに加えて、夕飯の残りであるパンとスープをいただき二人で食事をしているところである。

パンは柔らかい白パンで、スープはフランスの家庭料理の定番『ペイザンヌ』

ペイザンヌは玉ねぎや人参、ジャガイモが入った野菜スープであり、野菜の旨味と栄養がたっぷりに入ったそのスープに塩と胡椒で味付けがなされており、優しい味を感じさせる料理である。

その味は、モナコから逃げ出して二週間、凝ったものを食せなかったジェイミーと

ルーガルーの胃に優しく染み込んでいた。

美味しそうにパンとペイザンヌ・スープを食す二人をイリスは暖かな眼差しで見守り、何故あんな夜道歩く事になったのかを聞いていた。

その質問に対してジェイミーが自らの醜態ゆえの結果のため話すらそうにしたためルーガルーが事の顛末を語ると、イリスは口に手を当ててたいそう驚いた。

「リヨン駅まで歩くつて、ここからパリまで歩くつもりだったのかしら？」

そんなイリスの言葉に、ルーガルーは首をかしげる。

確かに目的地はパリだがそのことは彼女に伝えてはいない。

伝えたのはヴァランス市で立ち往生したためリヨン駅まで歩きそこから電車に乗ろうとした事。

それがなぜここからパリまで歩く事になるのだろうか

「どうしてリヨン駅まで歩くのがパリまで歩く事になるのかい？」

ルーガルーはパンを頬張りながらイリスに問う。

まるで言葉が通じているのに通じていない不思議な感覚。

それに両者は疑問符を浮かべたが、ふとイリスはルーガルーの勘違いに気がついた。

「ああ!!もしかしてあなたリヨン駅がリヨン市にあると勘違いしているのね」

「ん?違うのかい?」

「リヨン駅はリヨン市にはなくてパリにあるのよ」

「へア？」

「リヨン市の駅はペラーシユ駅、パールデュー駅 の二つだけ。よく海外からきた人は勘違いするのよね」

そうイリスは語るとクスクスと笑う。

ガリア人なら誰もが知っている事だが、リヨン市にはリヨン駅はなく、リヨン駅があるのはパリ。

だがそれをよく海外の人間はパリにあるのはパリ駅でありリヨン市にあるのはリヨン駅だと勘違いする。

そのよくある勘違いから、気に食わない海外の男がリヨンまで連れて行ってくれと言ってきたのを聞いて、わざとその男をパリのリヨン駅まで連れて行くという小話があるほどだ。

そんな勘違いをしてしまったルーガルーは少し恥ずかしげに顔を背ける、するとそこには美味しそうにスープを飲むジェイミーの姿がある。

その姿は今の話を聞いても何も動じない様子であり、その様子からルーガルーは気がついた。

「ねえリベリアンもどき……君もしかして此方が話していた時に、此方の間違いに気がつ



「いていたナ？」

ルーガルーからの問いにジェイミーは少し口角を上げながら返答する

「私の恥ずかしい話を誇らしげに語りながらも初歩的なミスをする姿は滑稽だったわよ  
狼」

長年諜報員をやっているジェイミーにとって、大体の欧州の地理は頭の中に入っている。

しかも主要都市の駅の名前なんて初歩中の初歩で間違う事があり得ない。

そんな初歩的な勘違いしてヴァランスの駅からリヨン駅に歩いて向かっていたと語るルーガルーの姿は彼女にとって胸のすくような滑稽さであった。

ニヤニヤと表現できるようないつも自身がする嗤い方をジェイミーに返されたルーガルーは頬を引きつらせながら彼女を睨む。

「……随分陰湿なやり返し方だね」

「休憩の時にやり返すといったはずよ？」

二人の視線が火花を散らして交わる。

だがその様子を見ているイリスはそれが子供同士の喧嘩のように見えて微笑ましく思い、ついついそれを止めずに眺めてしまっていた。

しばらく小言を言い合った二人はそんなイリスの視線に気がつき、互いに気まづくな

り、おとなしくスープとパンを再び食し始める。

子供を見守るような暖かいイリスの眼差しに気恥ずかしくなり、話題を変えようとジェイミーはイリスに質問を投げかけた。

「イリスさん。ここが児童養護施設と言っていました。ここには子供が？」

その問いにイリスはニコニコと笑みを深め返答をする。

「そうですね。14人の子供たちが共同生活を送っています」

「14人も…それはやはり」

「そうですね。ガリアが戻ってきてても人の命は戻ってきませんから」

「そうですね…」

国土が奪還され復興が進んでも人の命は帰ってこない。

友人や恋人、子供や親など失われた人は帰ってこない。

そして、そんな親を亡くした子供たちが暮らすための児童養護施設もまた数多く存在している。

この施設にいる14人もまた、親と望まぬ別れをする羽目になった子供たちなのだろう。

そう察したジェイミーは表情を悲しげに歪める。

そんな姿を見たイリスは優しげな表情を変えずに言葉を紡いで行く。

「あの子たちのために悲しんでくれてありがとう。ですが悲しいことだけではありませんよ。」

「なんせ私たちは母国に帰ってこることができましたし、復興も着々と進んでいます。それに毎日の子供たちとの賑やかな生活は楽しく幸せなのです」

そう語るイリスの表情はまるでお日様のように暖かく穏やかであった。

「それはよかったです。どうやら勘違い……いや勝手な偏見を抱いていたようです」

そんな様子から、彼女たちが本当に日々を楽しげに生きていることが容易に想像でき、ジェイミーは悲しげな表情を変え微笑みながら、勝手な偏見を押し付けたことを謝罪した。

「いいのよ。気にしないで。」

イリスのそんな謝罪への返答が語られると、突然ルーガルが親指を立ててそれを背後の食堂の出入り口に向け指差した。

「その子供達って、今此方たちの話を盗み聞きしている子達のことかい？」

その声が聞こえたのか、ガタンという音が扉の向こうに響く。

それと同時に慌てた幾人もの幼い声が扉から漏れて食堂に聞こえてくる。

するとイリスが椅子から立ち上がりズンズンと扉に近づいて行き、扉を開け放った。

「……あなたたち！もう就寝時間は過ぎていますよ！」

そんな声とともに開かれた扉の向こうには数人の子供たちが体勢を崩して廊下へたり込んでいた。

おそらく食堂の扉に耳を押し当てて盗み聞きしていたが、ルーガルーの指摘によつて慌てたためそのまま転んでしまったのだろう。

イリスに見つかつてしまったため観念したのか子供たちは口々に声を上げる

「アダンがやろうつて言つたから……」

「ジュールも同意しただろ！」

「でも先生！明日の劇が楽しみで眠れないよ」

「ねえねえ先生！お客さんなの!?!」

「レオのトイレに付き合つただけで盗み聞きなんてしてないよ！」

「あー！こんな夜にパン食べてる！いいなあ！」

「先生、眠れないから子守唄歌つてえ……」

十人十色、いろいろな子供のいろいろな声が食堂に溢れる。

子供たちは口々にイリスに語りかけ彼女の周りに集まり甘え始める。

そんな子供たちの様子にイリスは、仕方なさそうにため息をついた。

「明日は劇があるというのに、こんな遅くまで起きていたら明日起きられなくなりますよ？さあ、連れて行ってあげますからちゃんとみんな寝ましょう」

「えー」

「はーい」

「わかったー」

イリスの言葉に子供たちは口々に同意していく。

そんな子供たちの返事を聞いたイリスはジェイミーとルーガルーに振り返った。

「すいません二人とも。子供たちを二階の寝室に寝かせつけてきますね」

そんな困ったようでありながら慈愛に満ちた表情に、先ほどイリスが語っていたことはやはり本当だったのだろうと確信しながらジェイミーは返事をした。

「いいいえ、気にしないでください」

するとイリスは頭を下げて、子供たちを連れて食堂から離れて行く。

子供たちが手を振ってきたので振り返し、ジェイミーは彼女たちが食堂の扉を閉めるまで見送った。

バタバタと騒がしい足音が食堂から離れて行く音が聞こえる。

そんな音にジェイミーが耳を傾けていると、カチンと金属音があった。

彼女がそちらに目を向けると、そこにはそんなジェイミーを見ながらスプーンでスープ皿を叩いたルーガルーの笑みがあつた。

「随分と、和んでいるようだね。明日も泊まって行くかい」

そんな答えがわかつているような戯言に、子供たちを見て表情を緩めていたジェイミーの顔が呆れ果てた表情に変わる。

「バカ言ってるんじゃないわよ。明日の朝一番に出て行くわ」

「それは残念」

クスクスとルーガルーの笑いごえが食堂に響く。

相変わらずのどこか癪に障る声、そんな声にひたいに少しシワを寄せながらジェイミーはパンをちぎる。

「それにしても、よく子供達がいるって気がついたわね」

「此方は耳がいいからネ」

ルーガルーはそう言い、ひよっこりと頭に狼の耳を出現させた。

その様子に、ジェイミーはため息をつく。

「バカ、なに耳を出しているのよ仕舞いなさい。バレるわよ」

「大丈夫、大丈夫」

ルーガルーはジェイミーの渓谷を軽く受け流し、残った最後のパンをごくりと飲み込む。そして、両手を合わせ完食された皿に向かって頭を下げた。

『ごちそうさまでした』

そんな英語ではない言葉がルーガルーから発せられる。

そしてその言葉を聞いたジエイミーは驚き目を瞬かせた。

その言葉は英語ではなく扶桑語、そしてその礼法は扶桑人に見られる食後の礼法であつたからだ。

そして、明らかに扶桑人の顔ではないルーガルが行うその作法は、なぜか妙にしつくりきており、違和感を感じさせない。

またこいつの出自がどこかわからなくなった。

ジエイミーはそう内心毒づく

礼を終えたルーガルはそんなジエイミーの様子を見てチエシヤ猫のように口角を歪めた。

「どうしたんだイ？そんな変な事を此方はしたかな」

その声色と表情から明らかにわかつてやったものだどジエイミーは認識し再度ため息を吐く。

「嘘でもなんでもいいから、そろそろ経歴とか統一してくれないかしら？アンタの癖と礼法見てると、一人万国博覧会を見てる気分よ」

「酷いナア。わざとじゃないのニ」

「嘘よ。どうせ本当はその変な英語訛りつけなくても喋れるでしょ」

「That, s not true」

「随分と綺麗なクイーンズ・イングリッシュだね！」

「お褒めいただき光栄だよ」

「皮肉を言ってるのよ……！」

飄々とした表情で煽ってくるルーガルーをジェイミーは睨め付ける。

だがそんな視線もルーガルーは気にせず、そのニヤついた表情を少しも変える様子はない。

こういったやり取りは二人にとって初めてではなかった。

モナコから逃亡して二週間の間、こういったやり取りは二人の間で何度も行ってきたことだ。

正直ジェイミーとしては勘弁してほしいが、どうもルーガルーはこんなやり取りを好んでいるようにも見受けられていた。

誰が好んでこんなコントのような会話をしなくてはならないのか。

だがそれを好んでいるルーガルーはジェイミーにとって、やはり訳が分からないウィッチであった。

そんなルーガルーを見ていたジェイミーの脳裏にふと一つの事が頭に浮かび上がる。

それは今更というべき事だったが、落ち着いている状況の今ならちようどいい。

ジェイミーは、最後のパンの一切れを掴みながらルーガルーに質問をした。



「ねえ狼。最初は<sup>モナコ脱出</sup>目的地までついてくるって言うていたのになんで<sup>モナコ脱出</sup>目的地が過ぎ去った後でも私の<sup>任務</sup>旅についてきたのよ」

暗喩を含んだジエイミーの質問。その質問に対してルーガルは答える。

「実はお土産を買い忘れてね。それを手に入れるまでは帰れないのさ。家出のような出発だっただけにね」

『お土産』はおそらくはオナトツプが確保したあのアタツシケースのこと、またはそれに伴う『ウオーロック技術』のこと

『家出』に関しては、彼女がオナトツプらが行おうとしていた取引の邪魔をして裏切ったことを指すのだろう

そこまではジエイミーにも理解していたこと。だがなぜ裏切ったのかをジエイミーは聞いていなかった。

そう、なぜこいつが裏切りをしたのかが分からない

あの時の事を思い出す限り、オナトツプが持っていたアタツシケースと浮遊脚を受け取るのはこいつではなかったはずだ

本来のこいつの役割は顔の偽装のはず

それが何故？

ジエイミーの脳から消えない疑問

考えられる理由はいくつかあるが、そのどれもが当てはまりどれもが当てはまらない可能性がある

いくらでも推測や妄想はできる

だが、それよりもジエイミーは別の選択をした

「なんで 裏切り 家出なんてしたのよ」

それは直接の問い。

常に嘘八百を並べ立てる人狼に対して、最も意味のない行動

だが、それでもジエイミーは直接彼女から答えを聞きたかった

ジエイミーのさらなる問いに、さも楽しげな思い出を語るようにルーガルは答える。

「家から命じられた仕事をやっていただけ、思ったより早く終わってネ。」

そのままルーガルが語ろうとするが、その言葉にジエイミーはSTOPというジェスチャーをルーガルに向けて言葉を止める。

話し始めたのに止められたルーガルは不服そうな顔をジエイミーに向ける。

だがそんな表情を無視してジエイミーはルーガルに質問をした。

「その仕事って…私が関わっているアレ？」

そんな質問にルーガルーはキョトンとしたあと、楽しそうに微笑み答えた。

「そうだヨ。君の手配プロマイド書が出回る羽目になったアレ」

「…OKわかった。話を続けて」

ジェイミーはわかっていたとはいえ、こうして濡れ衣を着せられたを再確認すると、内からルーガルーとヤヌスへの怒りが湧き上がるのを感じる。

だがそれをジェイミーは宥め、ルーガルに話の続きを促した。

「それで早く帰ってきたら、『同じ職場』の人たちが話をしていてネ。それを盗み聞きしてみたなら、どうも『美味しいケーキ』を此方に隠れて家に運ぼうとしていたんだ。今まで一緒に仕事をしてきたというのに『美味しいケーキ』の事を教えてくれなかった『家』が嫌になって『家出』したのサ」

「その『家出』はいつから考えてたのよ」

「仕事が始まる前から」

「…理由と行動の時系列が逆になってるわよ」

「別にそれは重要じゃないだろ？」

ニヒルに笑いながら戯言を吐く狼にジェイミーは悪態をつきたくなるが、それを内の中に納めたため息をつきながら話の続きを促した。

これ以上話の腰を折っても仕方ないからだ。

「で…あんだ、その『美味しいケーキ』どうするつもりだったのよ」

「それは『仲良くなつた友達』と分け合つて、その子ともつと仲良くなるために使うかな？」

「その『仲良くなつた友達』が『実家』つてわけ？」

「まさか、どこも此方の『家族』だよ」

「…やっぱりろくな『家出』の理由じゃないわね」

「そりやあ酷い、でも今の所『美味しいケーキ』を分けようと思つているのは君だよ」

「それは光栄だけだね。『家出』するような不良少女と仲良くケーキを分け合うなんて上司パパが許さないわよ」

「それは君の推測で、実際は『パパ』に聞いてみないと分からないだろう？まあどの『パパ』に話を聞くかで答えは変わりそうだけど」

「…まあね」

ルーガルがまるでわかつているかのように雄弁に語る。

その答えが癪に触るがジェイミーは一応同意した。

ジェイミーは口に出すことはないが個人的にはルーガルのことは一応信用している。だが信用しようとしまいと、ジェイミーがエージェントである以上『美味しいケーキ』を分ける分けないの最終的な判決を下すのはジェイミーの上司である『M I 6長官』

である。

そのため現状ジェイミーが長官に連絡が取れないので、その答えは保留、つまりは現状維持ということになる。

まあ、現状ルーガルーが役に立っている以上このまま協力関係を続けられるのはジェイミーとしても嬉しい限りであった。

するとその時、ルーガルーが眉をひそめると、頭部から狼の耳を消した。

そして彼女はゆつくりと視線を食堂の出入り口に向ける。

ジェイミーもまたそれにつられるように視線を食堂に向けた。

そこは相変わらずしまっている扉があり…

数秒後、その扉がゆつくりと開き始める。

そして扉の影から小さな影が顔を出した。

その人物はまだ十代にも満たない小さな少年。

彼は不安そうな顔でジェイミーとルーガルーを見つめ、口を開いた。

「お姉さん達……だれ？」

そんな不安げな彼に対してジェイミーは微笑みながら答える。

「私はジェイミー・ボンド。こっちは私の友人。宿がみつからなくて立ち往生しているところをイリスさんに助けてもらったのよ」

「イリス先生に……？」

「そうよ。さつきイリス先生は他の子と一緒に二階の寝室に行つたけれど君はどうしたの？」

「えつと……みんなとトイレに行つていて、でもトイレから出るとみんないなくて……廊下で一人だけ変えるには暗くて怖くて……したら食堂から声が聞こえて……」

そう語る少年は恥ずかしくそうにモジモジと手をいじりながらたどたどしく話始める。

そんな微笑ましい様子にジェイミーは微笑み、事情を察する。

おそらく彼は、先ほど食堂に来ていた子供達とトイレにいったが、一人置いていかれたのだろう。そして一人で暗い廊下を進んで帰るには怖くて怯えていたら、食堂から声が聞こえて来たからこうして顔を出したというわけだ。

そんな小動物のような可愛らしさをジェイミーは感じ、椅子から立ち上がり少年の傍に近寄り目線を合わせる。

「ねえ君、なんて名前なのかな？」

優しげに微笑むジェイミーに安心したのか、少年は小さな声だがその問いに答えた。

「レオ……レオって名前」

「そう、じゃあれオ。よかったらお姉さんと一緒に寝室に行く?」

「えつと……いいのお姉さん」

「いいわよ。このままだと寝室に帰ったみんなが、部屋にレオがいない事にびっくりしちゃうからね」

「ありがとうお姉さん!」

レオは喜びジエイミーに抱きついた。突然の大胆な行動にジエイミーは驚くも微笑みながらレオの頭を撫でた。

それは微笑ましい光景だったのだが、そんな光景に似合わないルーガルーの癩に触る笑い声が食堂に響き始める。

ジエイミーは優しげな表情からジト目になりルーガルーに視線を向ける。

するとそこには可笑しそうに腹を抱える彼女の姿がいた。

何がそんなにおかしいのか分からないジエイミーは首をかしげるとルーガルーがその理由を雄弁に語り始めた。

「お姉さんと一緒に寝室に行く? って……君はそんな幼い子が趣味なのかイ?」

「……………」

「あれ? 分からない? 君はまだコウノトリやキャベツ畑を信じる子供だったカナ?」

「……………!! ば、バカじゃないのあんた!!」

ルーガルーの言いたいことに気がついたジェイミーは顔を真っ赤にして声を荒げる。このルーガルーは、『寝室に行かない?』という言葉をも、よりによって大人な意味の言葉と解釈したのだ。

まだ十代にも満たない少年をそんな意味の言葉で誘う女になった覚えはジェイミーには一切なかった。

今日という今日は許さないとジェイミーは怒り、ルーガルーがその怒りをさらに煽る、そしてその間にいるレオと名乗った少年はなぜ彼女達が言い合いをしているのか分からず目を白黒させていた。

## 2.

ジェイミー達がいる児童福祉施設から数十メートル離れた地点。

そこには黒スーツの男達が乗った数台の車が施設に向かっていた。

彼らに通信が入ったのは数刻前、監視班から怪しげな二人が施設に侵入した事を知せる連絡であった。

くだんの二人はまだ若い女性二人。そんな二人がこんな夜更けに現れる事は確かに



怪しいが、ヴァランス市とリヨン市との線路が遮断され列車が使えない今、車などの手段がないのなら徒歩で無理やり渡ろうとする人間がいてもおかしくはない。だから警戒はするが、そこまで急を要することはない。

そう彼らは最初に連絡をもらった時に判断していた。

だが、彼女達の身体的特徴のいくつかが、とある手配書の内容と被っている部分があることに彼らの上司は気がついた。

その手配書と彼女達には確かに違う身体的特徴がいくつも見受けられる。だがそれでも、似ている点もあり彼女達が手配書に書かれた人間である可能性が微々たるものだが湧いて来ていた。

微かな可能性。それは本来ならば、その可能性が確実になるまで無視すべき事柄でありそれを精査するのが彼らの上司の役割であった。

だがその上司は、たとえ可能性が微々たるものだったとしても手配書の人間ならば逃すわけには行かないとある理由があった。

そのため上司は施設警備に従事していた自らの手駒と部下を集め、施設に向かわせたのだ。

何台もの黒い車が施設に向かって進み続ける。

彼らが施設まで到着するのに残り4分。  
ガリア課報機関  
BCRAがジェイミー達に接触するまであと16分。

夜のガリアにて、血なまぐさい争いが始まろうとしていた…

### 3話 賞金首と夜の訪問者

1.

PM10:22 セダン基地

消灯時間まであと30分と少しになったセダン基地。

そんな基地内で、電灯によつて照らされた廊下を足早にかけ一人の少女の姿があった。

彼女の名はイザベル・デュ・モンソオ・ド・バーガンデル

第506統合戦闘航空団に所属する空軍少尉である。

ハンチング帽をかぶり長めのコートを着たその姿は、遠くから見れば少年のようにも見え、またその振る舞いも女性的よりも男性的に見える。

それもそのはず、彼女は幼年期に性別を偽り、『アイザック』という名で生活していた時期があつたため、そのせいで男性的な振る舞いが板についていた。

彼女は明日、506JFWの仲間たちと共にを行う劇の最終調整をしていたため自室に帰るのが遅れてしまつていたのであつた。

理由があるとはいへ、消灯後に歩いているのが見つかり叱責を受けるのは彼女に

とつて望むべきものではない。

だから足早に廊下を歩いていただけだが、そんな彼女はふと、進行先に一つの人影を見つげ歩みを止めた。

その人影は掲示板の前で目を輝かせながら掲示板に貼られているものを見ていた。

まるでケーキ屋さんのケーキを見る子供のようなキラキラとしたその瞳は純粹な子供のように見えるが、彼女の同僚であるイザベルはその瞳は金に目を奪われた光であることを知っていた。

同僚の名は黒田那佳中尉

扶桑皇国陸軍 飛行第33戦隊所属であり、最近506JFWにやって来た軍人で、イザベルの友人でもある。

なぜ消灯まであと少しなのに廊下にいるのかはイザベルには分からない。だが彼女が目を輝かせている理由はなんとなく予想がついていた。

このまま放っておいてもいいが、彼女のことだから消灯時間が過ぎてもこのまま、大金のことを妄想して警備員に叱られるまでこの場に止まりかねない。

だからイザベルは黒田に一声かけることにした。

「どうしたんだい？黒田さん」

近づいていたことに気がつかなかったのか、那佳はビクリと体を震わせるとイザベル

の方をむいた。

声をかけて来たのがイザベルと認識した那佳は興奮が収まらないかのように掲示板を指差しながら彼女に詰め寄って来た。

「ねえねえ見てアイザックくん!!この手配書!!」

彼女の指し示す先には今日の夕方ごろ掲示板に貼られた一つの手配書があった。

その手配書に書かれている犯罪者は、二週間ほど前にモナコで行われた新型ストライカーユニットのデモンストレーションにおいて、軍の目を掻い潜ってその新型を盗み出した少女。

髪は金髪、肌は北欧系の白人であり、身長は小柄。そして何よりウィッチであることが書かれている。

そうウィッチなのだ。

今の世ではウィッチならば兵士として駆り出される時代。そんな時代であるのにもかかわらずこの盗人の少女はウィッチであるのだという。

なら考えられるのは元軍人ということになるのだが、それは現在否定されている。

元来、魔力を発現すると政府に必ず登録されるのが各国の常識だが、このウィッチの存在を各国は否定しており、彼女が何者なのか見当もつかないと夕方この手配書を貼り付けていたA部隊隊長であるロザリー・ド・エムリコート・ド・グリユンネ少佐がぼや

いていたのをイザベルは聞いていた。

またそれだけでなく、ロザリー隊長がこの手配書に書かれた懸賞金についてもため息をついていたのも覚えていた。

イザベルは手配書に書かれた懸賞金の金額をチラリと見る。

そしてプチ守銭奴である那佳が興奮するのも無理はない数字の羅列を見て乾いた笑い口から漏れた。

その金額はなんと軽くストライカーユニットを数機買えるほどの金額であったのだ。

本来ならばこういった懸賞金がかけられたものは軍の基地などには貼られない。だがロザリー隊長が言うには、この手配書は一部の軍上層部と太いパイプを持つパトロンが軍に『お願い』したものらしく、『お願い』された上層部が各基地にこの手配書を貼ることを命令したというわけであった。

そんな命令を、格納庫爆発事件やネウロイ取り逃がし未遂事件などの事件を引き起こし、常にかからのお叱りを受け続けている506JFWの我々が隊長が断れるはずがなく、こうしてセダン基地の掲示板に貼られることになっていると言うわけだ。

そんな胃痛を抑えながら語るロザリー隊長の話聞いた時、イザベルは「まあ、この基地でこの手配書に興味を持つのは一人しかいないな」と思っていたが、今日の前でイザベルに懸賞金について早口で捲し立てる黒田を見る限り、やはり間違っではないなかつ

たようであった。

「アイザックくん！この人を捕まえたら全額入るのかな！それとも中抜きされたりするのかな！そもそも扶桑人の私が受け取れるのかな！」

目を輝かせ興奮がやまない那佳の様子にイザベルは苦笑し、人差し指をたてその指を那佳の口に押し当てた。

突然の行為に機関車のように動いていた那佳の口が止まる。

「Shhh. 消灯前に騒いでいたらまた姫様に怒られちゃうよ？」

イザベルがウインクをしながら忠告する。

それに那佳はコクリコクリと頷いた。

「明日はせっかくの劇のお披露目。今日はゆっくり休もうよ黒田さん。それにその手配書の犯人はモナコで事件を起こしたんだ。このあたりまでは流石にこないよ」

「うくん、そっかあ…確かに手配書の子が遠く離れたここまで来るわけないよね…」

そんなイザベルの言葉に那佳はしよんぼりとする

そんな様子に少々言い過ぎたかなとイザベルは心配するが、すぐに那佳は元気を取り戻しイザベルの手を掴み部屋に向かって歩き出した。

「よし、そうとなれば、明日のためにいっぱい寝よう！」

「わわっ、黒田さん！ ひっぱらないで！」

元気に快活に歩く那佳に引つ張られイザベルは自室に歩いていく。

その後、結局うるさいと姫様に怒鳴られる事になるのを、まだ彼女たちは知らなかった。

そして何より、手配書の人物がそれほど遠くない位置にいるなんて気がつくわけがなかった。

## 2.

PM10:46 児童福祉施設にて

すでに子供が寝静まる時間帯。そんな時間にランタンの灯りがゆらりと揺らめき、3人を照らしている。

そこには、ランタンを持ったジェイミーが、手を繋いだルーガルとレオに先導して2階への階段を上っていた。

ジェイミーはルカのことをルーガルに任せるのは少々不安であったが、ルーガルは予想外なことに子供に対しての対応がうまく、食堂を出てからわずかな時間でレオ少年と親しくなっていた。

ジェイミーは先ほど抱きつき甘えてきたレオをルーガルに取られたことに少し寂しさを感じながら階段を登る。



そんな後ろではルーガルが今までの旅という前提のホラ話をダイナミックに語り、レオの瞳を輝かせていた。

ルーガルが話すホラ話を聞きながら、聴こえてくる話のあまりの滑稽さのため息をつこうとしたジェイミーは、ふと階段を登りきったところで突然立ち止まった。

その様子に、数歩後ろを歩いていったルーガルも歩みを止める。

「どうしたんだい？ もしや君もレオのように暗い廊下が怖いだなんて…」

「黙って」

ジェイミーはルーガルの軽口をさええぎると同時に、階段を登りきった先、廊下の窓の横に体を貼り付け窓から外を伺い始めると同時に魔力を解放した。

すると彼女に猫耳と尻尾が生え、それとともに頭に魔力でできたアンテナのようなものが現れる。

『魔導針』

それはナイトウィッチたちが使う魔力で作った哨戒レーダーであり、ナイトウィッチたちの夜の目。

熟練のナイトウィッチならば地平線までの飛行物体の探査が可能な他、意識を集中させることにより遠方のラジオの電波や、果てはネウロイの「声」まで聴き取ることが出

来るといふ技術。

本来ならば夜の空をネウロイから守るためのそれは、夜の対人戦においてもかなり有用な能力でもあり、今その力がこの夜の児童養護施設にて最大限に有効活用されている。

そんな『魔導針』をジェイミーは展開し、そのレーダーに反応した地点を夜の暗闇に慣れた目で追っていく。

その表情は先ほどまでの表情とは違い無表情に近く、瞳からは温かみが消え冷たい視線を窓の外に向けていた。

その動きの意味に感じたルーガルも同様に壁に張り付いた。

その表情は先ほどと同じ笑みだが、先ほどまでの笑みとは違う、獰猛な笑みであった。そしてルーガルは服の下に隠していたククリナイフを一本取り出す。

ルーガルの手に突然現れたナイフを見たレオは驚き目を瞬かせるが、ルーガルは気にせずナイフで手遊びしながらジェイミーの視線の先を観察する。

そこは夜の暗闇に沈む児童養護施設の庭が広がっていた。

日中には子供達が駆け回り賑やかな庭も日がくれた今では何も動くものがない静寂に包まれている。

だがそんな暗闇の庭へと目を向けているジェイミーの視点を追って目を凝らしてみ

ると、庭を夜の暗闇に紛れて動く人物が複数人いるのがうかがえた。

黒いスーツを着た彼らは手に拳銃を持ちゆつくりと建物に近づいてくる。

その動きは素人を感じさせないほど慣れきった動きであり、そして各自一人一人の連携が行き届いている組織的な動き。

ただ一瞬窓の外から庭を見ただけでは彼らがそこにいる事には気がつかないようなベテランの動き。

だがそのベテランの動きも魔導針の前では無意味となる。

ルーガルはそんな彼らの動きを見下ろしながら、冷えた視線で外を確認するジエイミーに声をかける。

「よく『お客さん』がいると気づいたネ。先に気がつかないと『魔導針』なんて出さないだろう?」

「視界の端に動きが見えたのよ」

「へえ……こんな真夜中ニ? 遠くの距離の? コソコソと動く彼らをかイ?」

「……いろいろ言いたいことはあるでしょうが、それは後。魔導針の反応からして囲まれているわね」

「敵は何人?」

「最低でも6人以上。ユニット無しで発動した不安定な魔導針だから確認出来ない

敵も多くいると思う」

「それはまた、絶体絶命だネエ」

そう返すが言葉と裏腹にルーガルは楽しそうに舌なめずりをする。

その姿はまるで獲物を見つけた猟犬のようであった。

ジェイミーはルーガルのそんな様子を視界の端で捉えながら考えを巡らせていた。

動きからして今迫って来ている敵は訓練された人間。普通の警官ではないことは一目でわかる。

彼らの正体として一番可能性が高いのはガリアの諜報部だろうか？

だが彼らの正体がなんにせよ、片手に拳銃を持つて闇夜に紛れて忍び寄る姿からして『お友達』ではないことは明らかであり、彼らが自分たちを目的にやってきたのは想像に容易い。

だがジェイミーは一つ疑問が脳裏に浮かんでいた。

それは、彼らの人員が揃いすぎている。ということ。

これがジェイミーを突発的な発見をした事による行動ならば、こんなにも武装した人員がいるとは思えない。

つまり、彼らはジェイミーとルーガルの二人がここにいると判明したため人員を集

めて準備してここに来たと考ええる方が容易だ。

なぜ二人がこの児童養護施設にいたことがわかったのか。

考えられる理由として、通報されたか尾行されていたかの二つの理由がある。

だがその二つはどちらも考えづらいものであった。

通報されたとして考えられるのが、イリスが二人の正体に感じて通報したという事。感づかなかつたとしても真夜中に怪しい人間二人が転がり込んで来たたら不審に思つて警察に連絡するという行動も理解できる。

だが通報したとはいえ、まだここに来てから30分も経っていない状態。その間に連絡したとしても、わずか30分の間にこんなにも武装した人員。しかも警官ではなくおそらく諜報員らしき人員を集めることは不可能だろう。

しかもここは都心から離れている田舎町、前々からこの町に人員を用意していない限り、都心から人員を集めた場合移動時間だけで一時間以上経つだろう。

それに加えて、二人は顔を変えていないまでも髪の色をルーガルの固有魔法を使って変更し、髪型もモナコの時とは完全に変えている。

熟練の捜査官でもない限り、手がかりやきつかけもなく一目であつてその人物が、手配書が出回っている人物だと判断がつくわけがない。

つまりは通報という点は考えづらい。

ならば尾行はどうだろうか。

モナコ、それがガリアに入ってからずっと尾行されていたというもの。

だがこれも考えづらい。

なぜなら行動中二人は追っ手の存在を常に警戒していたし、毎晩ジェイミーは魔導針を展開し追跡者の存在を確認していた。

そしてそれらの警戒や確認で追っ手の存在を確認できたことは未だにない。

それにもし、その警戒や確認をくぐり抜けて尾行していたのなら、今日の半日近く二人揃って昼寝をしてしまうというチャンスを逃すはずがない。あの何もない場所で包囲して詰め寄れば二人とも捕獲されていたであろう。

それに、わざわざこの児童養護施設に入ってから包囲するのも奇妙な話だ。

この建物に閉じ込めるといのが目的だとしても、建物内という遮蔽物や隠れる場所が多い場所で追い詰めなければならなくなり、それに加えてこの児童養護施設にいる民間人が巻き込まれてしまうのが可能性が高い。そんな手間をかけるのなら、やっぱり日中のあの昼寝の時に追い詰めた方が楽である。

また、そもそも2人がこの建物に来たのはたまたまなのだ。

これがかもしイリスが実は敵対者であり、二人を誘導してこの児童養護施設にワザと呼び寄せ仲間を呼び寄せたというのなら、今の状況も説明がつくが、それは可能性が低い。

何故なら、そもそも泊めてと最初に言ったのはジエイミーであるからであり、それから最初にこの施設に入った時に待ち伏せされているはずである。

ではイリスが敵対者であり、二人と出会ったのが偶然だった、というのはどうだろうか？

だがそれがそうだとしても、結局は無理な話だ。

結局先ほど考えたのと同じ、通報から30分でここまでの人員が集まるはずがないのだ。

だが現実では、今まさに武装した複数人の人間たちがこの建物に迫って来ている。

それがジエイミーには不可解で理解できないが、それを考えるよりもこの状況を打破しなければならぬことが先決であった。

ジエイミーは胸元からワルサーPPKを取り出し残弾数を確認する。隣にレオがいるとはいえ、敵が迫って来ており、ルーガルがナイフを出している以上、武器や正体を隠す必要性はなくなっていた。

それよりも、今から起こる騒動に巻き込まれないようにレオを安全な場所……つまりイリスや子供達がいる寝室に送らなければならない。

はてさてどうレオに伝えたものか……

ジェイミーがそう思案していると、ルーガルーがナイフを持っていない手でレオを手招きしていた。

レオは突然の事に目を白黒させながらもオドオドとルーガルーに近づく。

レオが目の前に来るとルーガルーは彼の頭を撫でながら優しい質問した。

「ねえレオ。君はさつき明日ここで劇が行われるって言っていたよネ」

「う、うん…」

「それはどこかの劇団員が来るって事かい？」

「ちがうよ」

「ほう。じゃあどんな人達が来るんだイ？」

「それは…お姉ちゃんと同じ」

レオはそういうとジェイミーに指をさした。

突然の指摘にジェイミーはぼかんと口を開けた。

その様子を見ながらレオはさらに言葉を紡ぐ。

「お姉ちゃんと同じウィッチの人たちだよ。軍人さんで『いもんかつどう』で来るんだって」

「…なるほどネ。答えてくれてありがとうレオ」

ルーガルーは望む答えをくれたレオの頭をワシヤワシヤと激しく撫で、その行為をレ



才は恥ずかしそうに笑いながらも受けいれる。

だがそんな微笑ましい光景を見ているジェイミーの顔は引きつっていた。

なんてタイミングの悪い：！！

ジェイミーの内心にそんな独白が生まれる。

『いもんかつどう』つまりは『慰問活動』

そして『軍人』、『ウイツチ』

それらの単語からジェイミーの脳裏に先週見た新聞を連想される。

その新聞には大きな見出しである記事が出ていた。

その記事は506JFWの二つの失態、セダン基地で起きた爆破事件やネウロイ撃ち漏らし未遂事件について。

内容を要約すると事件を引き起こした506JFWをマスコミが揶揄している記事であった。

そんなイメージダウンを頻発する506JFWがイメージアップ戦略を行うのも当然のことだろう。

なぜなら今月の終わりには発足式が行われるのだから。

今のうちにある程度のイメージの向上を行なっていないと発足式でマスコミが何を

書くかわかったものじゃない。

ならば行うイメージアツプ戦略として考えられるものは、児童養護施設への慰問活動なんてなんてありきたりなものだろう。

そしてレオの話を聞く限りその慰問活動先がたまたまこの児童養護施設であり、つまり明日この児童養護施設に506JFWが劇を行いにやって来る事になる。

それならば、ここまでの人員がいるのも同意できる。

なぜなら明日ここには、ガリア内どころか各国の策謀が渦巻きそれに囚われている506JFWが来る場所。

各国のエース達が集まる統合戦闘航空団がくる場所なのである。

行くことが慰問活動である以上、当日ならまだしも前日から警備の軍人や警官を配置するのは過剰であるため、警備の人間がいけないことは納得できる。

だが、明日来るのはあの506JFWなのだ。

ならば、表向きではないにしろ前日に児童養護施設の周囲を警戒するのも当然だし、なんらかの工作活動が起きないように人員を配置するのも当然の事。

おそらく警備していた彼らは、506JFWが来る前日の真夜中に児童養護施設に侵入して来た怪しい二人の身元を調べた結果、手配書の二人ではないか？という推測でも出たのかもしれない。

だがその答えがどうだろうと、今の二人が狼の巢に呑気に散歩しに来た羊である事は変わりがない。

つまり、ジェイミーとルーガルの二人はそんな警備の張り巡らされた場所に自ら突っ込んだという事になる。

そんな結論をジェイミーの脳は導き出したため、彼女はたまらず頭を抱えた。

というか何故劇なの！普通に訪問とかで良かったじゃない！

そんな八つ当たりじみた恨みをジェイミーは506に抱いていた。

「君といると退屈を感じないヨ」

「…うるさい」

ニヤニヤと嗤うルーガルを、ジェイミーはこめかみをヒクつかせながらも無視して、レオの正面にしやがみ視線をあわせた

レオは真正面からジェイミーに視線を合わせられた事に頬を染める。

そんなレオの様子にジェイミーは微笑ましく思うが、真剣な表情でレオに語りかけ始めた。

「ねえ、レオ。一つお願いを聞いてもらってもいいかしら」

「…えつと、なに？」

「今から寝室に帰ったらイリスさんと他の子供達と一緒に絶対に部屋から出ないで。た

とえ外でどんな音がなろうとも絶対よ」

「…な、なんで？」

「理由は言えない。だけど約束して。お願い」

ジェイミーはワルサーを持っていない手でレオの頬を撫で、顔を近づける。

「え、あ…うん」

突然の事にレオは顔を真っ赤にしてジェイミーのお願いに頷いた。

その様子にジェイミーは微笑み、さらに顔を近づけ：

「ありがとう。これはお礼よ」

チュツという音とともに、ジェイミーはレオの額に軽くキスをした。

ジェイミーが顔を離すとそこには、顔をトマトのように赤く染め硬直しているレオが案山子のように立っていた。

そんな可愛らしい様子にクスリとジェイミーは笑い、ポケットからメモ用紙とペンを取り出すと文字を書き始める。

そしてレオが正気に戻ると同時に彼にメモ用紙とランタンを渡した。

「さあ、行つてレオ。メモはイリスさんに渡して」

「う、うん」

レオはジェイミーに促されるまま夢心地のような雰囲気寝室まで歩いていく。

その可愛らしい様子にジェイミーは微笑み、ルーガルは啜う。

「随分と悪女じゃないカ」

「レオは嬉しそうだったわよ？」

「oh::よく言うものだね」

ジェイミーとルーガルは二人顔を合わせて苦笑すると、すぐにその表情を引き締める。

「それで、どうするんだイ？ポンド？」

「このまま立てこもってもいい事なんてなの一つないわ」

「つまり？」

「魔導針を頼りに敵が薄いところに向かって、障害を排除しながら突破して離脱。ついでに彼らの車でも貰おうかしら」

「いいネ。好きだよそういうのハ」

「こつちとしては本当ならドンパチは勘弁してほしいのだけれど」

そう語るジェイミーは先ほどまでレオに向けていた温かみのある微笑みは失われ、冷たく冷静な表情に覆われている。

その表情はモナコの地下でみせた表情とも、長い徒歩を歩いていた時の表情とも、あどけない寝顔の際にみせていた表情とも、レオに見せていた表情とも違う。

感情を完全に抑制している一人のエージェントとしての顔があった。その顔を見たルーガルは嗤う。

「それが本来の顔かい？」

「仕事の顔よ」

「それにしてもモナコでの仕事の最中はやんちゃだったけど」

「あれは予想外のこと起きすぎていたのよ」

「じゃあ、今回のことは予想外じゃないとモ？」

「これぐらいなら……いつものことよ」

「いいネ。君のことがもつと好きになったヨ」

ジェイミーとルーガルは軽口を交わし終わると、ゆっくりと歩き進み始めた。

## 4 話 王党派と魔導針

1.

PM10:58 児童福祉施設二階廊下

右手の窓から見下ろせるのは人気のない庭、右手にはドアが立ち並んでいる二階の廊下。

明かりが微かに入る月光のみのそんな廊下を二人の男が足音一つ立てずに歩いていった。

その姿は闇に溶け込むかのような黒いスーツ。手には拳銃を持ち、彼らは何かを探すかのように一歩一歩足を進めて言っている。

彼らの目標である、二人の少女はまだ見つかっていない。

この建物を監視していた人員からの情報では、彼女達はまだ建物の外にでてはいない。つまりはこの建物の中にいるはずなのだが、まだ彼女達を発見することはできて来なかった。

この建物の中にはすでに6人の人員が侵入しており、目標を発見した時所持している笛を吹く手はずとなっている。

だが、すでに侵入してから数分が経っているのにもかかわらずまだ笛の音は聞こえない。

そこまで大きくないこの建物の中を、6人も的人数で手分けして探しているのに人間2人を見つけないができないのは些か奇妙な話である。

ならば考えられるのは、すでに目標に自分達の存在が察知され、隠れているという可能性。

一人の黒スーツはそう考え、相方の男の肩を叩き、身を寄せ小声で声をかけた。

「なあ、セットウ……」

「なんだ、シス?」

セットウと呼ばれた男は、怪訝な表情をしながら返事をする。

シスはそんな表情を見ながら、自らの考えを彼に告げた。

「流石にここまで探してどの班も目標を見つけれないのはおかしい。向こうに察知されていることを考えるべきだ」

現状の不気味さを告げるシス。

そんな心配性な相方の忠告に、セットウは薄く笑いながらその忠告を笑い飛ばした。「心配性だなシス。ただ運悪く見つけられてないだけかもしれないだろ」

自らの忠告を軽く扱うセットウにシスは、少し口調を荒くしながら言葉を続けた。



「運が理由であるものか。この建物の構造は単純なんだ。10分もあればさっさと人間一人見つけられるはず。それが見つかっていないということは向こうが隠れているってことじゃないのか？」

「それか、見つけたのはいいものの目標の手によって音一つ立てられず殺されているかだな。まあ ガリア課報機関 BCRAの人間が死んだ方が俺たちの仕事がやりやすくていいんだかな。」

「セツトウ…!! 無用心だぞ…!!」

セツトウの不用意な失言にシスは睨みつける。

だがセツトウはそんな鋭い視線を意に返さず、シスを置いてズンズンと前に前進していく。

「だれも聞いてやしねえよ。運悪くこのガキが聞いていたとしても目標もろとも始末すればいいさ。」

「目的は捕獲だぞ!」

「それは ガリア課報機関 BCRAの难道? 忘れるなよ俺たちは ガリア課報機関 BCRAと協力しているが同士じゃない」

「それは…」

「それに ガリア課報機関 BCRAからしたら、ただの窃盗犯の捕獲だが、俺たちにとってはスポンサー

のお願いだ。この願いさえ叶えてやればさらに俺たちは武器が増える。だから殺さなきゃならねえ。まさにガリア我が喜びつてな」

セツトウから語られる、物騒な言葉。

軽い口調で語られてはいるものの、語るセツトウの表情に冗談の色は一切見られず、その言葉が真実であると物語っていた。

そんな言葉への相棒からの返答はない。

だがセツトウはそれを気にせず、シスを置いてまだ未探索の場所に向けて歩みを進めていく。

彼は相棒が、組織に属しているが甘い考えを捨ててきていないことを知っていたため恐らくこの考えに同意しきれないから返事をしなかったのだろうと察していたのだった。

だが、その事実は違っている。

「なるほどね、随分と面白い話をしているじゃない」

セツトウの動きが数コマ停止した。

今真後ろから聞こえた声。

その声は聞き慣れた相棒の声ではなく、年若い女性の声であった。

そしてその声の持ち主が誰なのかは、考えるまでもない。

セツトウはすぐさま後ろを振り向き拳銃を向ける。

その動きは、声をかけられ1秒にも満たない素早い動き。

背後に向けられた銃を持つ手を、声をかけてきた少女によつて掴まれるがすでに照準は少女の頭に向けられていた。

背後にいた少女の髪は金髪。そしてその顔は手配書や指令書で散々見た目標の幼い顔。だがその表情は仮面のように無表情。

つまり目標の人物がそこにいたのだ。

ガリア課報機関BCRAからの指令は彼女の捕獲であり、決して殺害ではない。

だが、彼女の顔を認識した瞬間にセツトウはおもむろにトリガーを引いた。

それは ガリア課報機関BCRAの指令を無視する行為。

だがセツトウはそれを意に返さず、戸惑い一つなく引き金を引くために人差し指を動かす。

なぜなら彼には別の使命があるからだ。

しかし、それは未遂に終わった。

「なッ!?!」

動かないのだ。

トリガーを引くための人差し指が、いくら力を入れようともトリガーを引くことができないうのだ。

まるで動くはずのない巨大な岩を人差し指一つで動かそうとしているような感覚。

セツトウは重要な場面で故障したのかと疑問を抱いたが、その疑問はすぐに払拭された。

その疑問の答えは、自らの人差し指が今触っているものを視界に入れたことでもたらされた。

「——嘘だろ……？」

セツトウがそうぼやくのも無理はない。

シールドが貼られていたのだ。

極小さなシールドが、拳銃のトリガーとトリガーを引こうとするセツトウの人差し指との間に展開されていたのだ。

そのためトリガーを引こうとしている人差し指はシールドにあたり、シールドはビクとも動かない。

セツトウは20代後半の男だ。決してウィッチではない。

ならば、このシールドはなんなのか？誰がやったものなのか？

その答えを想像することはたやすい。

今、拳銃を持ってしているセツトウの腕を左手で握りながら、頭から猫耳を生やし、腰を深く落とし、右腕を弓のように引く、この少女が犯人であるに違いないからだ。

そんな彼女がやったのは、トリガーと指の間に、ピンポイントにシールドを展開するという曲芸じみた普通から逸脱した技。

普通のウイツチでは行うことすら難しい理外の技。

そしてセツトウはそんな曲芸を行なった少女が今からやろうとしていることも、容易に想像できていた。

しつかりと落とされた腰、目標に対してしつかりと正面を向いている体、魔力が使われていることを証明する猫耳、そして魔力が込められている右腕とその拳を守るために貼られたシールド。

それらの要因をまとめると、今から起こることはただ一つ

「——まっ!!」

「寝てなさい」

ドンツツ!!

プロボクサーが渾身の右ストレートをサンドバックにぶつけたような鈍い音が廊下にかすかに響いた。

「——ッ!!」

少女の小柄な体格から打ち込まれたには重すぎる攻撃。

大人でも一瞬で意識を飛ばすような急所への一撃

そんなプロボクサーの渾身のストレートに似た一撃は的確にセツトウのみぞおちに直撃し、胃液と空気が体内から口へ吐き出される。

致命的な一撃、だがそんな攻撃を受けながらも、セツトウは辛うじて意識を保っていた。

それは日々の肉体鍛錬の成果の賜物なのだろうか？それとも維持と信念のおかげなのだろうか？　だが、今それはどちらでもいい。

飛んでいきそうな意識を必死に保ち、セツトウは眼前の少女に集中する。

眼前の少女は身長が150もないほどの小柄な体型。2m近い身長の子供からしたら、大人と子供の身長差である。

本来なら容易く体格差でひねり潰せるが、少女はウイッチだ。

人には持てないような重火器を、容易く振り回せるほどの身体強化を行うことができる。普通から逸脱した存在、それがウイッチなのである。

つまり、瀕死の自分では彼女に太刀打ちすることはできない。

セツトウはそう結論をだすと、すぐさま後ろに跳びのきポケットから笛を取り出す。

本来の目的なら、同志ではない。BCRA<sup>同僚</sup>が見つつける前に彼女を処理するべきなのだ。が、今の不利な状況では、そうも言ってはいられなかったのだ。

だが、それすらも、セツトウは行えない。

彼は後ろに飛び退いた時、何か足に引っかかった。

そのせいで、彼の体勢は崩れ、背中から地面に向けて体が倒れていく。

そして目の前には、トドメとばかりに必殺のストレートを振り下ろさんとしている少女の姿。

セツトウはまるでスローモーションのようにその光景を見ていた。

足を滑らせるようなヘマはしていない。

廊下につまずくようなものはなかったはず。

ならば今飛び退いた時に引っかかったものはなんだ？

体が地面にぶつかかるコンマ数秒の間、必殺の拳が顔面に振り下ろされるまでの刹那の一時、そんなわずかな時間でセツトウは自らがつまづいた原因のものをみた。

それは、小さく青白く光る物、文字列と魔法陣が描かれた半透明の物体。

そう、地面から少し浮いた場所にウィッチのシールドが展開されていた。

これを誰が設置したのは考えるまでもないだろう。

二度も同じシールドに行動を阻まれ、トドメの一撃は眼前に迫っている。ウイツチとはいえ小さな子供にいいように踊らされたことに、セツトウは怒りの声を張り上げようとするが：

「だから寝てなさいって」

無慈悲な少女の言葉と共に、セツトウの顔面に拳が振り下ろされた。

## 2.

ジェイミーは、眼前に横たわる男を見下ろす。

その男の鼻はひしゃげ頬骨だけでなく上顎骨が破壊されていた。

もはや、高額な整形手術を受けない限り元の顔に戻ることはないだろう。

そんな哀れな被害者の事を加害者であるジェイミーは少し哀れみながらも、魔導針を展開して周囲の状況を確認する。

魔導針で反応を示した動く対象は、周囲には自分を含めて2人しかない。

それ以外の反応は同じ建物内だが離れたところにある4つの反応と庭の外周にいる4つの反応、そして寝室にある複数の反応。

寝室は子供達とイリスだろうし、建物内の4つは他の諜報員、外周の4つはおそらくは見張りだろう



それを確認し終わるとジェイミーは、おもむろに先ほどセツトウと呼ばれていた男の服を脱がし始めた。

ぐったりと動かない人間の服を脱がすのはなかなか難しく、四苦八苦してしまう。

そんな苦勞して服を脱がしているとジェイミーの背中から小さな口笛が聞こえた。

今の状況に似つかわしくない口笛。

ジェイミーが振り向くと、そこには一人の男がいた。

その姿にジェイミーは見覚えがあつた。いや見覚えしかない。

なぜならその顔は今彼女が破壊した顔であつたからだ。

そう、セツトウと顔や体型まで完全に同一人物がそこにいた。

その顔は今目の前にあるぐちゃぐちゃに整形された顔ではなく、ジェイミーに殴られる前の端正な顔がそこにある。

同じ人間が二人いるありえない自体。

だがジェイミーは警戒せずに呆れた視線を新たに現れたセツトウに向けた。

「余計な音は出さないで、見つかるでしょ」

そんな呆れた声に対してセツトウはニヤケながらその声に答えた。

「敵の位置は君の魔導針でわかるから心配ないサ」

「だからさつきも言ったでしょ。今の私の魔導針はユニットがないから精確じゃない。

見逃しもあるかもしれないのよ」

「此方は君を信じてル」

「そういう事じゃないし、心にも思っていないことを言うなバカ狼」

そんなジェイミーのため息のような呆れた声にセツトウ：いや、セツトウの姿に固有魔法を使つて擬態したルーガルーが嗤う。

モナコで見たときと同じ、完璧な擬態能力。

表情、体型、髪型、髪色、髪質、ホクロやシミなどの身体的特徴まで完璧にも同一な姿。

変装ではなく変身とも言うべきその固有魔法の真髓を改めて見たジェイミーは感心するしかなかった。

「相変わらずの変装ね狼」

「褒めてくれてもいいんだヨ？」

「変態じみた服装をした男を褒めるなんて趣味は持っていないわ。まったく：服もコピーすればいいのに、なんでわざわざ服を脱がさないといけないのよ」

「服までコピーするとコストが高いんだヨ」

そう語るルーガルーの姿は筋肉質な男の体が女性ものの服を着た変態じみた姿。

その服は先ほどまでルーガルーが来ていた服であった。

筋肉質な大男がその巨体に合わないピチピチに張っている女性ものの服を着る。

ここがリベリオンのブロードウェイにある劇場なら笑いを巻き起こすコメディアンとして人気を博したのかも知れない。

だが、ここはブロードウェイではなくガリア東部にある土地『ヴァランス』

しかも孤児たちが暮らしている児童養護施設の深夜の廊下。

言葉を偽らずに言えば不審者にしか見えない。

だがそう考えるジェイミーもまた、児童養護施設の深夜の廊下で男の服を剥ぐ痴女にしか見えないことを本人は意識していなかった。

そんな深夜の廊下で男の服を剥ぐ少女は、ルーガルの姿をジロリと見た。

「そんな大男の体になっているのによく、さっきまでの服が着れるわね」

やつと上着を脱がし終えたジェイミーが、嫌な顔をしながらズボンも脱がしに取り掛かると同時にルーガルに問う。

そんな姿をニヤニヤとルーガルは見つめながらその質問に答える。

「此方の固有魔法は見た目だけをコピーするものだからネ」

「見た目だけ？」

「簡単に言えば見えるけど触れない着ぐるみを着ているようなものサ」

「それなら服もコピーすればイイじゃない」

「だから、服もコピーするとコストが高いんだヨ」

「コストつてなによ」

「秘密。君も自分の固有魔法の全ては教えてくれてないだろウ？だからお互い様サ」

「……チツ」

そんなもつともな意見に、ジェイミーは舌打ちをしながら脱がし終えたズボンと上着をルーガルーの顔面に投げつけた。

ルーガルーは投げられた服を容易くキャッチすると同時に着替え始めた。

テキパキと着替えるルーガルーの姿をジェイミーは見ながらもその視線をルーガルーの傍に向ける。

そこには一人の男が倒れ伏していた。

その男は先ほどシスと呼ばれた男性。

だらりと体が弛緩していることから意識がないことは一目でわかる。

なぜ彼がこんな事になっているのか。

それは先ほど天井に魔力を使って張り付いたルーガルーが真下を歩いていた彼を両手で釣り上げて、瞬時に首を絞めて意識を奪ったからだ。

そんな彼を見ながらジェイミーはルーガルーに声をかけた。

「殺してないでしょうね狼」

そんなジエイミーの言葉に対してルーガルはいつものニヤケ顔で答える。

「殺すなど言ったのは君だろウ？それに殺したら厄介なことになるぐらい此方にもわかるサ」

「どうだか…」

ジエイミーは疑うような視線をルーガルに見せた。

その様子に着替え終えたルーガルはヤレヤレとジエスチャーして見せる。

「どうやら疑っているようだネ。気になるなら近づいて確認すればいいサ。でもそつちの彼は殺した方がマシじゃないかい？酷い顔だヨ？」

ルーガルはジエイミーによつて顔面の強制的整形手術を受けた哀れな被害者の整形後の顔を見ながら告げる。

ピクピクと痙攣している彼の姿はあまりに哀れなものであった。優秀な治癒魔法でも使わなければ彼の顔は元に戻らないだろう。

それならば殺してあげたほうがいいというルーガルの意見に対してジエイミーはため息をつき返答する。

「だから、殺したら余計な恨みを買って血眼になって追われる事になるから殺すなつて言つてるでしょう。殺すときは身元がバレない時か本気でマズイ時のみにしなさい」

「殺傷はするなつて言っているわけじゃないんだネ」

「……好き好んで殺しはしないけど、こんな仕事をしている以上やるときはやるわよ」  
「そうかい、そうかい」

ルーガルーはジェイミーの答えに満足そうに頷くとパチンと指を鳴らした。

すると倒れていたシスの体が黒く染まり始め、夜の廊下の暗闇に溶け込みはじめる。

それはまるで虫が枯葉や木に擬態する時のような現象。しつかりと見つめればすぐ  
にバレるような擬態だが、注意してなければ見逃すような擬態。

「デタラメね」

「制限と限度はあるけどネ」

「それを言う気は？」

「ないヨ」

そんなルーガルーの答えにジェイミーは、ため息をつくとともにセツトウを俵担ぎで担  
ぎ上げた。

2 m近い身長の大男を軽々と小柄な少女が持ち上げ悠々と廊下を歩き始める。

そんな珍妙な光景だが、これも魔力の力の賜物だろう。

その様子を見ながらルーガルーは可笑しそうに笑い、尋ねる。

「彼を連れていくつもりかい？逃げるのに邪魔になるよ？」

ルーガルーの言うことも最もである。

ただでさえ追われている状況にもかかわらず、今ジェイミーが行っている大男を担いで逃げるという行為は、避けない荷物を増やすという状況を悪化させるような行動。

だがジェイミーにはこの男からどうしても聞き出したいことがあった。

だからこそ、スルーできたのに彼らを襲ったのだ。

「ねえ、狼。こいつが話していた事聞いてたでしょ」

ルーガルーの問いに対して、逆に問いで返すジェイミー。

その問いに対してルーガルーは軽快に答えた。「。

「聞いてたけど？ 確か『ガリア我が喜び』だっけ？」

ニヤつきながら回答するルーガルー。

その表情にわかっているのにルーガルーが聞いてきている事に気がついたジェイミーは小さく嘆息してから答えた。

「だったらわかるでしょ。『ガリア我が喜び』……こいつら王党派よ」

ガリア王党派

政治体制が共和制のガリアにおいて、王政に戻すべきだという思想の人間が集まっている派閥。

これがただの思想だけならば問題はないが、問題は彼らの一部が王政復活のためには

手段を選ばないテロリストであることであろう。

彼らは古くからガリアの政治の奥深くに根付きガリアが帝政だった頃から存在した貴族たち。混沌とし策謀が渦巻いているガリア政府が今の状況に陥った原因の一つとも言わべき存在である。

彼らは『ガリア、我が喜び』という合言葉とともに常日頃から暗躍している。

そしてその合言葉が先ほど、このセツトウという男から語られた。

しかも、彼が語っていたことを真実とするのなら、王党派は ガリア諜報機関 B C R A と繋がっているという。

そして何より、彼はジェイミーたちを殺すことを目的としており、その理由はスポンサーのお願いと語った

つまり、このセツトウという男は、ジェイミーを陥れた存在を知っている可能性が高いということだ。

だからこそ、ジェイミーは彼から話を聞くために連行しようとしているのだ。

「王党派が ガリア諜報機関 B C R A と一緒に行動ネエ……」

ルーガルのぼやくような声。

その声をこぼした彼女の表情はいつもの顔とは違うが、明らかに楽しんでいるような



表情であつた。

相変わらずのその表情を見て呆れながら、ジエイミーは魔導針で敵がいな一方角を見つけると共に前進しこの建物から脱出を図る。

周囲には相変わらず誰もいない。ならばさつきとこの場から逃げるべきだ。

ジエイミーはそう思うとともに先ほどよりも足早に廊下を突き進み出口を目指す。

目指す場所は一階の調理室にある裏口。

そこから外に出るためにジエイミー達は突き進む。

暗い廊下、あかりは右手の窓から降り注ぐ月光のみ。

だがその月光も雲のせいで途切れ途切れとなり、月光の明かりの乏しいこの廊下は闇に沈んでいる。

そんな闇に沈んだ廊下をジエイミーは大男を担ぎ歩みを進める。

そんな彼女の後ろに付き従いながらルーガルの軽口がジエイミーに投げかけた

「まったく、きみのおかげで余計な手間が増えるヨ」

そんなおちよくなるような言葉にジエイミーはカチンと少々頭にきながらも言葉を投げ返す。

「この行動を余計な手間というのなら、さつきの服剥ぎはどうなのよ」

「あれは此方が変装するために必要だったからサ。変装していたら敵に見つかった時う

まく切り抜かれるヨ」

「敵に見つかる予定はないわよ」

「もしものためだよ。なんだイ？不満だったのかイ？君も嬉々として男の服を脱がしていたじゃないカ」

モナコの時から変わらない人を煽るために生まれてきたような人をおちよくる言動。

普段のジエイミーなら怒り心頭で掴みかかったかも知れないが、今は仕事モード。

一度深呼吸をした後、ジエイミーは立ち止まり、後ろを振り返った。

「だれが好き好んで見ず知らずの男の服を脱がすのよ。あれはそもそも、あんたが頼んできたからしよがな…」

ジエイミーの言葉が突如途切れる

なぜならば、その言葉を遮るかのように突然ガラスが割れたからだ。

ガラスが散乱し、廊下に巻き散らかされる。

割れたガラスはジエイミーの真横のにあった窓ガラス。

なぜそのガラスが割れたのかその答えは簡単だ。

ガラスが割れたと同時にガラスの対面にある壁に弾痕が現れたからだ。

銃声が聞こえたからだ。

ジエイミーの肌を銃弾がかすったからだ。

もし不意にジェイミーが立ち止まっていなかったら脳天を撃ち抜かれていた現実には二人は戦慄しながらゆっくりと右側に顔を向けた。

彼女達の視線の先は割れた窓ガラスから見えるのは真つ暗な外の景色。

その時、雲が晴れたのか月光が庭を照らす。

すると十数メートル先にある児童養護施設の玄関門に複数の人間がいた。

軽機関銃であるMAS-38を構えた数人の男達。そしてグラーズ銃という骨董品を持ち、暗闇だったのにもかかわらずジェイミー達に的確に銃身を向けている一人の少女。

その少女の頭にはネズミのような耳と魔導針が展開され足には陸戦脚がつけられていた。

ジェイミーは驚愕に目を見開く。

それは敵にウィッチがいたことか？暗闇の中正確に自分たちのことを発見されたことか？

確かにそれもあるだろう。

だが一番に驚いたことは、目視しているのにもかかわらず彼女達の存在をジェイミーの魔導針が捉えていないことだ。

ジェイミーの魔導針は今此方に対して各々狙いを定めてきている少女や男達の反応

を探知できていない。

まるで何かに隠されているかのように、はたまた魔導針が妨害されているかのように。

しかしそれを深く考える時間はない。

「<sup>く</sup>D<sup>そつ</sup>a<sup>た</sup>m<sup>れ</sup>n i t」  
「<sup>く</sup>q<sup>そつ</sup>e<sup>た</sup>p<sup>れ</sup>r t」

ジェイミーとルーガルーの口からモナコ地下で吐いた時と同じ悪態がこぼれた瞬間には、おびただしい数のMAS-38から放たれた銃弾の暴風雨が二人の周囲に叩きつけられていた。

## 5話 鼠と偽造

1.

A M 0 0 : 0 8

「いったいこれはどういう事だ！あそこを戦場にでもする気か!!」

0時も過ぎ去ったガリアのとある施設の一室にて、一人の男の怒号が響いた

ここは ガリア 課報機関 B C R A の施設の一室であり、情報が集まる場所の一つ。

そんな部屋の一室に二人の男がいた。

片方の頭が禿げている男はコメカミに血管を浮かせ顔を真っ赤にして怒り声を張り上げている。

だが、そんな怒声を聞いているもう片方の男、スーツを着た初老の男は、そんな怒声を意に返さず飄々と受け流していた。

「敵が打ち返してきたからしょうがないでしょう？あのまま打ち返さなかったら被害は増えていました」

「しょうがないわけがあるか!! まだ子供がいた孤児院に M A S - 3 8 でいくつも銃弾

打ち込んで穴だらけにして、しかも捕獲予定だった手配犯を射殺だど!? 何を考えている!!」

ドン! という強い音とともに、禿げている男は拳を机に叩きつける。

机の上に乗っていた書類やペンが卓上を転がって行く。

そんな様子を目で追いながら初老の男は禿げている男の怒声に答えた。

「凶悪犯を捕まえるためには必要なりスクでした。それともあれですか? もしや、銃器を持っている相手に対して無手で捕まえるともいうつもりですか?」

「そんなことを言っているのではない!! 貴様は最初から手配書のウィッチを殺す気で部下を向かわせたのだらう!」

「そんなわけではないでしょう」

「だったらこれはなんだ!!」

禿げた男は机に散らばっている書類を初老の男に突きつけた。

その書類には初老の男の行動や指揮した事柄の内容が事細かく書かれていた。

それは、506 JFW が慰問活動をする予定の児童福祉施設に二人の不審者が現れ、

その内一人の身体的特徴がモナコでの騒動で手配されているウィッチに似通っている情報が報告された事。

そしてその捕獲のために ガリア課報機関 BCRA の人員を向かわせた事。

それだけではなく、初老の男の手駒も後から向かわせた事。

そしてその手駒には捕獲目的ではありえないほどの武装を持たせていた事

そしてその結果、児童福祉施設は軽機関銃により穴だらけになり、BCRAガリア課報機関の人員

も2名重傷を負って病院送りになり、そして二人の不審者は銃弾によつて穴だらけに見つかったなど様々な情報が書かれていた。

明らかに過剰な武装と攻撃。捕獲ではなく最初から殺す気で向かわせたと思像するのは容易い情報が書かれた文章

だが、これらの行動が行われたのは今から二時間と少し前。そんな情報が約二時間でまとめられてここまで事細かに書かれているというのは、この行動を起こした初老の男が監視されているとしか言いようがないような証拠の文章である。

だがそんな事実在眉ひとつ初老の男は動かさず、その書類を一通り見て口を開く。

「モナコの騒動を聞いて、かのウィッチが生半可な装備では対処できないと思つたのですよ」

「減らず口を…!!」

「それにしても、ずいぶん詳しく書かれているものですね。私を監視でもしていたのですか？仲間なのには？」

初老の男の言葉を秃げた男は鼻で笑う。

「何が仲間なものか！お前たち組織と私たち ガリア課報機関 B C R A は一時的に手を組んでいるだけだ」

「それは残念ですね。ですが、今回の作戦の指揮権は私たちが握っている事を忘れないでいただきたい。」

初老の男は言葉では落胆の言葉を紡ぎながらも、表情は一切変えずに返事をする。

そんな初老の男を禿げた男は睨みつけるが、一向に反応がないことを見ると忌々しげに表情を歪め傍にあつた椅子に深く座り、初老の男に忠告した。

「確かに上が貴様らを作戦の中核においている以上私には異論を挟む余地はないが、これ以上余計な真似をして ガリア課報機関 B C R A …いやガリアに不義を働いてみる。その代償は高くつくぞ」

敵意の籠つた重い一言。その言葉に初老の男はかすかに笑った。

「私たちがガリアに不義を働く…？ずいぶん面白くない冗談を言うものだ」

初老の男はそう言うのと、もうここには用はないと言うかのように、身を翻すと出口に向かつて歩いて行く。

そして出口の扉のノブに手をかけると同時に背後の禿げた男に言葉を残した。

「私たちは常にガリアの繁栄を願っている者たちの集まりだよ。ガリア、我が喜び」

初老の男が部屋を出て行き、ガチャリという音とともに扉が閉まる。



「——っ！」

カシャンという音とともに禿げた男が投げつけたペンが扉にぶつかり地面をコロコロと転がり、ぶつかつた衝撃でインクを漏らしながら地面を汚していった。

そんな自らが起こした無為な行為の結果をしばらく見つめた後、禿げた男はため息を吐いた。

彼は ガリア課報機関 B C R A の中の過激派と呼ばれる派閥に所属している。

そしてその過激派は今、ある『組織』と同盟を組んでいた。

その『組織』は王家とそれを補佐する貴族による絶対統治の復活を目論み、そのためならば手を血に染めるのも厭わない集団。

なぜ上層部が彼らと手を組んだのかは彼には一切わからなかった。

だがそのおかげで今506JFWでは着々と計画が進んでいる。

そのため、彼自身も不服に思いながらも組織の動向を見守っていたわけだが、そんな中この自体が起こった。

ガリア課報機関 B C R A が捕獲を命令していた新型ユニット窃盗犯の殺害。

これが過失ならば良かった。だが先ほど初老の男に突きつけた書類に書いている行動からして故意の行為であるのは確実である。

なぜ彼らが同盟関係である我らと関係が悪化するような事を行なったのかは想像が

できない。

もしかしたら殺害されたウィッチ達に何らかの殺さなければならぬ理由があつたのかもしれない。

その理由を禿げた男は想像ができない。だがそのことよりも懸念すべき事が彼にはあつた。

それはこの書類に書かれた、初老の男の手駒の兵達。

彼らの中には何とウィッチが一人配属されていたのだ。

そのウィッチはもちろん ガリア諜報機関BCRAどころかガリア軍に所属しているウィッチではない。彼ら『組織』に属しているウィッチだ。

しかもそのウィッチは陸戦脚を装備しており、彼女とともにいた他の兵隊達もMAS—38という第一線で使われている軽機関銃を各々装備している始末。

軍の1小隊と呼んでも遜色ないその潤沢な装備に禿げた男は疑念を持っていた。

どこからそんな装備が湧いて出ているのか？何故そんな装備を持つているのか？

彼は、それらの疑問を持つと同時に彼らの武器の出どころを知りたいという欲がだが、これを知った時、自身も窃盗犯のウィッチと同じように殺されるのではないだろうか？といううちから沸き起こる怖気に背筋を震わせる。

潤沢な装備を有し、政治界、軍部内などの至る所に潜んでいる『組織』

王家とそれを補佐する貴族による絶対統治の復活を目論み、そのためならば手を血に染めるのも厭わない集団

通称『王党派』

彼らの闇の深さは想像もできないほど深い物であると想像するには容易かった。

2.

AM00:09

ざわざわと人々声が響いている。

すでに遙か数時間前に太陽が落ち、月が輝いている0時すぎ、そんな真夜中の月明かりだけが頼りのはずの児童福祉施設の前は煌々と明かりがあふれていた。

照明が立ち並び、その中で様々な人が動き話している。警察、軍人、野次馬、そしてこの施設の孤児や従業員達。

軍人と警官は現場検証を行い、孤児や従業員達は調書を取られて、それを遠巻きに野次馬達が眺めている。

まるで昼間のような騒がしさだが、こんな片田舎でこんな大事件が起こったのならばこうもなるだろう。

そんな喧騒の中に一人、人々が忙しく動き回る場所から少し離れた場所、周りに誰もいない場所で施設の外壁に背を預けながら施設の外観を見つめタバコをふかす一人の男がいた。

その男は2 mを優に超えている身長の大男であるが、その体の大きさであるのにもかかわらず周囲と一体化するように息をこらし目立たないようにしている。

そんな彼の視線の先、孤児達が日々をクラス施設は銃弾の雨によって穴だらけになっていた。

何故、こうなってしまったのか？それは彼自身二時間前に実際に体感したため疑問に思うこともない。

二時間前に彼が所属する部隊とその増援部隊が二人の人間相手に派手な銃撃戦を行なったからだ。

本来ならば明日には506 JFWのウィッチ達が無情な状態になっているのは、原因の一旦でもある彼にとっては少々心が痛む光景であった。

捕獲任務は失敗。対象は2名とも殺害。部隊の2名は重症を負ったため、ここから車で一時間かかる病院へ車で搬送。

もはや目も当てられないような事態に我らが上官の頭はさらに剥げ上がる事だろうと、タバコを嗜んでいる男は思い、空に輝く星々に向かつて上官の頭皮の無事を祈った。するとその時、男のズボンが何者かによつて引つ張られる。

彼がそちらの方向を向くとそこには一人の短髪の少女がしゃがみながら、彼のズボンを引つ張り、彼を見上げていた。

その瞳はまるでガラス玉のようで思考が読めず、その表情も喜怒哀楽が抜け落ちたかのような無表情。

そんな低身長少女がそこにいた。

こんな深夜をただの少女が出歩くには不自然である。

だがその脚には重厚な陸戦脚がはめられており、背には旧式のライフルが担がれ、そして頭にはネズミの耳が生えていた。

こんな特殊な格好をするのは世界でも限られている。

そう：ウィッチ、それも陸戦のウィッチがここにいた。

そして彼自身、このウィッチには見覚えがあった。

何故ならば、彼女が二時間前に最初に施設に銃弾を打ち込んだ人間なのだから。

彼女の最初の一発に続いて多くの銃弾が施設に打ち込まれた。

それは施設の中にいた捕獲対象に向けられてものだったが、その時に捕獲対象を探し

て同じ建物にいた人間としては寿命が縮むような思いであった事を彼は忘れてはいない。

騒動が終わったあと、彼は一言文句を言おうと建物から外に出て野外にいた彼女に詰め寄ったが、彼女は表情を人形のようにピクリとも動かさずと突っ立っていたのを覚えていてる。

代わりに対応したのが、彼女と一緒に後から来た男達だ。

詰め寄った彼を引き剥がして、ただ一言「…関わるな」という言葉を残し、あたりの指揮を我が物顔で取り始めたのだ。

彼らは ガリア課報機関 BCRAと同盟を結んでいる、とある『組織』の人員であり、そんな彼らに言いたい文句は山ほどあったが、彼らが持っていた指揮系統を預かるという事が書かれた書類は正式なものであったため、彼らの指揮に従うほかなかったのだ。

だが、好き好んで気に食わない奴らに率先して協力する気も起きなかったので、不真面目にタバコを吹かしていたわけなのだが……

そう彼は思い、目を瞬かせるが、いくら目を瞑ろうとも今彼のズボンを引っ張る年少のウィッチの姿は幻覚のように消え去ることはない。

その現実には彼は苦笑いを浮かべるしかなかった。

まさか先ほど掴みかかって来た男に掴みかかれた少女の方からコンタクトがあるとは彼は思いもしなかったのだ。

基本的に男との接触を制限されているウィッチ、それも表立った組織ではない『組織』に所属しているウィッチとの接触は頼まれても嫌だったのだが、まさかの展開であった。

だが、目の前のウィッチは彼のズボンを掴み見上げるばかりで何も行動を起こしてこない。

じっと見つめるばかりで銅像のように動かない。

下手をすれば一生このままなのではないだろうかと彼の脳裏に浮かんでは消えていく。

時計の秒針が数センチ進んだ後、彼は観念してこちらからウィッチに対して行動をとることにした。

このままでと後何時間たってもこの目の前のウィッチは動かないのではないだろうかという懸念が浮かび上がったのだ。

「えーと、お嬢さん。何をしているのかな？」

男は精一杯のぎこちない笑顔を浮かべ少女に尋ねる。

すると少女は目をパチパチと瞬かせた後、やっと口を開いた。

「次の命令まで待機と言われたので待っています」

「なるほど…で、なんで俺のズボンを引っ張っているのかな？」

「あなたに気になる点を見つけました」

「…で、それは？」

「何故あなたはこんなところで仕事もせずに休憩をしているのですか？」

抑揚のない平坦な声。年頃の少女にしてはあまりに無機質な表情。

そんな少女の様子に男は少々気圧される。

彼女は『組織』が連れて来たウィッチ。『組織』については男は詳しいことは知らないが、ろくな組織ではないことは容易に想像でき、そんな『組織』に所属している彼女もまた、まともな経歴のウィッチではないだろう。

——この子と関わると厄ネタ抱えそうだな。適当に対応して離れるか

男は、そんな自己保身を考えてと同時に彼の口が開く

「休憩してるわけじゃない。ただ最初に命令されていた仕事が終わったから今は仕事がないだけだ」

「仕事があれば上官に尋ねればいいのでは？」



「あー…。ほら今指揮している上官忙しそうじゃないか。今声をかけに行くのは帰って邪魔になるぞ?。」

「他の上官は?。」

「ほら、他の上官も忙しそうだろ?。」

もちろん、上官が忙しそうなんて言葉は彼の口から出たでまかせである。

だが運良く、そう言った彼の視界の先にはあたりの人員に慌ただしく命令をしている『組織』の人間の姿があった。

少女も男の視線を追ってその様子を確認するが、すぐに顔を再度男の方に向け直して反論をする、

「ですが、命令をもらわなければ我々は何もできません。なので我々は次の行動のために上官から命令をもらわなければなりません。」

「そんなことはない。自己判断による行動も時には大事だぞ?。」

「…その自己判断の結果がタバコをふかして休憩ですか?。」

「そうその通り、時には自分であたりを俯瞰してどのように動くかを考えるのも大事だ。」  
「自己判断による行動は認められてはいません。命令を受けて私たちは行動しなければなりません。」

少女はかけからも疑念を抱いていない声で、その言葉を男に吐いた。

——こりやまた、ずいぶんな教育をしてるようで…

そんな言葉を聞いた男は表情を変えずに内心で毒づく。

年相応でない言葉遣いや考えを持つ少女達の存在は今の時代珍しくない。現に軍の中には大人も顔負けの威厳を持った少女…ウイツチ達が多く存在している。

だが、そんなウイツチ達の中でも、ここまで命令を絶対視し、まるで奴隷のように忠実な無機質なウイツチを彼は見た事がなかった。

何故彼女がこうなってしまったのか、彼にはわからないが、どうせろくな理由ではない事が容易に想像できる。

男はそんな少女に対してどのように返事をするか、行く通りかの言葉を頭に巡らせる。

そんな男を見つめる少女はまるで餌を待つ飼犬のようにじつと男を見守っていた。

側から見れば、兄に何かを強請<sup>ね</sup>つている妹にも見えなくもない。

だがその実態はガリア課報機関BCRAの過激派に所属する大男と怪しげな『組織』に所属するウイツチという表向きにはできない人間同士。

そんな状態が数秒すぎると、やっと男は口を開いた。

「あー……お嬢さん。その考えは逆に怠惰だぞ？」

「怠惰……？」

思いもしなかった言葉に少女は首をかしげる。

先ほどまでの無機質な人形のような様子と違い、少し年相応な表情を見た男はかすかに笑いながら言葉を続ける。

「そう、怠惰だ。部下一人一人の全ての行動を一から百まで命令していたら、指揮官の処理能力をオーバーするに決まっている。」

「……うん」

「だからある程度、部下達が自主的に行動しなければ指揮官も困るってものだ。」

「……うん」

「それなのに、いちいち命令を聞きに行こうとするのは自分から仕事をしない、つまり怠惰と変わらないってことだ」

「……うん」

男は得意げに少女に語って行き、それを少女は一つ一つ頷きながら聞きいつている。

妙に素直な少女に違和感を持ちながら男は話をまとめることにした。

「だからお嬢さんも、怠惰にならないために、自らやらなければならぬと思つたことはやらなくてはな。それが俺たちのガリアのためにもなる」

「ガリアのために……?」

「そう、ガリアのためだ。お嬢さんのような優秀なウィッチが怠惰ではなくなつて必死

にやるべき事をやればより一層ガリアは復興を遂げるはずさ！みんな大喜びだ」  
「ガリア…喜び…!!」

「だから、今すぐ俺なんて構わずに自らやるべき事をやって来るのだ！」

男はそう言うのと、まるで子供の門出を祝うかのように両手を広げる。

だがその彼がやっている事はただの厄介払いである。

しかし、そんな三流詐欺師のような口車に少女は、瞳にすこしキラキラとしたものが混ざり悟りを得たかのように頷き立ち上がった。

—— やつとこれでどこかに行ってくれる

男が内心そんな安堵の息を吐く

……だが、世の中そんなにうまく事は運ばない。

少女は立ち上がると同時にがっしりと男の腕を握りしめた。

それはまるで父親の手を引く娘のような光景であるが、掴まれた方は突然のことに石のように固まる。

そんな石を見つめながら少女は言う。

「じゃあ、行きましよう」

—— え？どこに？

そんな男の胸中の思いも無視するように少女は男を引つ張りズンズンと進んで行く。

男は少女の突然の行動に足を引つ掛けながら引つ張られて行く

彼は慌ててその行動の是非を少女に聞いた。

「ちよ……!! お嬢さん!? 一体何を?」

「私の発砲の許可には上官が必要です。あなたは確か私よりも階級が高いはずですよね  
ジャン＝ボニスール中尉」

「な、なんで俺の名を……いやその前に、上官が必要だったら、俺じゃなくていいのでは!」  
「あなたが他の上官は忙しいと言ったじゃないですか」

そう語る少女の目は、先ほどのジャンの言葉をかけながらも疑っていないようであった。

その様子にジャンは冷や汗をかく。

——いや、この子、人の事信用しすぎだろ……!?

そう彼は胸中に独白するが、その体はズンズンと進む少女に引つ張られて行く。

「ま、待ってくれ。とりあえず発砲許可に俺が必要なのはわかった。だがなぜ発砲する必要があるんだ?」

至極真つ当なジャンの意見。

すでに手配犯であつた犯人は先ほど射殺され、もう騒動は終わっているはずなのだ。

だが、少女はそんな意見を聞きながらも陸戦脚を履いた足を動かし語つた。

「当初の目標のウィッチを追います」

「…はあ？」

思いもよらない言葉にジャンの口から声が漏れる。

わけがわからない。その目標のウィッチはすでに射殺され、今その死体はまだ施設の二階に放置されている。

身体中穴だらけになった彼女達が生きているとは到底思えなかった。

「いや、すでに死んでいるだろう？」

「上官殿にもそう言われ、ついに頭がおかしくなったのか、後で調整するから黙っていると言われました。あなたも私にそう命令しますか？」

少女のそんな言葉にジャンは眉をひそめる。

少女に対して『ついに』頭がおかしくなったのか、『調整』する、などという言葉を使う少女のいう上官に不快感を抱いたのだ。

確かに、くだんの手配犯のウィッチの死体はジャンも確認している。確認して、こんな少女が穴だらけになって死ぬ現実には嫌気がさしたのも覚えている。

だがそんな穴だらけの死体となった手配犯のウィッチを生きると言い、目の前に死体があるのにも関わらず、追跡するなどと言われると、そう語る少女の頭がおかしく

なつたと表現するのも無理はないだろう

だがそんな嘘、または何の確証もなくそのような事をこの人を信用しすぎる少女が語るとはジャンは思えなかった

「いや、俺はそんな命令をしない。ただ何でそんな事を思っただんだ？」

ジャンは少女にそう語ると少女はその答えを返答し始めた。

「見た目は変わっていましたが、彼女達が車で運ばれて行くのを目の前で見ました」

「見た目が変わっていた？」

「はい、見た目は男の怪我人になっていましたが、魔力反応は完全にあの手配犯のウィッチでした」

「…は？」

ジャンの脳裏に二時間前の事が思い浮かぶ。

それは二時間前にジャンと同じように施設内の搜索に駆り出され、最終的に重傷を負った同僚。

そしてその相方であるもう一人は、怪我をしながらも重傷の相方を心配し取り乱していた。

そんな彼の提言でその二人と付き添いの運転手の合わせて3名は車でここから一番

近い病院があるリヨン市向かって行ったのジャンはこの目でしつかりと見ていた。だが、今思えば少しおかしい。

確かにあの二人は仲が良かったがあそこまで取り乱すような人間だったか？

長い付き合いではないが彼はそこまで取り乱すような人間ではなかったと思う。

そして、重傷だった同僚も、その傷の深さ具合を確認したのは誰だ？

重症の同僚は血だらけではあったがその状態を確認したのは、あの取り乱していた相手だけだ。

…誰も重傷の同僚の容体を診ていないのである。

その事実が気がついたジャンは頭を抱え少女に問う。

「待て、なら何だつて？あの病院に行った俺の同僚は実は敵の変装だつて言うのか？体格も顔も同じだったぞ?!」

「そういう固有魔法なのでしょう」

「なら、俺の同僚はどこに?」

「二階にあります」

『います』ではなく『あります』

彼女はそう言った。

病院に行った二人の同僚が、死体になっていると思われた二人ならば、病院に行った



と思われていた二人の同僚はその逆となる。

つまり、同僚は二人ともすでに、穴だらけの死体になっているということだ。

しかもその穴だらけの原因は言わずもがな、後からやってきた『組織』の人間達が放ったMAS—38の銃弾が原因だ。

つまり『組織』の人間に ガリア諜報機関BCRAの人員が殺されたことになる。

「マジかよ……勘弁してくれ」

目標を取り逃がしたどころか、味方殺し。しかも殺したのは同じ組織ではなく同盟関係の『組織』である。

考えるだけでも今ここにはいない上司の禿頭に残ったわずかな髪の毛が死滅するに充分な厄ネタである。

そして問題は、その事実を知っているのが目の前の少女とジャンだけであると言うことだ。

ジャンも一介の諜報員。様々な機密情報を手に入れた事はある。だが、ここまで一歩取り扱いを間違えると爆発する火薬庫のような情報を手にいれた事はなかった。

「頭を抱えてどうしたのですかジャン？ ボニースール中尉？」

自身がどんな爆弾を吐露したのか理解していない少女の声がジャンの耳に入る。

そんな声を聞きながらジャンは知恵熱が起きそうなほど思考に没頭していた。

この情報をどう使えばいい？すぐにでも上司に通信で連絡するか？だが、その途中で『組織』の耳にこの情報が入った時何が起こる？その危険性を考えて直接伝えに行くべきか？それよりも逃亡した手配犯はどうなった？

様々な考えが頭の中をめぐる。

堂々めぐりに近い思考の中、手を引く少女がコテンと不思議そうに首を傾げた時。

「少し……いいかな？」

ポンとジャンの肩に手が置かれる。

その手はジャンの考える問題を解決する救いの手。

だが、その手がジャンにとって良きものであるとは限らない。

ジャンは恐る恐る背後を振り返り、その人物を確認する。

そこには黒髪を後ろでまとめた、朴訥とした雰囲気少女がいた。服装はリベリオン陸軍航空ウィッチのベージュ色軍服の上に茶色のジャケットを着用している。そしてその表情はいかにも堅物そうな無愛想な表情をしている。

そしてその少女もまたジャンは見覚えがあった。

「ジーナ…プレディ中佐…?」

ジーナ・プレディ連合軍第506統合戦闘航空団ヘノーブルウィッチーズ B部隊隊長

デイジョンに基地を構えるB部隊の隊長が何故かそこにいた。

「私のことを知っているのか…ならちようどいい」

彼女はそう言うと、ズイツと顔をジャンに近づける

その瞳は彼女の固有魔法の名前と同じような鷹のような鋭い瞳。

獲物を逃さないその猛禽類の瞳にジャンはピタリとも動けなくなっていた。

そして彼女は口を開く

「今の話、もう一度聞かせてくれるかな?」

前から聞こえるのはまるで尋問のような鷹の言葉。

「早く行きましょう中尉。ガリアのために!」

後ろから聞こえるのは現状を理解していない鼠の声

———なんでこんな事に…

前門に鷹、後門に鼠。

そんなわけのわからない状況に陥ったジャンの口からポロリとタバコが地面に落ちて行つた。

3.

「うまくいくものだネ。それにしても迫真の演技だったヨ」

「あれぐらいの演技ができればM I 6の諜報員なんてやつてられないわ」

夜道を進む一台の車のなか、運転席と助手席に乗った二人の少女は軽口を交わす。

そんな彼女達の後部座席には簀巻きにされ呻いている一人のスーツの男がいるが、そんな事にせずには彼女達は会話を続け、月明かりに照らされながら車をパリに向けて進めて行つていた。

## 6話 パリと契約

1.

3月19日

A M 9 : 3 0

パリを覆う青々とした空の下。気分が盛り上がるような暖かな日差しが降り注ぐ中、そんな日差しが一切入らないようにシャツターが降ろされたとあるホテルの一室があった。

そこはパリの中でもそこそこ名が知れている高級ホテル。

そんなホテルの一室に普通ではありえないほどの機材が持ち込まれ、それを操る数人の人間たちがいる。

『王党派』と呼ばれる彼らは持ち込んだ通信器具を黙々と使い、警察無線など様々な無線を傍受し、聞き取れた情報を一人の初老の男に手渡していた。

彼は黙々とわたされるメモに目を通し、机に広げられたパリの地図に印をつけていく。

すると、また一枚の情報が書かれたメモが初老の男に渡された。

その内容を一目した男は皮肉げに口元を歪めてポツリと呟く。

「まったく、パリ市警とガリア課報機関BCRAは本当に優秀だな。こんなぐちゃぐちゃの指揮系統

であるのにもかかわらず、交通の要所には警官をこれでもかと配置できるのだから。これではどんな犯罪者も近づかないだろう」

そう語るとぐしやりとメモを握りつぶす。

そんな音に辺りにいる初老の男の部下がビクリと背筋を震わせ、初老の男はその様子を一瞥したあと、再び地図に新たな印をつけ始めた。

彼が書き込んでいる地図には様々なマークが記されている。

そんなマークの多くは、パリの駅や主要道路などに書かれていた。

「これではこちらにも身動きが取れないではないか」

初老の男は忌々しげに地図を睨みつけた。

このマークは無線から傍受した、警察の配備状況を記したものであり、地図に書かれたマークの多さから警察官が大規模に配置されていることがわかる。

つまりは、今のパリは多くの警察が張り込んでいるという状況である。

だがその配置は混沌としており、まるでいくつもの指揮系統があり、各自がバラバラに警官達を指揮して配置しているようであった。

なぜこんなにも大規模に警官が配置されているのか。

その理由は二つある。

一つ目は

つい4日前にガリア東部ドローーム県のコミュニオンである『ヴァランス』で発生した児童養護施設で発生した銃乱射事件

本当ならば ガリア課報機関BCRAや王党派の力で情報封鎖されるべき事件だったのだが、事件現場の児童養護施設の翌日が506JFWによつて慰問活動が行われる場所であつたため、この事件は注目を集めすぎてしまった。

それによつて、すぐに事件の匂いを嗅ぎつけた記者達によつてこの事件の概要は市民に広まつてしまった。

新聞の内容は要約するところなる。

『ヴァランスの孤児院にて無慈悲な銃撃戦』

深夜に児童養護施設に女性の二人組が訪れた。

そんな彼女らが訪れてすぐに彼女らを追つてきた軍との打ち合いが施設内にて発生。銃撃戦の結果二人組は逃亡してしまった。

またこの事件を引き起こした二人組が、先月モナコで起こつた新型ユニット強奪事件の犯人と同一犯であり、その彼女ら犯人がパリに向かつていたという情報が養護施設の従業員から語られた。

二人組の逃走に使われた車両はパリ近郊で見つかっており、彼女たちがパリに潜入している可能性は限りなく100%に近くなっている。

こんな記事が新聞に載せられてものだから大変だ。

犯人がいたとはいえ児童養護に銃弾を打ち込んだことが問題視され軍には連日抗議の電話、警察にはそんなパリに潜り込んだ二人組を早く捕まえて欲しいという要望の電話でててこ舞い。

こんな記事で徳をしたといえ、新聞が売れて喜ぶ新聞社と、先日起きた失態を別の事件によってあまり見向きされなくなつてホツとしている506JFWぐらいだろう。

そして、徳ではなく損をしてしまった軍と警察はというと

軍は ガリア諜報機関BCRAガリア諜報機関が起こした失態をなすりつけられたことに ガリア諜報機関BCRAへ抗議をおこない、 ガリア諜報機関BCRAガリア諜報機関は ガリア諜報機関BCRAで、 ガリア諜報機関BCRA内部の一派である過激派が起こした失態への追求が始まり、 ガリア諜報機関BCRAの過激派は過激派で、協力関係の『王党派』が起こした失態の濡れ衣を被せられた事に怒り、その代償を『王党派』に払わせようと躍起になっている。

まるでガリア内部の混沌とした政治事情を表したかのような各組織の責任の押し付け合い。その押し付け合いは事件発生から4日たった今でも繰り返されている。



また、それに加えて、各組織はこの失態を取り返そうと躍起になって二人組を探しているのだ。

警察は警察で、手配犯の彼女らを抑え込めるために躍起になっている。

市民に背中を押されているとはいえ、復興してまだ一年も経っていないパリ市警は、突然やってきた大物取りに張り切っているのである

パリ市警が行った事は単純だ

要所に警官を配置し、警備の巡回を増やす。そしてパリ市の住民に聞き込みをする。

それを大規模に行うのだ、この方法なら手配犯が普通の手配犯ならばそれだけで捕まったのだろう。

だが相手は、嚴重に警備されていたモナコから逃げ出し、ヴァランスではガリア課報機関BCRAや王党派の諜報員の目からも欺き逃げ果せた存在。

そんな方法で易々と捕まるわけがなく、むしろ逆に警戒されて逃げられてしまう可能性すらある。

そんなこと ガリア課報機関BCRAもわかっているのだろうが、それがでもパリ市警によってこの

ような捜査状況が行われているという事は、ガリア課報機関BCRAとパリ市警との間で情報の共有ができていない可能性すらある。

だが、共有できないのかもしれないだろう。なぜなら ガリア諜報機関 B C R A は今絶賛の責任の押し付け合いを行っており、この失態を取り返すために独自に彼女達を捕まえようとしている。

そんな軍部も警察も混乱しながらも二人組を捕まえるため動いているのが、理由の一つ目。

二つ目は王党派による ガリア諜報機関 B C R A 諜報員殺害と逃亡だ。

この事件は市民や記者には広まっておらず知っているのも一部の警察や軍人のみである。

事件は昨日発生した。

事の発端はディジョン基地にて506 J F W が先日セダン基地にて発生した爆発事件の調査指揮を行っていたクリス・キーラ少佐を逮捕したというもの。

逮捕した理由は、逮捕したクリス・キーラ少佐はクリス・キーラ少佐になりすましていた別人であり、セダンでの爆発事件に関与していた可能性があったからである。

またそれだけでなく、506 J F W に関連する調査をしていた記者を殺害した容疑もあつた。

そうして偽物のクリス・キーラは506 J F W の手柄によって捕まる事になったのだ

が、それに焦ったのが ガリア諜報機関 B C R A の過激派だ。

何故ならば偽物のクリス・キーラは ガリア諜報機関 B C R A の過激派と協力関係のある『王党派』の一員であり、彼女がクリス・キーラとして ガリア諜報機関 B C R A に潜り込めたのは過激派の手助けがあつてからこそのものであつたからだ。

そんな偽物のクリス・キーラが口を割ってしまったら過激派の関与もバレてしまう。だからこそ過激派は早々とクリス・キーラの護送手配の書類を作成し、それを使ってクリス・キーラを506 J F W の手から奪い取つた。

おそらくそのまま過激派は彼女を殺害する予定だつたのだろうが、そこで問題が発生した。

なんとクリス・キーラの連行に506 J F W のジェニファアデ・ブランク大尉が護送に同行すると言いだしたのだ。

余計な人員に過激派の諜報員達は動揺したが、ジェニファアデ・ブランク大尉はリベリオン所属の軍人。

リベリオンの欧州への浸透に危惧し抵抗している彼らにとって、彼女は別に口封じとして殺しても構わない軍人であつたのだ。

そうして、クリス・キーラ、ジェニファアデ・ブランク大尉、運転手を含む諜報員3名の合計5名がセダン基地を昨日出発したのだが、半日後道中で行方不明となつた。

そんな行方不明の彼女達の車が発見されたのが今日の朝。

パリ西部のブローニユの森にて二人を載せた護送車が発見され、運転手を含む護送を行なっていた諜報員3名の死体が確認された。

クリス・キーラとジェニファード・ブランク大尉の行方はわからず、それに加えて凶器に使われたと思われる銃弾からはブランク大尉の指紋が検出された。

過激派の動向を知る人間ならば、おそらく返り討ちにあつたと推測できるが、それをしらない人達にとってはブランク大尉がクリス・キーラの逃走の手助けをしたと思えるような状況。

そんな状況で ガリア諜報機関 BCRAは警察の捜査を仕切り始め、パリにジェニファード・ブランク大尉とクリス・キーラが潜伏すると推測し、包囲網を敷き始めた。

だが、そんな突然的 ガリア諜報機関 BCRAによる捜査指揮の強奪に児童養護施設銃撃事件を起こした二人組の捜査も並列して行われているのも合わさって警察内の指揮系統が混乱し始めていた。

その結果3月19日の今現在。

パリという一つの都市内で『女性二人組の逃走者』を捕まえるという捜査を二つ同時進行で行なっているという事態になってしまった。

それに加えて警察内 ガリア諜報機関 BCRA内部でのいざこざも発生し指揮系統はめちやくちや。

地図に記された警察官達の配置は疎らでバラバラだが、交通要所にはしつかりと配置され、パリ全域に多すぎるほどの警官が配置されている。

そんな自体を警察無線の傍受した情報知った初老の男は忌々しげに表情をゆがめる。彼らは ガリア諜報機関BCRAやパリ市警ではないが、渦中の人物である『王党派』なのである。『クリス・キーラ』が逃亡者となり ガリア諜報機関BCRA過激派に同盟関係を切られた今、同じ組織にいる彼らもまた逃亡者となっていた。

だから、パリから逃げ出さなければならぬが二つの二人組がパリに潜伏し、それを追っている多くの警官や諜報員がパリを駆け回っている以上身動きが取れなくなっている。

すでに、多くの同志が捕まっている。しかし捕まったのは末端のものばかり。

末端のものが捕まるのはいい。だが問題はある程度の上の権限を持つものが捕まるのは避けなければならない。

それは今逃亡している『クリス・キーラ』でもあるし、いまこうやって顔をしかめて思考する初老の男もそうであった。

初老の男は思考する。

おそらくはキーラは長くパリにはいないだろう。彼女も優秀な諜報員だ。この程度の捜査網をくぐり抜け外に逃げるはずである。

そうやって彼女が捜査網を抜け出して自体が落ち着いた時に私たちも逃げればよい。……だが、それだけではダメなのだ。

初老の男はそんな考えとともに地図に指を這わせていく。

その経路は警官達が配置されている場所ではなく別の場所であった。

それは、銃撃事件を引き起こした二人組、ジェイミーとルーガルの目撃情報であった。

初老の男は眼下に広がるパリ市の地図中にポツリポツリ書き記された目撃地点に指を這わせながら彼女達がいると思われる場所に思考を巡らせていく。

そう、初老の男はこのままオメオメとこのパリを逃げ出すわけにはいかなかった。

それは、彼がこのパリに部下とともに来た任務が理由である。

その任務は『ジェイミー・ボンド』の殺害。そして『ジェイミー・ボンド』が『彼女』に接触することの阻止。

それは『教授』からの命令であり、『王党派』に所属する以上やらなければならない事であった。

だからこそ、多くの部下を連れ試作品の『ウィッチ』まで連れて来たのだが、その結

果が今の状況である。

同盟関係にあった過激派には同盟を破棄され、追われるものになってしまい、しまいには連れて来た試作品の『ウィッチ』とすら連絡が取れなくなっている。

泣きつ面に蜂のような状況に初老の男の胸中に焦りと不安が湧き上がってきていた。

「…随分と焦っているようだなエドムンド」

背後からの突然の女性の声。

先ほどまでは聞こえもしなかった新たな声色に初老の男：エドムンドは驚き目を見開くが、ゆっくりと振り返り背後の人物に目を向けた。

いつのまにか部屋に侵入していたその人物。

腰まであるロングヘアーを三つ編みにしてまとめており、黒地の赤色のラインが入った前開きコートと黄色のベルクロ付きワイシャツを着て黒いネクタイをした女性。

明らかに異質な服装をしたそんな女性がいっのまにか部屋に侵入していた事実には、通信器具かかりつきりになっていた部下達が次々に懐から拳銃を取り出そうとするがエドムンドはとつさに手を上げてその動きを止めた。

なぜならその人物は敵ではなく同盟関係にある組織の人員だったからだ。そしてそ

れに加えて、ただの拳銃では彼女に傷一つ付けられない事を彼自身知っていた。

彼は彼女の侵入に気がつかなかつた入り口の警備をしていた部下への文句を内心つぶやきながら口を開く。

「これは、これは。よくこの状況のパリにお越しくございましたね『オナトツプ』…申し訳ありませんが突然のご訪問だったのでお茶菓子の用意はできませんでした。次からは訪問前に一言言つてくださるとありがたいですね」

演劇のような芝居のかかつた物言い。

「…別に貴様とお茶を趣味はないし、ブリタニア人のようにいかなる時もティータイムを取るような暇人ではない。それよりも仕事の方はどうなつたかと気になつてな」

オナトツプと呼ばれた女性はエドムンドの言葉を軽く流し、まるで非難をするような目で彼を見つめる

仕事。つまりは『ジェイミー・ボンド』の殺害。

彼女はその催促に来たと言つた。

———こんな忙しい時に面倒な…

エドムンドは内心毒づきながらも表情を一切変えずに返答する。

「そちらからお願ひされたことに關しては今着実に進行中ですよ」

「…そうか、それにしても随分と時間がかかっているようだが？」



「こちらも少々立て込んでおりましてね」

「…なるほど。私は今パリに来たばかりで状況を知らないのだが何やら面倒ごとに巻き込まれているのか？」

「確かに巻き込まれていますが別にそんな大変な事ではありませんよ」

「…それはこのパリで起こっているお祭りに参加しているからか？ 貴様達のお友達のお子さんがガールフレンドを連れてパリでデートをしているようじゃないか」

エドムンドはその言葉に鼻白み視線をそらす。

そんな彼をオナトツプは喜怒哀楽が感じられない表情でじつとエドムンドを見つめる。

——なにが状況を知らないのですか。明らかに知っているではないですか

エドムンドは現状を知っているオナトツプに対してどう返答するか悩み思考を巡らす。

そんなとき、ため息が一つ聞こえた。

すぐに視線を前に向けるとオナトツプは呆れたように息を履いていた。

「…忘れないでもらいたいが、私たち『ヤヌス』と貴様達はお友達でも仲間でもない。ただの商売関係だ。契約関係だ。貴様達が武器を欲しがるから私たちは貴様達に武器を

下ろしている。」

オナトツプはそう語り部屋を歩き始める。

彼女が一步步くたびに小さな足音が鳴り、そんな小さな音一つ一つがエドムンドの心臓を重くしていく。

「…そしてそんな貴様達に私たちは武器ではなく人材すらも商品として売っている。そう彼女だ。その彼女はどこに？」

「いつもの場所に…」

「…そうか、変わらずこのパリにいるということか。変わらず彼女のわがままを聞いているということか。あれほど彼女をブリタニアが探していると言ったのに、わがままを聞いて外にだして」

追求するようなオナトツプの言葉にエドムンドはとっさに反論する。

「それは、あの女が現地の人間の治療をさせてもらわなければ研究に協力しないと聞いたからで…」

「…それが？」

「そもそも、そちらが『ウォーロック計画』の情報商品として渡してきたのに、あの女は要求を呑まなければ協力すらしてくれないのはどういうことですか!？」

「脅せばよかったじゃないか」

「それは無理だと貴方たちも知っているだろう!?あの女は痛みも死も恐れていない。計画が最悪な形で頓挫した時点で奴は自己の安全を考慮していない!貴方達が売って来たあの女は、お願いを聞かなければ働きもしないのは貴方達も理解しているはずですよ!」

「だとしても、それを分かって買ったのは貴様達で、そのお願いを聞いたのは貴様達だ。売った後の商品の事なんて私たちには関係がない。私たちは彼女をあなた達に売った時言つたはずだ。彼女を誰にも渡してはならない。彼女は『ウォーロック計画』の母親だ。彼女がもし他に渡るようなことがあるなら此方とそちらの契約を全て打ち切ると」

オナトツプがエドムンドの方を向き一步一步近づいてくる。

それはまるで猟犬が逃げ場を失った獲物に一步一步近づくようで、近づかれているエドムンドに恐怖を覚えさせるには充分であった。

エドムンドにとって死は怖くない

だが最も怖いのはガリアが、真の姿を取り戻せない事だ。

そして今、ガリアが真の姿を取り戻すために必要な物の一つ、それが武器だ。

軍からの横流し品は、数が限られる。密造品に関しては正規品に比べると安全性も性能も大きく差がある。ゆえに彼等との契約は王党派にとって金がある限り恒久的に性能が保障された武器や最先端の武器を供給できる大事な物であり、王党派の武力を支え

る大きな柱の一つである。

それが今、失われそうになっている。

理由、正当性、そんな物関係ない。

目の前の女『オナトツプ』の裁量ひとつで契約は打ち切られてしまう事をエドムンドは理解していた。

彼女にはそれができる地位にあるからだ。

今、自分が『オナトツプ』の機嫌を宥めなければ、契約が打ち切られる。

自分が真のガリアの復活の鍵を握っている。

それを自覚しながら彼は冷や汗を背中に垂らしながら返答をした。

「た、確かに最初に君達はそう言った、だが…」

「…なのに、『ボンド』が、ブリタニアのM I 6の諜報員がパリに来ているのに、彼女のわがままを聞いて未だに診療所に行くことを許可していると？」

「ああ…」

「…随分と面白いこと…だ!!」

ダンツ!!という音とともにオナトツプの足が床に叩きつけられる。

エドムンドに1mもないほど接近したオナトツプはまるで人形のような無表情で彼に詰め寄っていく。

「…忘れるな。『ボンド』がパリに来たのは偶然ではない。どこかで手に入れた情報から彼女が、『アルス博士』がパリにいることを知って来た。彼女がボンドに奪われれば貴様達だけではなく、私たちの存在も知られてしまう」

オナトツプはエドムンドの襟首を掴んで引き、顔を数センチのところまで近づける。エドムンドの視界にオナトツプの無機質な顔が広がる。人形のような表情。だがその瞳には何らかの重い感情を含んだ暗い闇が映されていた。

「…改めて言うぞ。『父』はボンドの処理に成功した時、今まで以上に貴様達に武器の優遇をしてやるという契約を貴様達の『教授』と結んだ。確かだな？」

「ああ、その通りだ」

「…じゃあ『アルス博士』が他の存在に奪われた時は？彼女が他の組織に情報を売った時の契約内容は？」

「……全ての契約の打ち切りと『アルス博士』を担当していたメンバーの処理」

「なら、ボンドの処理に失敗し武器優遇のチャンスを逃し、『アルス博士』をそんなボンドに奪われた時。『アルス博士』を担当している貴様はどうなるのだろうか」

呟くような最後の一言。

オナトツプがそんな言葉を残すと同時にエドムンドの襟首から手を離し、体を翻し出口に歩いていく。

そんな彼女をエドムンドの部下達は呆然と見送るしかできなかった。

そしてオナトツプが出口の扉のノブに手をかけると同時に背後言葉を残した。

「…もしボンドを処理した成功時、こちらが秘匿している『遺児』のデータを分けてやる。それなら博士はもういらないだろう？」

そんな言葉とともにガチャリと扉が閉まった。

わずか数分の出来事。

まるで嵐のような出来事に部下達が目を白黒させていると、ふと小さな水音が一人の部下の耳に入ってきた。

今日のパリは晴天であり雨が降っていることはありえない。

ならばこの水音は何だと、音の方向に視線を向けた時、目を見開いた。

「エ、エドムンド卿！」

部下の一人が慌ててエドムンドに近寄る。

彼の手は血で汚れていた。

彼は怒りとともに右手を握りしめ、その手から血が地面に滴り落ちていた。

彼の傷を気にかけて部下が近寄るも、エドムンドはそんな部下を振りはらう。

「私のことなどどうでもいい！それよりも動ける人員をシャン・ド・マルス公園に向かわ

せろ」

シャン・ド・マルス公園

24. 3 ha の面積を有するパリ有数の緑地であり、公園の北西側にはエツフェル塔、南東側にはエコール・ミリテール（陸軍士官学校）が隣接している場所。

そこでは、今では多くのテントが立ち並び、医療施設として機能している。

パリはある程度の復興はなされたが、戦争によつて多くの家や建物は破壊された。病院もそのひとつだ。

戦争で多くの傷病者を抱えているガリアにとつて病院の復活は急務であった。ゆえにガリア奪還後、早い段階でガリア政府はシャン・ド・マルス公園を病院として機能させ機能させた。

今では正式な病院が建てられ、その役目を終えたが、金がない傷病者や軽い怪我などを治療するための場所として多くのボランティアと共に未だにこの場所は機能している。

そしてアルス・フィーゼラー博士もボランティアの1人であった。

そんなアルス博士がいる場所に部下を向かわせると理由は一つしかない。

「エドムンド卿！本当によろしいのですか!？」

部下が驚き再度確認するかのように入ドムンドに問う。

そんな問いに入ドムンドはひたひたに皺を寄せながら答えた。

「いい。もともとアルス博士の管理は私が『教授』から任されているのだ」

「で、ですが今のパリは警官や ガリア諜報機関 B C R A の諜報員が……」

「くどいー」

エドムンドはそう声をあげると、再び地図に向き直り思考を巡らせる。

オナトツプからの詰問

迫り来る自らの死

そして何よりも自らの失態が『王党派』のつまずきになってしまふ事への恐れそれら全てが合わさりエドムンドの胸中に暗い影を落としていた。

2.

ホテルの廊下を一人の女性が歩いていく。

彼女は内心ご機嫌であつた。

なぜならば、全てが思い通りに進んでいるのだから。

ボンドは何かモナコからパリに来てくれた。

ガリア諜報機関  
B C R A と王党派はともに大混乱。



あとはボンドが多くの障害をくぐり抜けてアルス・フィーゼラー博士までたどり着くだけだ。

敵しい道のりだろう。

だが、ボンドならできるはずである。

『父』の要望通り、ボンドを殺すために彼女は動いた。中途半端に

『彼女』の要望通り、ボンドを生かすために彼女は動いた。中途半端に

全ては『母』のため

我ら『遺児』は動き回る。

彼女は廊下の窓からふと外を見る。

そこには鉄の貴婦人が優雅にそびえ立っていた。

戦争が起き、一度この場所を敵に奪われてもまだ存在する本物

再度作られたレプリカではないたった一つの存在

パリの象徴

『Pray for you』

彼女はそんな祈りを貴婦人に捧げ、歩いていく。

ボンドが博士だけではなく、遺児の母の元にたどり着くことを祈りながら。